

人間科学研究科教員が薦める
「私の一冊」

2026

人間科学研究科教員が薦める
「私の一冊」

2026

はじめに

この冊子は、大阪大学人間科学部・人間科学研究科のおもに新入生のみなさんに、教員からおすすめの書物を紹介するものです。それは教員の遠回しな自己紹介でもあるといえます。教員を知ってもらうことは、人間科学を知ってもらうことに似ているはずです。少し時間が空いたときに、紹介文だけでもよいので、読んでいただけたらうれしいです。

教員たちが研究者として日々取り組んでいる活動には、書物を通してはうまく伝わらないことはたくさんあるのですが、一方で、書物にしなければ表現できないこともあります。書物を通した学びも存分に。そして、それだけでは伝わらない部分は、授業や研究室で精いっぱい楽しみながら学んでいただけることを期待しています。いつかみなさんにも、学生時代の「私の一冊」を語っていただける日がくれば。そんなことを考えながらお送りします。

大阪大学大学院 人間科学研究科
附属 未来共創センター
5代目センター長 西森年寿

これまでの「はじめに」

私たちの人間科学部 研究科には、人文 社会科学から理系分野まで、あるいは主な研究場所が大学の実験室から学外の多様な人の集まり、村から大都市、そして、日本だけでなく海外まで、しかも、人だけでなくヒト以外の動物までを研究対象とする教員、研究者が集まっています。これは、1972年の人間科学部創設以来、「深い専門性」と「豊かな学際性」を大事にしながら、教育研究を進めるためには、とても大事なことでした。

(初代センター長 中道正之)

私は、「学び」は「遊び」に似ていると感じています。自発性そして探究心はそのベースにあること、学びの本質はそこにあります。この冊子を片手に、自由に人間科学の世界を飛翔してください。人間科学の未来を開いていくのは、皆さん一人ひとりです。

(2代目センター長 志水宏吉)

数千年前から、書物は私たちの人生の羅針盤であり、伴侶であり、揺り籠でもありました。さまざまな情報媒体があふれるこの時代にあっても、書物がもつ魅力と力は健在であると思います。この冊子は、大阪大学人間科学部・人間科学研究科に入学される学生のみなさんに、私たち教員がぜひとも読んでいただきたいと考える書物を紹介するものです。いわば、教員自身の人生の一片をここに込めていると言えます。冊子にこめた先人の思いを引用しながら、この冊子がこれからの大学生活のみなさんの最初の糧になることを願ってやみません。

(3代目センター長 山中浩司)

書物が消滅することを心配する声もあります。しかし書物が出来上がるまでに費やされる思考と労力はオンライン上のテキストとは比較になりません。書物においては、著者の練り上げられ推敲された思惟が、編集者などの他者の批評眼によって鍛え上げられています。この思考と労力の蓄積と凝縮ゆえに繰り返し繰り返し読むに耐えるテキスト、これが書物です。新しい思考を生み出すための土壌としてこのような書物は人類にとってこれからも不可欠のものでありつづけるでしょう。

(4代目センター長 村上靖彦)

目次

「私の一冊」—人間科学研究科教員が薦める本—

() 内は推薦者氏名

岩宮真一郎『音の生態学 —音と人間のかかわり—』	(青野正二) 1
スタンレー・ミルグラム『服従の心理』	(渥美公秀) 2
内田義彦『読書と社会科学』	(荒牧草平) 3
中井遼『欧州の排外主義とナショナリズム —調査から見る世論の本質—』	(五十嵐彰) 4
金菱清『震災メメントモリ—第二の津波に抗して』	(稲場圭信) 5
見田 宗介『まなざしの地獄 尽きなく生きることの社会学』	(今井貴代子) 6
アイリス・マリオン・ヤング『正義への責任』	(遠藤知子) 7
米沢富美子『「人生は、楽しんだ者が勝ちだ」私の履歴書』	(大谷順子) 8
山名淳『「もじゃぺー」に〈しつけ〉を学ぶ —日常の「文明化」という悩みごと—』	(岡部美香) 9
岡ノ谷一夫『さえずり言語起源論 —新版 小鳥の歌からヒトの言葉へ—』	(勝野吏子) 10
マイケル・トマセロ『ヒトはなぜ協力するのか』	(鹿子木康弘) 11
アリス・ウォーカー『カラーパープル』	(北山夕華) 12
フリードリッヒ・エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』	(木村涼子) 13
都留重人『公害の政治経済学』	(古賀勇人) 14
金井壽宏『働くみんなのモチベーション論』	(後藤崇志) 15

檜垣立哉『食べることの哲学』	(近藤和敬) 16
アルヴァ・ミュルダール、ヴィオラ・クライン『女性の二つの役割：家庭と仕事』	(斉藤弥生) 17
ジャレド・ダイヤモンド『文明崩壊（上/下）：滅亡と存続の命運を分けるもの』	(佐伯いく代) 18
青木省三『僕のこころを病名で呼ばないで』	(佐々木淳) 19
クリストファー・チャプリス、ダニエル・シモンズ『錯覚の科学』	(篠原一光) 20
信田敏宏『『ドリアン王国探訪記 —マレーシア先住民の生きる世界』	(白川千尋) 21
帯木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ—答えの出ない事態に耐える力』	(管生聖子) 22
筒井清輝『人権と国家 —理念の力と国際政治の現実—』	(杉本めぐみ) 23
エマニュエル・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち 都市・社会統合・アイデンティティの社会学』	(園山大祐) 24
角岡伸彦『はじめての部落問題』	(高田一宏) 25
居場所カフェ立ち上げプロジェクト『学校に居場所カフェをつくろう！—生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』	(玉城明子) 26
ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン I・II —社会的判断力批判—』	(知念渉) 27
上橋菜穂子『狐笛のかなた』	(徳永恵美香) 28
熊田孝恒『商品開発のための心理学』	(中井宏) 29
ノーラ・エレン・グロース『みんなが手話で話した島』	(中井好男) 30
リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット 『LIFE SHIFT』	(中川威) 31

ハラルト・シュテュンプケ『鼻行類：新しく発見された哺乳類の構造と生活』	(西村剛) 32
稲垣佳世子、波多野誼余夫『人はいかに学ぶか 一日常的認知の世界』	(西森年寿) 33
金出武雄『独創はひらめかない — 「素人発想、玄人実行」の法則』	(入戸野宏) 34
永井均『マンガは哲学する』	(野尻英一) 35
ジェローム・ブルーナー『意味の復権 —フォークサイコロジーに向けて』	(野村晴夫) 36
小林春美、佐々木正人『新・子どもたちの言語獲得』	(萩原広道) 37
アーシュラ・K・ル＝グウィン『ギフト 西のはての年代記I』	(福岡まどか) 38
嘉田勝『論理と集合から始める数学の基礎』	(福島健太郎) 39
西平直『誕生のインファンティア—生まれてきた不思議、死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議—』	(藤川信夫) 40
笠原嘉『軽症うつ病：「ゆううつ」の精神病理』	(藤野陽生) 41
ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン全集 9 確実性の問題・断片』	(松村一志) 42
安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』	(丸山真央) 43
山田風太郎『人間臨終図巻 1～4 (新装版)』	(三浦麻子) 44
上野英信『地の底の笑い話』	(宮本匠) 45
ピエール＝ジル・ドジェンヌ『科学は冒険！—科学者の成功と失敗、喜びと苦しみ』	(三好恵真子) 46
メアリー・C・ブリントン『縛られる日本人—人口減少をもたらす「規範」を打ち破れるか—』	(村上あかね) 47

上間陽子『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』	(村上靖彦) 48
グレゴリー・ベイトソン『精神の生態学』改訂第2版 (Steps to an Ecology of Mind)	(モハーチ ゲルゲイ) 49
Hugh Raffles 『Insectopedia』	(森田敦郎) 50
リチャード・E・ニスベット 『木を見る西洋人 森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』	(安元佐織) 52
小林朋道『ヒトの脳にはクセがある—動物行動学的人間論』	(八十島安伸) 53
竹内薫『理系バカと文系バカ』	(藪田 拓哉) 54
長谷川寿一、長谷川真理子『進化と人間行動』	(山田一憲) 55
釘原直樹『スケープゴートィング —誰が、なぜ「やり玉」に挙げられるのか』	(綿村英一郎) 56

「自著を語る」—人間科学研究科教員が著した本—

() 内は著者名

- 『災害ボランティア—新しい社会へのグループ・ダイナミックス』
(渥美公秀) 58
- 『きれいはいまもゆれている —外見・身体・アイデンティティの交差点—』
(飯塚理恵) 59
- 『ネパール大震災の民族誌 —共同性と市民性が交わる場で災害に対応する—』
(伊東さなえ) 60
- 『岩波講座 社会学 第3巻 宗教・エスニシティ』
(稲場圭信) 61
- 『水辺を活かす 一人のための湿地の活用— (シリーズ水辺に暮らす SDGs 第2巻)』
(太田貴大) 62
- 『四川大地震から学ぶ —復興のなかのコミュニティと「中国式レジリエンス」の構築—』
(大谷順子) 63
- 『子育ても、キャリア育ても —ウィズ/ポストコロナ時代の家族のかたち—』
(大谷順子) 64
- 『アメリカ創価学会における異体同心 —二段階の現地化』
(川端亮・稲場圭信) 65
- 『多文化社会の学校と教師教育 —ノルウェーと日本の国際比較研究から—』
(北山夕華) 66
- 『The Politics of Police Detention in Japan: Consensus of Convenience』
(クロイドン シルビア) 67
- 『ドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』を精読する —〈内在〉の哲学試論』
(近藤和敬) 68
- 『「共生社会」と教育—南アフリカ共和国の 学校における取り組みが示す可能性—』
(坂口真康) 69
- 『こころのやまいのとらえかた』
(佐々木淳) 70

『体験的 CBT：実践から内省への自己プログラム』	(佐々木淳) 71
『認知臨床心理学：認知行動アプローチの展開と実践』	(佐々木淳) 72
『臨床心理学 (New Liberal Arts Series)』	(佐々木淳) 73
『教師の社会学 —フランスに見る教職の現在とジェンダー』	(園山大祐) 74
『岐路に立つ移民教育』	(園山大祐) 75
『若者たちが学び育つ場所』	(園山大祐) 76
『新自由主義と教育改革—大阪から問う—』	(高田一宏) 77
『「かわいい」のちから：実験で探るその心理』	(入野野宏) 78
『見るだけで心が整う かわいい動物の写真』	(入野野宏) 79
『子どもとめぐることばの世界』	(萩原広道) 80
『現代東南アジアにおけるラーマーヤナ演劇』	(福岡まどか) 81
『なるほど！心理学研究法』	(三浦麻子) 82
『「答えを急がない」ほうがうまくいく —あいまいな世界でよりよい判断をするための社会心理学—』	(三浦麻子) 83
『ACE サバイバー —子ども期の逆境に苦しむ人々—』	(三谷はるよ) 84
『私たちはなぜ家を買うのか —後期近代における福祉国家の再編とハウジング—』	(村上あかね) 85
『摘便とお花見 看護の語りの現象学』	(村上靖彦) 86
『科学哲学講義』	(森田邦久) 87
『法と心理学』	(綿村英一郎) 88

—シリーズ 人間科学—

() 内は紹介者名

シリーズ人間科学

- (中道正之) 90
- 『シリーズ人間科学』第一巻「食べる」
(八十島安伸) 91
- 『シリーズ人間科学』第二巻「助ける」
(渥美公秀・稲場圭信) 92
- 『シリーズ人間科学』第三巻「感じる」
(入戸野宏・綿村英一郎) 93
- 『シリーズ人間科学』第四巻「学ぶ・教える」
(中澤渉・野村晴夫) 94
- 『シリーズ人間科学』第五巻「病む」
(山中浩司) 95
- 『シリーズ人間科学』第六巻「越える・超える」
(岡部美香) 96
- 『シリーズ人間科学』第七巻「争う」
(栗本英世) 97
- 『シリーズ 人間科学』第八巻「住む・棲む」
(檜垣立哉) 98

「私の一冊」

—人間科学研究科教員が薦める本—

岩宮 真一郎

『音の生態学 - 音と人間のかかわり -』

(コロナ社 2000年)

本書のタイトル“音の生態学”という表現には少し違和感を覚えるかもしれません。生態ということばは通常、生き物に対して使われますが、ここでは“音”、すなわちエネルギーの一形態によってもたらされる現象に対して使われています。わたしたちが日常耳にする音には、文明の発展に伴って生じた各種騒音、心癒やされる自然界の音（風、波、小鳥など）、季節ごとに行われる祭りの音、芸術としての音楽など、枚挙に暇がありません。このような音は、わたしたちが育んできた歴史、文化、伝統を反映するものであったり、あるいはそれらを聞（聴）いて何かを感じ取り、意義や価値を見いだしてきたものと考えることができます。本書では、音をわたしたち自身によって意味づけられた存在として捉える、すなわち人間とのかかわりの中で捉えることで、“生態”ということばを用いています。この視点は、個々の音について、その音響的性質のみに基づいて議論する立場とは異なり、音を聞く主体としてのわたしたち自身の意識や行動に主眼を置いており、音響学においても比較的新しい流れであると言えます。

本書で述べられている具体的な内容（目次）としては、「サウンドスケープ・デザイン」、「音名所、残したい音風景、音環境モデル都市事業」、「都市公園で聞く音」、「歳時記に詠み込まれた日本の音風景」、「外国人が聞いた日本の音風景」、「しずけさ考」、「音楽と映像のマルチモーダル・コミュニケーション」、「音と景観の相互作用」が取り上げられています。いずれの章においても、わたしたちになじみ深い事例が紹介されており、数は少ないものの必要に応じて調査・実験データも掲載されています。本書はいわゆる専門書というものではなく平易なことばで綴られています。音の背景にあるわたしたちの意識や行動を考える上で役立つ内容が盛り込まれています。

推薦： 青野 正二（行動学系）

スタンレー・ミルグラム

『服従の心理』

(河出文庫 2012 年)

本書は、権威に服従する人間の心理を科学的に追求した社会心理学の古典だとされます。巧妙に仕組まれた実験手続き、実験時の緊迫感、驚くべき結果、本書の面白さに感じ入って実験社会心理学の研究へと進むのも 1 つの可能性です。

しかし、本書を推薦する理由は、別のところにあります。本書を通して、大学での本の読み方 (の 1 つ) を知ってもらいたいからです。まず、本に書かれていることを鵜呑みにせず、あちこちに疑問符をつける。小さなことでもいいので、気になることや問題を指摘する。そして、徹底的に批判してみる。その上で、どうすべきか自分なりに考え、友人や先輩に意見を求める。そうするうちに、次々と読みたい本や読むべき本に出会う。出会った本をまたじっくり読む。本書は、そんな読み方をしていく出発点となりえます。

「科学的な研究のためだといって人を騙すこと」は許されるのかという疑問を持つ人もいでしょう。そこから研究倫理を学んでほしいと思います。そして、さらに批判的に考えてください。研究倫理とは単なる手続きのことでしょうか？そもそも倫理とは何でしょうか？研究するとはどういうことなのでしょう？

「人間の心理をこうした『実験』によって『科学的に』追求することに意味や意義はあるのか」という疑問を持つ人もいでしょう。そこから科学について、また、実験的方法について学んでほしいと思います。そして、さらに批判的に考えて下さい。人間の心理は実験で明らかにできるのでしょうか？そもそも、心理とは何なのでしょう？実験とは、科学 (的) とは？

さらに、本書の実験が「アイヒマン実験」と呼ばれていることに気づく人もいでしょう。アイヒマンとは誰なのでしょう？実験の背景として、第 2 次世界大戦、ナチスドイツ、ユダヤ人といったキーワードが出てきます。そこから歴史をしっかりと学んでください。その時代、その現場で生きた人々に想いを馳せてみて下さい。アイヒマンについては、別の方法で吟味した人々もいます。関連する本や資料や芸術作品に貪欲にあたってください。すると、本書がまた違った風に見えると思います。

主に災害の被災地に出かけ、被災地の方々と災害ボランティアの皆さんと一緒に実践し、研究を重ねています。災厄に襲われた人々と Living-together を目指す際、実験に意味はあるのでしょうか？どんな倫理的配慮をすればいいのでしょうか？現場の人々にとって意味と意義のある活動を積み重ねるためには、背景にある歴史、伝統、民俗、習慣、文化を深く知る必要があります。本書は、そうした実践・研究活動に向かう際に、(反面) 教師の役割を担ってくれます。

推薦： 渥美 公秀 (共生学系)

内田 義彦

『読書と社会科学』

(岩波新書 (黄版) 288 1985 年)

大学入試までの「国語」では、とにかく文意を正確に読み取ることには主眼がおかれていたと思います。その理解に基づいて、唯一の正解にたどりつけるように。ところが、大学に入った途端、そもそも唯一の正解などは存在しないことが宣言され、様々な文献についても内容を鵜呑みにするのではなく批判的に読むことが求められるようになります。しかも、そのやり方について手取り足取り教えてくれるわけでもない。そうした中、「一体、本って、どう読めばいいのだろう?」と思った方も少なくないのではないのでしょうか。このことについて、じっくり考えてみたいと思ったのであれば、うってつけの1冊であると思います。

本書は、執筆時、既に70代であった高名な経済学史家が、本を読むのは難しい、と言いながら、その方法について論じたものです。講演をもとにしており、全体を通して口語体で書かれているので、その意味では非常に読みやすい本になります。ただし、長年の試行錯誤に裏付けられており、いわゆるハウツー本とはまったく趣が異なります。

学生時代、それこそ、どう読んだらよいかわからない難解な文献の前に四苦八苦しなから、仲間が集まって読書会をやったことがあります。ただ集まって、ああだこうだと、それぞれの見解を披露し合っただけでもいい、「正しい理解」に近づいたのかどうかは心許ないですが、同じテキストに対して、自分とはまったく異なる見解に触れることができたので、少しでも視野を広げる助けにはなったかもしれません。

「新奇な情報は得られなくても、古くから知っていたはずのことがにわかに新鮮な風景として身を囲み、せまってくる」ように読むことを、本書では「古典として読む」とし、「情報として読む」と区別しています。そして古典としての読みを重ねながら、自前の「概念装置」を獲得することが著者の長年の悩みであり、本書の根底にある問題意識でもあります。そのための実践的な方法について初心者でもわかるように書かれた本とのことですが、冒頭は読書会のあり方から始まりますので、経験のない方にとっては、とっつきにくいかもしれません。しかし、経験がなくてわからない箇所は、そんなものかと聞き流すつもりで読み進めていけばよいと思います。そして経験を積み、改めて読書や社会科学のあり方について考え直したいと思った時に読み直してみてください。

「本を読むことは大事ですが、自分を捨ててよりかかるべき結論を求めて本を読んじゃいけない。本を読むことで、認識の手段としての概念装置を獲得する。これがかなめです。」

推薦： 荒牧 草平 (教育学系)

中井 遼

『欧州の排外主義とナショナリズム—調査から見る世論の本質—』

(新泉社 2021 年)

2015 年にはじまる欧州難民危機を背景に、ヨーロッパでは移民排斥を掲げる極右政党への支持が高まった。多くの研究が、どういった人がなぜ極右政党を支持するのかを分析してきたが、本書もこうした一連の研究群に位置する。特に、一般的によく言われている、貧困にあえぐ置き去りにされた人々が極右政党を支持しているという言説を検証し、経済要因以外の極右政党支持要因を突き止めているのが本書の内容だ。ヨーロッパの人たちを対象に実施した質問紙調査や実験といった豊富なデータをもとに統計分析を行っているが、統計手法に親しみのない人向けに分析手法の説明も充実している。人間科学部では様々な分析手法を使うが、統計分析の実践例の一つとしてもわかりやすい。

「私の 1 冊」を読む皆さんは大学に入学したばかりの方々だと思うが、そんな方々に本書を特に薦めたい。なぜなら本書には大学で取り組むことになる学術論文の必須要素がわかりやすく詰まっているからだ。必須要素というのは 1) なぜこの対象・国を選んだのか、2) 今までの学術研究でわかっていること、そして 3) この本が今までわかっていることに新しく付け加えること、である。

例えば本書はヨーロッパ全域、フランス、ラトビアやポーランドの人たちがなぜ移民に対して排外的になるのか、ということ进行分析している。日本に住んでいる私たちにとっては、ラトビアの出来事など関係ないと思ってしまうかもしれない。しかし、大学で学習することとなる学術研究は、個別のケースの研究を通して一般的な法則を知ることが目的としている。つまり、ラトビアのケースを研究することで、より一般的な、人はなぜ移民や外国人に対して排外的になるのか、という大きな問いに対する答えの一端を知ろうとするのが学術研究だといえる。こうした考え方を、本書は実にわかりやすく教えてくれる。

本書の内容をさらに発展的に知りたい人は、著者が引用している論文を読んでみるのがよいだろう。引用文献も充実している。多くの移民・排外主義研究が参考されているが、それだけ世界的に問題化しているトピックだといえるだろう。日本も向き合わなければならない移民・外国人問題を考えるためにも、本書から学べることは多い。

推薦：五十嵐 彰 (社会学・人間学系)

金菱 清

『震災メメントモリ－第二の津波に抗して』

(新曜社 2014年)

東日本大震災の被災地は復興と言うにはまだほど遠い状況だ。思うようには進まない復興事業と先が見えない福島原発の現状、その一方で、震災を風化させない活動や、東日本大震災を教訓に東海地震や南海トラフ大地震などに備えた「自助」「共助」「公助」の仕組み作りがある。どれも大切な社会的取り組みである。しかし、その前に、本書は「メメントモリ（死を忘れるな、死を想え）」とポスト 3. 11 という時代を生きる私たちに問いかけている。東日本大震災の巨大津波が「第一の津波」であるのに対し、本書で扱っている「第二の津波」とは、第一の津波を経験した後にやってくる、被災者の「生活全般の過酷な再編と心身の苦痛を伴う耐え難い経験」である。この「第二の津波」に被災者はどのように対応しているのか。大きな復興論の前にもみ消されてしまう被災者の声無き声をすくい出したいという著者の願いが本書の通奏低音となっている。

本書の特筆すべき点は、数多くの現場を踏みながら、生存の議論となっている行政主導の災害復興のあり方を批判し、死者との関係性をも取り込んだ復興のあり方を社会学的に提示したことだ。現場に入った著者とその対象者である被災者との関わりは一方向ではない。調査する著者も対象者から観察され、双方向のうちに、新たな何かが構築される。被災地では、研究者は冷たい観察者となることはできない。共同の実践である。

ディタッチメントを強調する研究者は、被災地の人たちには不必要な存在、もっと言えば、迷惑な存在ともなる。民俗学者の宮本常一は、調査対象者や地域へ迷惑をかけることを「調査地被害」と呼んでいる。相手の置かれている状況を考えずにインタビューをしたり、長時間相手を自分の都合で拘束するなどは論外であるが、調査地や調査対象者に迷惑をかけないようにと配慮しても、結果的に相手の迷惑になったり、相手の気分を害することになったりすることはある。

私もこの点に留意して、宗教施設を地域資源とした地域防災のアクション・リサーチを慎重に進めている(『利他主義と宗教』弘文堂、『震災復興と宗教』明石書店、<http://relief-map.jimdo.com/>)。

本書は、震災メメントモリを用いたレジリエンス論をもとに、「死者」をも取り込んだ復興、コミュニティのあり方、そして人間の生きる営みを問いなおす。社会学者のみならず、現代を生きるすべての人にとって意義ある一冊だ。

推薦： 稲場 圭信（共生学系）

見田 宗介

『まなざしの地獄 尽きなく生きることの社会学』

(河出書房新社 2008年)

本書は、1960年代から70年代という高度経済成長期の日本の社会構造を、当時起きた連続射殺事件の犯人である19歳の少年N・Nの生活史記録を軸に分析された社会学論考である。1973年の雑誌『展望』への掲載が初出で、原稿用紙100枚に満たない短い文章、著者いわく「異形の断章」である。「金の卵」ともてはやされて、地方の村々から集団就職で上京する若者たちの尽きなく存在しようとする希望や投企と、それらを歓迎はしてもあくまで安価で新鮮な労働力として扱う都市の要求との間にある、資本主義社会の溝、矛盾、疎外をN・Nという一人の人生の軌跡を通じて描き出している。出生や貧困など過去の呪縛から必死に逃れようとするN・Nの意に反して、執拗にそれらを本人にさしむける都市の他者たちのまなざしによってN・Nはまなざしの囚われ人になっていく。こうしてN・Nを犯罪へと駆り立てた絶望と怒りの意味を、差別・非条理な階級・階層構造のなかに解釈しようとする。

本書を初めて読んだのは学部2年のときだったと思うが、衝撃的であった。日本中を震撼させた事件の犯人N・N(永山則夫元死刑囚)の手記や社会統計の分析を通じて、その背景にある社会構造を浮き彫りにさせるという手法が、ルポルタージュに似ていながら社会学として見事に達成されていた。著者も書いている通り、また解説でも説明されているように、質的調査と量的調査という2つの方法を架橋して、極限值において「統計的な事実の実存的な意味」を追求している。だからだろうか、実存的な意味が私自身にもシンクロした。田舎から大阪に出てきた私にとって都市は憧れの存在であり続けた。封建的な風土から解放されたようで期待もあった。その一方で、自身の所属集団や準拠集団が田舎にあるのか、住み慣れ始めた都市にあるのかで自己が分裂するような思いや、しょせん田舎者だからと自己規定してあきらめたりするような経験もあった。田舎という地域だけでなく、ジェンダーや階層などいくつか交差しながらでもあった。だからこそ、数量化されない質的なデータから、現代日本の心情や精神構造、社会構造を分析しようとする著者のスタイルに惹かれて社会学(のちに教育社会学)に関心を寄せていった。

本書が書かれたのは半世紀前の日本だが、今読んでも斬新さや洗練さは色あせることなく、むしろ差別・非条理な社会構造が剥き出しな今だからこそ、リアリティがある。N・Nの育った環境は今でいうところのシングルマザー、貧困家庭、ネグレクト、ヤングケアラーであり、こうした状況から想像されるトラウマの影響もあるだろう。家郷をあとにして都市で働く若者には移民も含まれ、私自身こうした移民の若者たちの教育や社会とのつながりに関心をもっている。本書は読む人の生きる「現代日本」を映し出す鏡のような存在であり、社会を一人ひとりの尽きなく生きようとする意思と力のせめぎ合いの総体としてとらえることの重要性に、いつも立ち戻らせてくれる大切な一冊である。

推薦：今井貴代子(未来共創センター)

アイリス・マリオン・ヤング 岡野八代・池田直子 訳

『正義への責任』

(岩波書店 2014年)

人種差別、ジェンダー不平等、貧困、移民排除、グローバルな経済格差、機会の不平等、ケアの危機、わたしたちの社会には数えきれない不正義が横たわっている。社会に偏在する不正義に対して、わたしたち一人一人はどのように関わっているのだろうか。それに対してどのような責任があるだろうか。こうした問題と向き合うことが本書の目的である。

ホームレス状態に陥りそうなシングルマザー、サンディの仮想的事例を見てみよう。サンディが現在住んでいるアパートを開発業者が購入した。立ち退きを命じられた彼女は、職場に通いやすいアパートを探そうとする。しかし子育てに適した場所に予算内で家賃が払えるアパートは見つからない。退去日が近づく中、やっと見つけた部屋を借りるには、多額の保証金が必要になる。こうしてサンディは住む場所を失いそうになる。

サンディの状況に対して一体誰に責任があるだろうか。彼女がやり取りをした家主や不動産業者は、皆彼女に親切に接したかもしれない。では、誰がサンディの状況を作り出しているのか。サンディの状況によって筆者が浮き彫りにするのは、構造的不正義である。彼女の状況は、特定の個人の悪意ある行為がもたらしたのではない。開発業者、不動産業者、家主など、複数のアクターが自分に与えられた制約の中で、合理的に行動しただけなのだ。一人ひとりの行動を切り取ると、誰一人非難に値するとは言えないかもしれない。しかし、法的社会的規範の範囲内で自らの利益を守ろうとする人々の無数の行為の集積が、総体として一部の人々の生きにくさを生む状況こそが構造的不正義なのだ。

では、構造的不正義に対して、誰がどのように責任を取ればいいのか。そこで、筆者が打ち出すのが責任の「社会的つながりモデル」である。誰か特定の個人を責めることはできない反面、誰もが構造上の不正義に加担している。大勢の人々の複雑な相互行為によって生まれる不正義への責任は、集合的、すなわち政治的手段によってのみ果たすことができる。こうした政治的責任は、過去を振り返って追及する責任とは異なり、社会を問い直し、それを変えようとする未来志向的な責任である。身近な不正義について考えてみよう。あなたはそれにどのように関与しているだろうか。

推薦：遠藤 知子（社会学系）

米沢 富美子

『「人生は、楽しんだ者が勝ちだ」私の履歴書』

(日本経済新聞出版社 2014年)

本書は、日経新聞の「私の履歴書」として連載され、好評であったもので、一冊の本として刊行され、また、テレビ番組も放送されました。「研究も家庭も」両方取ると決め、どんな関門にも勇猛果敢に、あっけらかんと挑んできた。日本を代表する女性物理学者が明るく大阪弁で綴る痛快無比の自伝！」とあります。家庭を持ちながら女性が、次々と業績を成し遂げていくことを述べていても、自慢話にならずに痛快に気持ちがいいと男性からも書評を受けています。ライフワークを求め、ライフ&ワークバランスを求める若者に参考になればと思います。

著者は、1938年大阪府生まれ。ご経歴は、京都大学理学部卒業、同大学院理学研究科修了、理学博士。京大基礎物理学研究所で、湯川秀樹教授（阪大のときの研究で、日本初のノーベル賞を受賞）のもとで助手、慶應義塾大学教授などを経て、慶大名誉教授。専攻は理論物理学。不規則系の理論研究の第一人者。96年から97年まで日本物理学会会長。2005年ロレアル・ユネスコ女性科学賞受賞。

一冊ということですが、あわせて女子学生にご紹介したい書として、

●倉沢愛子『女が学者になるとき』草思社、1998年

東京大学での学園闘争、大学院進学、インドネシアの研究をするためだった。同級生と結婚。二人は一緒に研究に励むことを誓う。しかし、アメリカへの留学や研究生活をつづけるうちに、二人の間に亀裂が生じる。著者はそれでも論文の執筆に打ち込み、遂にインドネシア研究の金字塔となる論文を完成させる。一人の女子学生が研究者に成長していく過程を語った希有な自伝。

●シェリル・サンドバーグ『LEAN IN 女性、仕事、リーダーへの意欲』日本経済新聞出版社、2013年

著者は、フェイスブックの最高執行責任者であり、活動家、作家です。日本語や中国語など各国語に訳され、世界的ベストセラーとなりました。タイトルは、女性が仕事の場で何かと謙遜して遠慮 (hold back) する傾向があるので、そうではなく勇気を出して身を乗り出そう (lean in) という意味です。

アメリカでもこうなのかと共感します。九州大学のその部局でただ一人の女性准教授（女性教授はなし）から薦められて読んでみました。

実業界のトップにいる女性としての孤独な経験について、初めて公の場で話す本書はTEDで200万回以上も視聴された動画から生まれました。そのスピーチもご覧になってください。

https://www.ted.com/talks/sheryl_sandberg_so_we_leaned_in_now_what?language=ja

推薦：大谷 順子（共生学系）

山名 淳

『「もじゃペー」に〈しつけ〉を学ぶ

―日常の「文明化」という悩みごと―』

(東京学芸大学出版会 2012年)

20世紀も後半を迎えるころ、3人の思想家によって3つの〈人間〉が発見された。アリエスによる〈子ども〉の発見、フーコーによる〈狂人〉の発見、そして、レヴィ＝ストロースによる〈未開人〉の発見である。

〈子ども〉〈狂人〉〈未開人〉は、長い歴史を通してずっと、文明化した人間社会の周縁に位置づけられてきた。彼らの存在は、社会の中心に位置づく人びとがとうに失ったとされる人間の「始源の生命力」を象徴すると同時に、人びとの安定した（つまりはマンネリ化した）日常生活を支える既存の社会秩序に鋭い問いを突きつけるものでもあった。それゆえ、社会の中心に位置づく人びとは、彼らが社会を脅かす存在とならないよう、彼らを文明化し社会の内側に安定的に位置づけるためのさまざまな技法を編み出した。その諸技法は、時にしつけや教育と呼ばれ、時に精神医療と呼ばれ、時に植民地政策とも呼ばれた。

「もじゃペー」こと『もじゃもじゃペーター』は、1845年にドイツで出版された絵本である。作者のホフマンは、子どもたちの怪我や病気を診る医師であったが、西欧で本格化した精神医療の患者収容施設の改革者としても知られている。彼は、3歳の息子へのクリスマス・プレゼントとして、この絵本を自作した。

全10話から成るこの絵本の主人公は全員、「悪い子」である。髪と爪が伸び放題の不潔なペーター、マッチに興味津々のパウリーネ、親指しゃぶりの癖が抜けないコンラート…。彼（女）らの末路は総じて悲惨である。ペーターは酷い侮蔑の言葉を浴びせられ、パウリーネは靴だけ残して灰となり、コンラートは親指を切られる…。

「悪い子」が子どもには似つかわしくない悲劇的な結末を迎える物語を集めた絵本。この絵本は、出版から80年の間に539版を重ねるロング・ベストセラー作品となった。ところが、ある時期を境に、「子どもの教育上、好ましくない」絵本として批判の対象となっていく。歴史上のこの変化は、教育学的、人間形成論的に見て何を意味するのか。

『「もじゃペー」に〈しつけ〉を学ぶ』は、この絵本の誕生・出版・評価を歴史的に分析するなかで、しつけ、教育、精神医療などの文明化の技法に潜在する政治性を読み解く秀作である。ヒトを既存の社会に安定的に位置づく人間にするための文明化の技法は、いかなる可能性と問題性を内包しているのか。教育学、人間学に関心のあるあなたに、ぜひ、読んでもらいたい1冊である。

推薦：岡部 美香（教育学系）

岡ノ谷 一夫

『さえずり言語起源論 一新版 小鳥の歌からヒトの言葉へ』

(岩波書店 2010年)

小鳥の歌はヒト言語の起源であるか？この問いに二択で答えるとする「いいえ」である。動物の音声は言語というより笑い声のような情動発声に近く、小鳥は歌で互いに意思疎通をしているわけではない。しかし、その歌について、個々の音節が表れる構造を詳細に解析すると、なんとヒト言語との共通要素である「文法」が存在するという。本書は、ジュウシマツという飼い鳥として親まれる小鳥の歌研究から、ヒト言語を支える神経基盤とその進化シナリオを提案している。

本書では、動物行動研究のオーソドックスな枠組みである「ティンバーゲンの4つの問い」に沿って、著者の研究事例が紹介される。小鳥が複雑な歌をさえずる理由が、「なぜ」「どのように」という異なる水準の問いにより検討され、興味深い事実が次々と明らかになる。「なぜ」は行動の機能、「どのように」は仕組みに対応する問いである。この問いの立て方の枠組みは、動物行動研究だけではなく、様々な現象の理解に役立つだろう。

動物行動研究は、ヒトの行動理解にいかに関与できるのか。本書では、2つの方法で小鳥の歌からヒトの言語起源に迫ろうとする。まず、両者の共通点に加え、相違点が明確に指摘される。相違点が分かれば、小鳥の歌のどの構成要素がヒト言語のよいモデルとなるのか、的を絞ることが可能になる。次に、なぜその行動が進化の過程で生じたのかという原因（淘汰圧）に焦点を当てる。小鳥の歌を現在の形に進化させた淘汰圧が分かれば、その相似であるヒト言語の文法が進化した過程について、示唆が得られる。単にヒトと類似する動物の行動を取り上げて、「動物も〇〇ができる」と解釈する過度な擬人主義的とは距離を置いた、ヒトの行動理解のためのアプローチを知ることができる。ちなみに、この言語進化シナリオに対しては意見したい点は色々あるものの、発想の転換ともいえる大胆な仮説は読んでいてわくわくする。

個人的には第3章に共感を覚える。私自身は主にサルを対象に、行動生態学と比較認知科学の間でどっちつかずの研究を行っている。著者は神経科学と行動生態学という相反する分野に身を置いた経験が、研究の深みと広さをもたらしたと述べる。面白いが苦勞も多い、学際研究の実際に触れることができる。

本書は著者のキャリア初期を描いた青春記としての側面もある。専門性を深めるだけでなく、研究者の生きざまに触れられる読み物としても推薦したい一冊である。

推薦： 勝 野 吏 子 (行動学系)

マイケル・トマセロ 橋彌和秀 訳

『ヒトはなぜ協力するのか』

(勁草書房 2013年)

われわれヒトは生まれながらにして道徳的なのであろうか？それとも経験や教育によって道徳的になるのであろうか？これらの哲学的問いは古くから古今東西で議論され、人々の関心の対象であり続けた。

近年、発達科学の進展により、この問いの解決の一端となるような知見が積み重ねられている。私自身もこの流れの中で、赤ちゃんの正義感に関する研究を過去におこなったが、その発端となったのは、科学誌のトップジャーナルである Science 誌と Nature 誌に 2006・2007 年と立て続けに掲載され話題となった 2 つの研究であった。前者は生後 18 ヶ月のよちよち歩きの赤ちゃんが困っている見知らぬ他者を目にするると助けることを示した研究であり、後者は言葉をしゃべれない生後 6 ヶ月の赤ちゃんが他者のふるまいの善悪を判断することを実証した研究である。本書の著者であるマイケル・トマセロは、前者の論文の著者であるだけでなく、その後も現在に至るまで乳幼児の道徳性や向社会性について数多くの実証研究をおこなっており、まさにこの研究領域を牽引してきた人物であると言える。

トマセロは、はじめに言語発達の研究をおこなっていたが、彼を唯一無二の存在たらしめたのは、本書でも紹介されている一連の比較認知発達研究である。彼のラボでは、主に 1 歳過ぎから就学前児を対象に、シンプルではあるが精緻な実験デザインを用い乳幼児の認知発達に関する知見を積み上げてきた。特に、その生態学的妥当性の高い実験デザインはチンパンジーとの比較研究に適用しやすく、ヒトとチンパンジーの共通性や差異、それぞれのユニークさを明らかにしてきた。

本書にはそれらの近年の研究が余すところなく盛り込まれており、包括的にまとめられている。本書を読めば、発達早期におけるヒトの道徳性や向社会性についての最新の発達科学の知見や理論を知ることができるだけでなく、ヒトという種の特異性を垣間みれるであろう。また、本書のユニークな点は、トマセロの理論に対して、関連領域の一流の研究者が自身の観点からその是非についてコメントしているところである。理論に対するさまざまな批判は、科学においては当然の態度である。そういったさまざまな可能性を示すところこそ科学的には意義があり、その態度を体現している本書は、初心者にとってもプロにとってもまさに科学的良書ということができる。

推薦： 鹿子木 康弘 (行動学系)

アリス・ウォーカー

『カラーパープル』

(集英社文庫 1986年)

この本は、奴隷解放から半世紀が経った 20 世紀初頭のアメリカ南部、ジョージア州に暮らす黒人女性セリーの物語である。個性豊かな登場人物が織りなすストーリーの中に垣間見えるのは、折り重なり交差する差別と支配の構造である。物語では、白人による黒人差別だけでなく、黒人男性から黒人女性への暴力と支配、貧富の格差、さらにヨーロッパ諸国による植民地支配が描かれる。「おまえは黒人で、貧乏で、醜くて、女じゃないか」。夫がセリーに吐き捨てた言葉は、黒人女性がさらされる差別の重層性を端的に表している。

セリーは、父親や夫から虐げられる過酷な状況に対し「どうやって闘えばいいかわからない」とただ耐え忍ぶ。日々を生きることで精一杯である上に、セリー自身が抑圧的な価値観を内面化することで、数々の理不尽に抗うことができなくなっているのである。それでも、自由奔放なブルース歌手のシャグや、腕っぷしも気も強いソフィアら周囲の女性たちとの出会いと愛情がセリーを少しずつ変え、やがてセリーは自らの意思で前に進んでいく。

作者のアリス・ウォーカーは、小説の舞台と同じジョージア州の小作農の親のもとに 1944 年に生まれ、小説家になる前の 1960 年代には公民権運動に身を投じている。本書は一人の女性の成長と自立の過程を描くとともに、こうした作者自身の背景を反映したと思われる、当時の人々の息遣いのようなものを感じさせる。黒人差別の解消を訴えた運動は、その後女性やエスニックマイノリティ、性的少数者の解放運動へと広がり、日本のマイノリティの権利運動にも少なからず影響を与えた。Black Lives Matter 運動が訴えるように、アメリカの人種問題はこんにちまで連綿と続いている。本書はその背景を理解する手がかりにもなるだろう。

1983 年に本書の原作がピューリッツァー賞と全米図書賞に選ばれた際、黒人女性作家による受賞として大きな注目を集めた。裏を返せば、それまで高く評価される文学作品の多くは白人男性の手によるものだった。この原作はいわゆる格調高い英語ではなく、南部アクセントの黒人女性の声が聞こえてくるような文体で綴られている。英語に興味のある人は、ぜひ原作も手にとってみてほしい。私がこの本を初めて読んだのは、学部生の時の英語講読の授業だった。学校で習ったものとは大きく異なる英語で、黒人女性の視点から描かれたアメリカの物語は、新鮮であり衝撃だった。いま振り返れば、あれは多文化社会の教育研究に関心を持つきっかけの一つだったのだと思う。

推薦：北山 夕華（教育学系）

フリードリッヒ・エンゲルス

『家族・私有財産・国家の起源』

(岩波文庫 1965年 / 原書(ドイツ語) 1884年)

私は現在、ジェンダーの視点から教育やマスメディアを分析・考察するという研究をしています。その出発点には、「なんで女だけ〇〇せなあかんの?」「女より男の方が生まれつき偉いかなあ?」などの、子どもの頃からの素朴な疑問や不安がありました。

その昔、四国から出て(私にとって四国は「脱出すべき閉じられた島」でした)、大阪大学の人間科学部に入学後、それまでの受験勉強から解放された私は、授業や学生同士の討論などを通じて、新鮮な空気を胸一杯吸うように、さまざまなことを学び、一気に視野を広げていきました。視野の広がりの一つが、上述した子どもの頃からの疑問や不安には、「性差別」という名前が与えられているという認識でした。それが社会問題として位置づけられ、撤廃や解消のための運動も存在していることを知るプロセスは、女性として育てられてきた自分のアイデンティティや価値観をも問うプロセスでもありました。

ありがたいことに大学(とその周辺、大阪なる土地の持つ力も大きい)という環境は、個人としての思いに翻弄されるだけでなく、性差別を社会科学的に扱うことを学ぶ機会を提供してくれました。性差別が生まれるメカニズムや性差別を維持するシステムを社会科学として分析するとはどういうことかを教えてくれた書籍の一つが、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』です。推薦したい本は山のようにありますが、一つ古典を挙げるとすれば、これだと考えました。ただ、いかんせん、19世紀の本です。その後、この本は種々の観点から批判されます。エンゲルスが引用している人類学の知見についてなど、事実関係はくれぐれも鵜呑みにしないでください。しかし、ものごとを歴史的に、システムティックに考える、社会科学のものの見方のエッセンスを知っていただくには、良書ではないかと思えます。

推薦：木村 涼子(教育学系)

都留 重人

『公害の政治経済学』

(岩波書店 1972年)

環境問題はどうすれば解決できるのでしょうか。科学技術は日々目覚ましく進歩しています。政治においても、国の内外を問わず、環境問題への配慮は避けて通ることができません。多くの企業がSDGsを掲げているように、産業界の環境意識も徐々に高まっているように思えます。また、省エネをはじめ、個人レベルでの取り組みを実践している方も少なくないでしょう。それにもかかわらず、新たな環境問題が次々と現れているのはなぜでしょうか。

このような現代的な課題に対して、50年以上前に著された本書は、今なお色あせない視座を提示しています。著者である都留重人は、第一回経済白書の執筆にも携わった経済学者であると同時に、戦後日本の公害問題のメカニズム解明に学術的・実践的に取り組んだ人です。1971年には雑誌『公害研究』を創刊し（現在も『環境と公害』として岩波書店から刊行）、公害現象の究明と根絶を目指した学際的研究に尽力しました。

1972年に刊行された本書では、資本主義・社会主義（「体制」）の別なく生じている公害問題に対して、「体制」がどのようにかわるのかを分析します。その際著者は、既存の理論（市場メカニズムの補正の論理・国家独占資本主義論の論理）の「安易な」適用を避け、「政治経済学的接近」を試みます。これは、「経済現象の素材面と体制面とを区別しながら両者の統一的把握をはかる」という方法論です。この作業において、公害現象の「素材面」を具体的に調べることの必要性が強調され、国内外の公害現象が分析されます。

私の専門であるポリティカル・エコロジーでは、様々な環境問題を政治経済メカニズムとの関係に着目して分析します。この分野は、1980年代頃から欧米の学界を中心に進展し、経済的不均等発展や各種不正義との関連で環境問題を問題化し、分析しています（入門書である Robbins P. (2020) *Political Ecology: A Critical Introduction* 3rd ed., Wiley Blackwell もぜひ手に取ってみてください）。

当然本書は、ポリティカル・エコロジーという分野が確立する以前の文献です。それにもかかわらず、現代社会における公害を、日本での経験に基づいて分析したという点で、いわば日本におけるポリティカル・エコロジー研究の原点と言ってもよい金字塔的な著作です。環境共生を考える学生には、是非一読してほしいと思います。残念ながら絶版になってしまっているようですので、図書館や古本で探してみてください。

推薦：古賀 勇人（共生学系）

金井 壽宏

『働くみんなのモチベーション論』

(NTT 出版 2006 年 / 文庫版 日本経済新聞出版 2016 年)

やる気（意欲あるいはモチベーション）は、身近ながらも不思議な現象である。何かやらなきゃ落ち着かないという程にやる気に満ち溢れていることもあれば、やらなきゃいけないとわかっているのにやる気が出てこないということもある。どうすればやる気を自在に引き出すことができるのか、という疑問はおそらく誰しも抱いたことがあるものだろう。

本書が推奨する方法は、自分の、そして人々のやる気について持論を持つことである。持論を持つといっても、「こうすればやる気が出るんだ！」とがむしゃらに根拠もなく信じよということではない。どんな時に、どうすれば、なぜやる気が出る（あるいは出ない）のか、自分と人々についての深い理解を持つことを勧めている。人は誰でも、経験を通じて、人や心についての暗黙の理解を作っている。その理解を、明確に自覚し、実践に活用することが、やる気を自在に引き出すために重要だと述べられている。

持論さえあれば研究者の理論は不要、などというわけではない。確かに、研究者による理論は、いずれもやる気の全てを網羅的に説明できるとは限らない。盲目的に一つの理論だけを信じて実践するのは、理論とのよい付き合い方とは言えない。しかしながら、研究者たちの理論は、実証的な知見をもとに、主張の確からしさや限界点を評価する試みの中で生み出される。これに対して、個人の経験のみに基づく持論はあくまでも素朴理論であり、偏った見方や曖昧さを含みうる。研究者たちが築き上げてきた理論を学び、持論の素材としながら、視点を広げ、より確らしく、多様な人々・状況を理解できるような持論を練り上げるのが望ましい理論との付き合い方として論じられている。

各論では、こうした持論アプローチを支援する観察・内省のエクササイズや、素材となるいくつかの研究者の理論が紹介されている。後者の理論紹介に関して、本書は持論を中心に展開しているため、人々の気づきからボトムアップに類型化される。よりトップダウンな研究の流れや、諸理論の詳細については他書（例えば、鹿毛雅治『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学』金子書房、2013 年など）も参照しながら学ぶと理解が深まるだろう。また、本書も鹿毛(2013)も引用文献の書誌情報が豊富であり、関心を持った理論・現象・研究があれば、原典にも触れると、著者らが注目していないポイントを見つけられるかもしれない。

本書はやる気をテーマに持論アプローチを紹介する一冊だが、このアプローチは他の人間科学的なテーマを学ぶことにも通じるだろうと考える。「やる気」という身近なテーマへのアプローチから、人間について自分なりの持論を考える手がかりを得てもらえると嬉しく思う。

推薦： 後藤 崇志（教育学系）

檜垣 立哉

『食べることの哲学』

(世界思想社 2018 年)

食べることは、人間のみならず、すべての動物に共通している。動物は食べることなしに生きることはいできない。人間もまたそうであるということは、人間もまた動物であることである。その一方で、人間は単なる動物ではない、と人間は自らのことを考える傾向にある。たとえば、「文化」と呼ばれるものは、ときにそのような動物以上の何かを、人間が誇るべき何かを表していると考えられることがある（実際にそうなのかわからない）。

食べることは、人間の自然の側面と文化の側面の両面をつないでいるというところが、哲学の主題として重要な点であり、またとりわけ、自然科学と人文科学の両面を架橋する人間科学部で哲学を考えるうえでも同様に重要な点である。人間を文化的存在に還元するでもなく、自然的存在に還元するでもなく、ただひたすらその間にあって、その間にあるということがどういうことであるのかを考え続けることこそが、人間科学にとって重要なことではないだろうか。

食べることは、一方では、フランス料理や中華料理に代表されるような、都市文化を代表するという華々しい側面をもつと同時に、他の生きものの生命の犠牲にすることの上にしか成り立たないという「薄暗い」側面をもつ。その「薄暗さ」は、生きものであることの重要な点に触れているように思われると同時に、人間の社会的生活を組織化する礎となるタブー（インセスト・タブーとカニバルのタブー）と関わっているのではないかと、本書の著者は論じる。

食べることから説き起こしつつ、人間の社会、文化、道徳、倫理といったことがらの多様な側面について横断的に思考を巡らすことを通して、人間科学部で哲学をすることはどうということかを教えてくれる。

著者の檜垣立哉は 2023 年 3 月まで 20 年以上にわたって人間科学部で教壇に立っていた哲学者であり、この本に出てくる風景の多くは、この人間科学部での出来事であり、また本の設計自体も人間科学部での学部生向け授業を基になされている。その点で、人間科学部の学生が最初に読むのにふさわしい。

推薦： 近藤 和敬（共生学系）

アルヴァ・ミュルダール、ヴィオラ・クライン

『女性の二つの役割：家庭と仕事』

(ミネルヴァ書房 1985年 / 原著初版 1956年)

アルヴァ・ミュルダール(1902-1986)はスウェーデンの外交官、国会議員、社会学者という職歴のなかで、国連の軍縮交渉において重要な役割を果たし、ノーベル平和賞(1982)を受賞している。アルヴァは、夫で経済学者であるグンナー・ミュルダールとともに戦前から福祉国家を論じ、特にアルヴァ自身は女性のために社会はどうあるべきかを論じてきた。

「社会機構に何か間違いがある。男性は過労や心労が原因で早死にし、その未亡人や妻は職場進出の機会がない」「現在の家庭生活では夫の役目は週末に限られており、それ以外は不在中に起こった家庭の問題について、妻の報告を受けるだけ」「既婚女性が就労することで全般的な労働時間の短縮が可能となり、父親の労働時間を短くできる」。これは1956年に出版された原著の一節であるが、労働、家事、余暇を男女が平等に分ち合うことで、人間らしい生活と理想的な家庭の営みが可能になるだけでなく、そのことが経済の発展に不可欠であることを、社会学的なデータを数多く用いて論じている。

「男女平等の国」として紹介されるスウェーデンだが、本著が出版された1950年代は今とは明らかに違っていた。当時、アルヴァのいう‘共働き社会’は、多くの女性たちから批判された。「仕事と家庭の二重の役割を果たさねばならない女性の苦しい状況を軽く見ている」。それでもアルヴァは、議論を続けた。人の寿命の伸びは著しく、平均結婚年齢の時点で、その後、半世紀以上生きていかなくてはいけない高齢社会を考えると、女性も人生80年時代を自分で設計し、自立して生き抜いていかなければいけない、と。

スウェーデン社会は1960年代以降、大きく変わっていく。今では平均年間労働時間1600時間、明らかに労働、家事、余暇を男女で分ち合う国である。アルヴァが60年前に予測した社会である。アルヴァは前書きに次のように書いている。「社会学者の仕事は、与えられた時間と場所にあるがままの状況を、厳密に研究し、かつ説明することである。また考察した事実にもとづいて、近い将来に予測される事態の展開について、ある程度の予測を行うことである」。ある程度の予測ができれば、近い将来の社会の変動に見合った備えができる。

私がスウェーデンという国に関心を持ったのは大学3年生の時。日本では男女雇用機会均等法(1985年)が成立し、なんだか日本の社会が変わっていくようで、わくわくした。その後、あっという間に30年が過ぎたが、日本では長時間労働で若者が命を失い、都市部での保育所不足は深刻で、労働、家事、余暇を男女で分ち合う社会には程遠い。次の30年後に日本はどう変わっているのだろうか。

推薦： 齊藤 弥生 (共生学系)

ジャレド・ダイヤモンド著 楡井 浩一 訳

『文明崩壊（上/下）：滅亡と存続の命運を分けるもの』

（草思社文庫 2005 年）

「自然を知り、人を知る」

ジャレド・ダイヤモンド博士は、生物学、進化学、人類学などを専門とするアメリカの研究者です。彼は、幼少期からバードウォッチングに親しみ、言語、地理、歴史など幅広い分野に興味をもつ人でした。ハーバード大学の生物学部を卒業し、ケンブリッジ大学で生理学の博士号を取得した博士は、ニューギニアでのフィールドワークの体験をもとに、1997 年、世界的ベストセラーとなる『銃・病原菌・鉄：1 万 3000 年にわたる人類史の謎』を出版します。この書籍も大変面白いのですが、私が今回紹介するのは、その後出版された『文明崩壊：滅亡と存続の命運を分けるもの』です。

社会について、何を成功・失敗とするかは、様々な考え方があります。博士は「存続」、つまり持続的であることを一つの成功とみなし、過去にあったいくつかの社会について、その成否を、自然環境との調和という視点から洞察します。

私の専門は、保全生態学です。これは、生態学 (ecology) の知見を自然環境の保全に活かすという視点で発展してきた学問です。ダイヤモンド博士は、この分野でも重要な論文を発表されています。例えば、人が自然を利用し、土地を改変しなくてはならない場合、もともとあった自然は、どのように保全されるべきでしょうか。全て使い尽くしてしまつては、人は自然の恵みを享受できず、他の生き物たちも絶滅してしまいます。この問いについて、博士は、後に 6 つの原則といわれる空間概念を提示しました。詳細は省きますが、博士のアイデアは現在、生物多様性を守り、賢明に利用しながら、豊かな社会を築いていくための重要な理論として位置づけられています。そのダイヤモンド博士が、人類史と対峙し、自然と人との関係について壮大なストーリーを示したことは、私にとって、衝撃でもありました。

『文明崩壊』で示された博士の説は、出版後、多方面から検証がなされています。そうした議論も含め、私たちが自然と共にどのような社会を築くべきか、考えさせてくれる一冊です。

推薦：佐伯 いく代（共生学系）

青木 省三

『僕のこころを病名で呼ばないで』

(ちくま文庫 2012年)

産業領域において心理職として臨床をしていると、「これって〇〇病なんですか…?」と心配そうに来談される方や、「あの人が何度注意しても××してしまうのは〇〇障害だからですよ?」とこころの病かどうかを確認しにこられる方によく遭遇します。

ネットの力はすごいです。なぜその病気に思い至ったのか聞いてみると、大体、ネットと答えます。念のため「症状」を聞いてみても、ほぼ間違いなさそうなことも結構あります。

しかし、そう見えるからといって、私の方から「病名」を口走っていいのか、いつも躊躇します。「病名」はいろいろな人を動かす力があります。周囲が必要以上に腫物に触るような扱いをするようになってしまうことや、「ちゃんと治療してからじゃないと一緒に働きたくない」などと言い出す人もいます。

もちろん「病名」は安心感をもたらすものでもあります。そして、「病名」のもとで研究され効果が確認された心理療法があれば、回復までの道のりにいくばくかの安心感をもたらされます。「病名」を名付けられた人は療養に動機づけられ、周りにとっても療養への配慮が行いやすくなるなど、潤滑液にもなります。

気を付けなければならないのは、「病名」を名付けることによって、その人の本当の姿が見えづらくなってしまうことです。よくよく話を聞く前から漠然としたイメージの色眼鏡でみてしまったり、必要以上に「治さないといけないもの」と(時には治療者までも)駆り立てることも少なくありません。どのように困っているのか、周りがどのようにすれば配慮すれば働きやすいのか、得意なことや強みは何なのか…という細やかな部分への視野が狭窄しがちになるのです。

ともすれば、体験のない方からは漠然とした偏見を向けられがちなのがこころの病です。自分自身についても「自分は〇〇だから××はできない…」とチャレンジ前から予想してしまうことだってあります。そんな「病名」や心を取り巻く様々な事柄について、細やかな部分への視野を与えてくれるのがこの本です。科学という名前がついている人間科学部において、「客観的に正しい」こころの病の像を探求することは大事なことのひとつといえるでしょう。客観性の力についてもすでに述べた通りです。しかしそれと同時に、この本がもたらすような細やかな部分への視野、そして配慮を身につけることができれば、やわらかくその力を使っていくことができるでしょう。

推薦： 佐々木 淳 (教育学系)

クリストファー・チャブリス、ダニエル・シモンズ

『錯覚の科学』

(文春文庫 2014年)

「見落とす」「見誤る」「思い込む」など、人間は生きていく中でいろいろな「錯誤」をします。それはあるときは笑い話になり、またあるときにはそれは人が命を落としたり、大損をしたりすることにも繋がるのですが、そこには人間の心の不思議な働きが関係しています。この本はいろいろな興味深い事件や現象を紹介し、それが認知心理学の観点でどのように説明できるかを解き明かしていきます。具体的には、「2001年にハワイで起こったえひめ丸と米海軍原子力潜水艦の衝突事件」「ヒラリー・クリントンの誤った戦場体験の記憶」「リーマン・ショックの原因となった投資家の誤解」などが取り上げられています。この本の著者は著名な認知心理学者で、「テレビの映像を集中してみているときに熊の着ぐるみを着た人がその映像の中に入ってきて気づかない」という注意のデモンストレーションで有名な人ですが（いわゆる「脳トレ」系のテレビ番組で見たことがある人も多いのではないのでしょうか）、日常的な現象と認知の関わりをわかりやすく説明しています。私の専門は応用認知心理学で、この本の中で取り上げられている内容の多くが私の研究領域に重なっているのですが、実際の研究活動では、この本の中で紹介される現象を心理学実験の手法を使って検証するということを行っています。

また、「911の大規模テロはアメリカ政府の陰謀」とか「モーツァルトの音楽で頭が良くなる」といった怪しげな陰謀論やニセ科学がなぜ広く信じられるのかについても、認知の観点から解き明かしていきます。特に日本では東日本大震災以降、特に原発事故の影響に関して真偽の定かでないさまざまな情報が流されました。情報を鵜呑みにせず批判的に理解することはとても重要なことです。情報の送り手と受け手が持つ認知的特性を理解した上で、得られた情報を利用できるようになることは、よりよく情報社会を生きていくために大切なことですが、この本はそのような知識やスキルを身につける上でもとても有用な一冊だと思います。

推薦： 篠原 一光（行動学系）

信田 敏宏

『ドリアン王国探訪記 –マレーシア先住民の生きる世界』

(臨川書店 2013年)

私の専門は人類学（文化人類学）である。文化人類学を語るうえで欠かせないものにフィールドワーク（現地調査）がある。「フィールドワークを抜きにして文化人類学は成り立たない」。そう言っても過言ではないほど、フィールドワークは文化人類学にとって重要なものであり、また文化人類学者にとって刺激と魅力に満ちたものである。私もフィールドワークに魅了された者の1人だ。

文化人類学者は皆、フィールドワークに赴き、そこで得た知見を手がかりにして本（民族誌）や論文を書いたりすることで、研究成果を公開してゆく。しかしながら、それら最終的な研究成果に比べると、一つの研究の始点から終点までのプロセスをフィールドワークに軸足を置きながら描き出したもの、言い換えるならば、フィールドワークを介して研究対象地で得られた知見が、どのようにして最終的な研究成果へと形を成していったかを跡付けた著作は、意外と少ない。

本書は、マレー半島の先住民の社会におけるイスラム教や開発の動向をめぐって長年にわたり文化人類学的研究を行ってきた著者が、そもそもなぜそうした社会や研究テーマを選んだのかといった点にも目配りしながら、自らのフィールドワークの様子をわかりやすく、臨場感たっぷりに描き出したものである。文化人類学のフィールドワークの魅力や、フィールドワークが研究成果とどのように結びついているのかを知るうえで、格好の1冊である。

ちなみに、本書は臨川書店のシリーズである「フィールドワーク選書」の1冊でもある。このシリーズは20冊からなり、20人の文化人類学者（および考古学者）たちが、海外の研究対象地でそれぞれが行ったフィールドワークについて、1冊ずつ書き下ろしている。20冊の対象地域は、北は北極圏から南はカラハリ砂漠まで。アジア、アフリカ、アメリカ、オセアニア、ヨーロッパを網羅している。また、著者たちの研究テーマも、衣服、食物、宗教、医療、音楽、言語などと多岐にわたる。本書だけでなく、シリーズのなかから自分の関心のある地域やテーマに応じた1冊をピックアップして読むことも、併せてお勧めする。

推薦：白川 千尋（社会学・人間学系）

帚木 蓬生

『ネガティブ・ケイパビリティー—答えの出ない事態に耐える力』

(朝日新聞出版 2017年)

「ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)」とは「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」あるいは「事実や理由をせっかちに求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にいられる能力」のことである。これは、詩人キーツが兄に宛てた手紙に書いた言葉で、精神分析家で精神科医のウィルフレッド・ビオンがのちに紹介した概念である。

私たちは生きてゆく中で、困難やどうしようもないことに度々出会う。その時、それを抱えた状態でその場にとどまるにはかなりの精神力が必要となる。それゆえに、どうしても解決できなさそうな場合には、回避してみたり、とりあえずの答えを出してみたり、拒否してみたり色々工夫しながら乗り切ろうとするのであるが、そういった時に、この「ネガティブ・ケイパビリティ」を知っているとその場にとどまるということが少しでもしやすくなるのではないかと思うのである。常にとどまっていればよいというものではないが、とどまることで深まってゆくものやひらかれてゆくものがあるということは、心理臨床に身を置く私自身、これまで受けてきた訓練やクライアントさんとの出会いを想うと納得できるものである。本書ではキーツとビオンの生涯も紹介しながら、彼らがどのようにして、この「ネガティブ・ケイパビリティ」にたどりつき、その概念を用いたのかを記述した上で、現代社会を生きる私たちにとってこの能力がどのような意味を持つのか、またなぜ必要であるのかということをお話してくれる。

著者は精神科医で作家の帚木蓬生である。本書に専門的用語はほぼ使用されていない。ごく平易な言葉で読みやすく構成されており、教育医療、また著者の具体的日常や著名人の人生なども織り交ぜながら、私たちが日々を過ごす中で忘れてはならないものを示してくれている。

問題を解決する力や様々なものへのアクセスのしやすさ、スピード感、便利さが求められる今日であるが、私たちが人の中で生きてゆくために、「ネガティブ・ケイパビリティ」も大切になればと思うのである。

臨床心理学を学ぶ方のみならず「人間」を「科学」する学部の方々の今後の研究や実践にとって、何らかの手掛かりとなるものを得ることができる著書である。

推薦： 管生 聖子 (教育学系)

筒井 清輝

『人権と国家 ー理念の力と国際政治の現実ー』

(岩波新書 2022 年)

人間科学を学ぶのなら、人権問題は避けて通れない。人権法を学ぶための法律用語は骨が折れるが、本著は国際人権の歴史と歩み、意義と課題を分かり易く論じる入門書である。紛争やジェノサイドと言った国家間の問題から NGO や企業といった組織、夫婦別姓などの個人まで、多様な人権問題を網羅している。私が国際災害支援に入る前や、本著で成功例としているインドネシア・東ティモール真実友好委員会関係者に遭遇したときに知っていたら、相手を理解しもっと行動し易かっただろうと、学生の皆さんが将来グローバル社会に出て役に立つ基礎知識も兼ねて本書を選んだ。

国際人権は別の見方をすれば、人間が愚かにも繰り返してきたジェノサイドのような人権侵害の抑止の失敗の歴史でもある。それにもかかわらず、内政干渉を嫌う国家の壁を乗り越えようとした市民や国際社会の取り組みによる、わずかしかない成功例と歩みの流れが把握できる。4 章では世界の人権のその流れに対して、日本がどのように歩んできたのか、また取り組んで来なかったのか。アイヌや在日コリアンの問題なども事例に取り上げている。これから大学で取り組む卒業論文研究が、人権の歴史のどこに位置するのか。確認してみるのにも良いと思う。

私事だが、著者と私の姉は中高 6 年間クラスメイトで母親同士も近所で親しかった。姉から「授業のノートを全く取らずに聞いているだけ」と聞いた。板書のノート取りに終始しがちだった小学生の私は驚嘆し、少し畏怖の念を感じ、学者一家の著者が、どんな研究者になるのか、遠巻きに見て話をしたことはない。本著を通して「我々はどうやって自分の属する社会集団の外にいる人々の苦しみに共感できるようになったのか。」と SDGs の回答にもなる問い立てをする研究者になったと知った。

さて、大学では自分の読んだ本の著者に会ったり、話したりする機会というのも醍醐味である。大学で語り合い、議論した友人が著者になる日も来るかもしれない。講義などに限らず聞きたいことがあるときに私を反面教師に機会を逃さないように。知の出会いの場でもある大学というフィールドでもぜひ色々な書物に触れ、人と対話し、フィールドワークをして欲しい。

国際人権関連の推薦書等：

- ・ 申恵丰『国際人権入門』岩波書店、2020 年。
- ・ 法務省『人権白書』各年。
- ・ Sphere Association『人道憲章と人道対応に関する最低基準（スフィア基準）』2018。

推薦： 杉本 めぐみ（未来共創センター）

エマニュエル・サンテリ

『現代フランスにおける移民の子孫たち

都市・社会統合・アイデンティティの社会学』

(明石書店 2019年)

私の関心は、公教育がどれくらいマイノリティにも開かれた教育制度となっているかにある。なかでも日本とフランスの比較から、課題を抽出することを心がけてきた。

本書は、フランスの女性移民研究者として広く知られたサンテリ氏の翻訳書である。主にフランス語圏（欧米）の高校生から大学生向けに書かれた教科書である。フランスの戦後移民研究の成果をコンパクトに整理したものである。フランスは、アフリカを中心とする植民地から大量に人を受入れ、1970年代オイルショックまでは労働者として歓迎してきた経緯がある。本書のタイトルに現れているように、ここではその子孫たち（フランス生まれの第2世代以降）に光を当てることで、移民の受入れ政策の課題を明らかにした点が、特徴となっている。本書のキーワードは、子孫、郊外、排除、学校、就労、家族、宗教、市民権などとなっている。また移民子孫の生まれてから家族を営むまでの経路に注目したところにも、フランスの移民研究の特徴がある。フランスは人口統計学の伝統があり、こうした追跡（同世代のパネル）調査の世代間比較も含めてデータの豊富な国である。

学校教育制度の特徴を知ることには大事なことであるが、マイノリティ研究においては同様にマイノリティのマクロデータの動向を知ることと、その動態をマジョリティと比較しながら、分析することは、実は、マジョリティの教育制度の課題を見出すのにも参考になる。

なぜ、フランスにおけるマイノリティの学歴、就職などには、マジョリティと異なる結果が生じるのか。その差異は、フランスに固有なのか、国際的に共通した社会構造に課題があるのか。ひいては、日本にも同様の結果があるか、ないか検証する価値はあるだろうか。コロナ禍であるからこそ、読書を通じて一度海外に飛び出してみて、日本の実態を考えてみてはどうだろうか。

推薦：園山 大祐（教育学系）

角岡 伸彦

『はじめての部落問題』

(文藝春秋 2005 年)

等身大の部落と出会うための一冊である。本書にはこんな一節がある。

部落にも「喜怒哀楽」がある。部落民だからといって、いつも怒ったり哀しんだりしているわけではない。ところがこれまでは「怒」と「哀」ばかりが伝えられてきた。「喜」や「楽」も伝えるべきではないかと私は考えていた。(163 頁)

皆さんの中には、道徳の授業やホームルームなどで部落問題を教わった人がいると思う。歴史の授業で江戸時代の身分制について学んだ人もいるだろう。でも、「何だか暗い話だな」と感じたことはなかっただろうか。「今も部落差別があるのか知りたい」と思ったことはなかっただろうか。「知らない人にわざわざ教える必要はない」と反発したことはなかっただろうか。そんな人たちにこそ読んでほしい本である。

本書は、第 1 章「部落ってなに？」以下 6 章からなる。どの章から読んでもかまわないが、第 5 章「部落問題をなぜ学ぶのか」は特にじっくり読んでほしい。著者はかつて大阪大学で「部落問題論」という授業の非常勤講師をしていた。この章には、授業をうけた学生の声がたくさんのもっている。ぜひ、先輩の考えに接して、自分の部落問題認識をふりかえってみてほしい。この章には、部落の「喜」や「楽」を伝えるため、部落の伝統食を授業で振る舞った話ものもっている。部落にアポなし取材をしてレポートを書いた学生の話ものもっている。社会問題を考えるときには、頭の柔らかさと腰の軽さも必要だ。

大学では色々な出会いがある。ある出会いが一生を左右することになるかもしれない。私の場合、「部落解放研究会」というサークルに入り、部落出身の学生と出会ったことが、大げさにいうと、人生の転機になった。部落出身ではない者に部落問題を考える「資格」があるのかと悩んだこともあった。だが、大事なのは生き方であって生まれではない。そう考えて研究者の道を選んだ。そして今も部落問題や同和教育の研究をしている。

別に研究者になれとすすめているわけではない。だが、皆さんには、部落問題との出会いを通じて、社会のあり方や自分の生き方に目を向けてほしいと願っている。本書は、きっと、その手がかりになる。

推薦：高田 一宏（教育学系）

居場所カフェ立ち上げプロジェクト

『学校に居場所カフェをつくろう！』

— 生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』

(明石書店 2019年)

みなさんは「居場所」と聞いて、どんなことを思い浮かべますか。特定の場所、人、心の拠りどころを思い浮かべたでしょうか。みなさんの中には、学校が居場所だった方も、あるいは学校の中に居場所を見つけづらかった方もいるかもしれません。

この本は、学校内にカフェができれば、学校を居場所にできる子どもや大人が増えて、地域がもっと豊かに変わるのではないかとの問題意識から、学校内だけど学校でもない、固定的人間関係や緊張状態から離れることができる場としてのサードプレイス「居場所カフェ」の設立の背景が書かれています。また、全国にある「居場所カフェ」の開設の仕方、運営、高校との連携、各地の「居場所カフェ」の実践例などを紹介しています。カフェと名前通りの、各地ともお菓子とジュースやお茶、ホットドリンク等が無料で用意されています。高校、地域、行政などそれぞれの立場から、高校生が安心して過ごすことができる居場所づくりについての取り組みが書かれています。

以前、わたしは大阪府立西成高校の校内居場所カフェ「となりカフェ」に参加したことがあります。参加した時期は1月最初の開室日で、とても寒い日でした。わたしはドリンクを用意するコーナーの担当としてお湯を沸かしたり、紙コップを並べたりと開室の準備をしていました。来室した一人ひとりに「こんにちは！飲み物は何にする？」と声をかけて始まるコミュニケーションは、教師でもない、またお店の店員でもない、いわゆる「学校」っぽくない場所「となりカフェ」ならではのかわり方でした。その日は甘酒（ノンアルコール）も用意されていたので「今日のスペシャルドリンク甘酒です」と書いておくと、「今日甘酒あるんやあ！」「甘酒って飲んだことないわあ」と話しながらドリンクコーナーに来たり、甘酒を用意していると「このにおいなんなん？お酒？」と聞いてくれたりして、「一口飲んでみようかな、ちょっとちょうだい」「それ何飲んでんの？」などと自然と「となりカフェ」にいる人たちの中で会話が広がっていく様子がありました。安心できる場所で、初めて参加したわたしも「となりカフェ」にいる人として過ごせました。

家庭でも学校やバイトなど緊張状態に包まれる子どもたちが、気楽に立ち寄れて、教師とは違う人々と触れ合うことで緊張を解きほぐし、安心してそこにいることができる場所「居場所カフェ」。この本に書かれている社会的背景も含めて、みなさんにとっての「居場所」、となりのあの子にとっての「居場所」について考えてみてはいかがでしょうか。

推薦：玉城 明子（教育学系・教職課程）

ピエール・ブルデュー 石井洋次郎 訳

『ディスタンクシオン | ・ || —社会的判断力批判—』

(藤原書店 1990年)

学問や学術は、何やら難しいものを扱っていて自分の生活からは遠いものだ。私にとって大学生活は、そういった自分の学問に対するイメージをじわじわと壊していくようなものだった。

なぜ自分はアルバイトをしてまで高い服を買っているのか。気の合うと友人と合わない友人はなにが違うのか。父はなぜ失業してアルコール依存症になったのか。母が毎日私に愚痴ばかり言うのはなぜなのか。地元の友だちにフリーターやニートが多いのはどうしてか。自分が大学生活にいまいち馴染めないのはどうしてか。大学生の私にとって切実だったこのような問題群は、言葉を与えられることなく、私の中に断片的にちらばっていた。そうした日常の悩みや苦悩を言語化し向き合うためのアイデアや考え方を与えてくれたのが社会学だった。

正直、たくさんの本を読んだり人と議論したりすることを通じて社会学が身体に染み込んできたというようなものなので、どれか一冊を選ぶというのは非常に難しい。それでも一冊を選べと言われたら、「私の一冊」はフランスの社会学者ブルデューの『ディスタンクシオン』である。哲学者を志していたブルデューは、アルジェリア戦争での兵役経験を経て社会調査の重要性に気づく。そしてアルジェリア社会を対象に民族学的研究を行った後、フランスに戻って、自らの社会、すなわちフランス社会を対象に経験的研究を行うようになった。その一つの到達点が『ディスタンクシオン』だ。本書で展開されるのは、趣味（英語でいうところの taste）についての分析である。誰がどんな本を読むのか。誰がどんな音楽を聴くのか。映画館に行く人は誰か。インテリアやファッションにこだわるのは誰か。俳優の名前を多く知っている人は誰で、映画監督の名前を多く知っている人は誰か。そこに年齢や学歴、職業といった社会的属性はどのように関わっているのか。フィールドワーク、インタビュー、質問紙調査、大衆雑誌の切り抜きなど、さまざまな素材を対象に多面的な分析を行う。そしてそこから見出された、一見相互に関連していなさそうな数多くの知見をつなぎ、体系的な説明を与えていく。

決して読みやすい本とは言えない。その意味では初学者向きの本ではない。しかし社会学の広がりや奥行きを知るために、何よりも社会的想像力を身につけるために読む本としては最高の一冊だ（上巻・下巻なので正確には二冊だが……）。ブルデューの思考をなぞるように、時には原著や英訳と照らし合わせながらゆっくり丁寧に読んでほしい。

推薦： 知念 渉（教育学系）

上橋 菜穂子

『狐笛のかなた』

(文庫版 新潮社 2006年 / 単行本版 理論社 2003年)

本書は、2004年に第42回野間児童文芸賞を受賞した児童文学である。「りょうりょうと風が吹き渡る夕暮れの野を、まるで火が走るように、赤い毛なみを光らせて、一匹の子狐が駆けていた。」何層ものピンク色と朱色で染まった空と野の中を、赤い一本の線のようものが走り抜ける姿がまざまざと目に浮かぶ。私は、冒頭のこの一文を読んで物語に引き込まれた。

本書は、人の心の声を聞くことができる能力を生まれながらに持った少女と、「呪者の使い魔にされた霊狐」である子狐、そしてもう一人の少年を取り巻く物語であり、恋物語という一面も持つ。舞台は、江戸時代を彷彿とさせる架空の国である。国同士の争いとそれぞれの思惑の中で翻弄されながらも、懸命に生きる少女や少年たちの姿に、胸がぎゅゅと締め付けられる。

本書の著者は、2014年に国際アンデルセン賞作家賞を受賞した上橋菜穂子氏である。上橋氏は作家であるが、研究者でもある。川村学園女子大学特任教授として、文化人類学の観点から、オーストラリアの先住民民族アボリジニをテーマに研究を行っている。

彼女の作品の特徴は、物語の本筋に関わるかどうかに関係なく、すべての登場人物を一人の人間（ときには人ではない何か）として、それぞれ丁寧に魅力的に描くことであると思う。また、人と自然とのつながりや共生、食に関する描写も物語を彩る。（余談だが、彼女の代表作の1つである「精霊の守り人」シリーズでは料理本も出ている。）

他方、私の専門は国際法学である。人権の国際的な保障の観点から、人権条約の条文解釈や国連の人権保障制度の実行などの分析を行う。主な研究テーマは、被災者の権利保障や人道支援、国内避難民の保護などである。

人権と聞いて何を想像するだろうか？人権とは、人間の尊厳を前提し、すべての人は、一人の例外もなく、一人ひとりが人であるということだけで、かけがえのない尊い大切な存在であるということである。誰にでも、いつでも、どこでも、同じ人権がある。人権というものを研究しているからこそ、登場人物一人一人に向き合い、ときに寄り添いながら物語を描く上橋作品に惹かれるのかもしれない。文化人類学に関心がある人も、ファンタジー小説が好きな人も、そうでない人も、一人の人間を、丁寧に、そして優しく描き出す上橋氏の作品をおすすめしたい。

推薦：徳永 恵美香（未来共創センター）

熊田 孝恒

『商品開発のための心理学』

(勁草書房 2015 年)

皆さんは心理学という学問にどのようなイメージを持っているだろうか。臨床心理学や教育心理学などのイメージを抱く人が多いのではないか。こうした現場に近い心理学の研究分野は、伝統的に応用分野と呼ばれ、そうでない分野は基礎分野と呼ばれている。馴染みが薄いであろう基礎分野を簡単に紹介すると、人間の認知や行動などに関わる心の基礎的な特性を主に実験によって明らかにしようとする分野である。実験者が設定した条件のもとで実験参加者の反応（反応時間や正答率など）を計測し、条件間の差をもとに、その背後にある心的過程の解明を目指すのである。

基礎研究では、実験に余計な影響を及ぼしそうな要因は排除され、実験者が明らかにしたい要因の影響だけを慎重に検討することとなる。また、ランダムに選ばれた実験参加者の結果を平均化することで個人差を相殺し、人間全体に一般化できる心の法則を見出そうとする。こうした方法論は、科学としての心理学に必要な要素であるが、世の中の複雑な問題に対する具体的な解決策を提示するには十分ではない。人間全体における広く普遍的な心の法則を解明したとしても、その知見を実験室外での問題にどの程度適用可能か分からないためである（これを「生態学的妥当性」の問題と言う）。また、年代や性別といった個人属性、さらには個人が育ってきた環境や嗜好などの個人差は、基礎分野の研究では「ノイズ」として排除されるが、現場の問題を解決するに当たっては、考慮すべき重要な要因である。

本書では、こうした基礎と応用の隔たりに対して、基礎分野の心理学者がどのようにアプローチできるのか紹介されている。自動車や家電製品、駅の案内表示、接客サービスなどに心理学がどのように活かされているかを知ることができる。人間科学部には、心理学の研究室がたくさんあるが、扱っている領域は基礎から応用まで幅広い。私は交通安全や学校安全が専門であるため、実践的な応用研究を中心とするが、基礎と応用のバランスは非常に重要だと考えている。本書をきっかけに、皆さんにもぜひ基礎と応用の関係性（どちらが優れているというものではない）に目を向けてもらいたい。そして、応用分野であっても基礎を押さえ、逆に基礎分野であっても応用を視野に入れた研究をしてもらいたい。

推薦： 中井 宏（行動学系）

ノーラ・エレン・グロース 佐野正信 訳

『みんなが手話で話した島』

(早川書房 2022年)

私は日本で暮らす移住者の方々との対話を通して、社会の周縁に追いやられた人々の生活の実態とそれに抗おうとする苦悩や理不尽さについて聞かされては、共生社会の実現を阻む社会課題の深刻さとその解決の難しさ、自身の無力さについて思い知らされてきました。それと同時に「共生」に対するモヤモヤも強くなっていきました。そんな中、ある移住者が、そのモヤモヤの答えはろう者の親を持つコーダ (Children of deaf adult/s) としての私自身の経験にあるのではないかと気づかせてくださいました。

みなさんは、聴覚障害者と一緒に何かすることになった場合、何を感じ、何をしようと思うのでしょうか。話が通じるのかな。手話通訳のサービスを利用しようか。筆談を取り入れればいいのかも知れない。この際手話を学んでみようか。そのようなことを思い浮かべるのではないかと思います。障害は社会の中にあるという障害の社会モデルに基づき、そこにある障害を取り除くための行動を起こすことは賛同されるべきことです。しかし、本当にそれだけでいいのかというと、やはりまだモヤモヤが残ります。

このモヤモヤを晴らすヒントを与えてくれた本の1つが、医療人類学者グロースの著書『みんなが手話で話した島』でした。これは記録文書や島民のオーラルヒストリーをもとに記されたアメリカのマサチューセッツ州にあるマーサズ・ヴィンヤード島の話です。この島では、聞こえる、聞こえないに関係なく、住民の間で共有されている手話がコミュニケーションの言葉の1つとして用いられていました。そして、この島のろう者は当時のアメリカ本土のろう者とは異なり、教育を受け、家族を設け、政治に参加するなど、地域社会に溶け込み、コアメンバーとして活躍することもあったそうです。

この本の帯には「あの人たちにハンディキャップなんてなかったですよ。ただ聾というだけでした」という島民の言葉が書かれています。今の社会は、改善されつつあるとはいえ、聴覚障害が人々を分け隔て、分断をも維持するような社会であると言えます。そんな社会に対して、この言葉は、共通の言語を持つことによって同じ地域社会を同じように生きる、ただそれだけのことの中に共生の鍵があるのではないか？というメッセージを投げかけているように感じられます。

この本は、共生社会の実現の根本となることばとことばの活動だけではなく、フィールド調査をはじめとする研究手法を考える上でもさまざまな論点を提供してくれるのではないかと思います。ことばの活動が障害や共生を考える上でいかに重要なのか、ぜひ、この本を手にしていただき、共生社会の実現の糸口を見つけるべく、皆さんとの対話の実現できたらいいなと思っています。

推薦： 中井 好男 (共生学系)

リンダ・グラットン／アンドリュー・スコット 池村千秋訳

『LIFE SHIFT (ライフ・シフト)』

(東洋経済新報社 2016年)

「人生 100 年時代」とは、多くの人々が 100 年以上生きる長寿化時代を意味する言葉です。『LIFE SHIFT』では、長寿化に伴って、人々の生き方と社会のあり方が大きく変わることが提唱され、人生 100 年時代という言葉が広まるきっかけとなりました。さらに、2017 年には、日本政府が「人生 100 年時代構想会議」を設置し、長寿化時代の到来に備えて社会制度の整備が検討されるようになりました。

この本で提唱された人々の新しい生き方とは、人々が長く生きるようになるにつれて、「教育→仕事→引退」という 3 つのステージの人生から、新しいステージがいくつも現れるマルチステージの人生へと移行していく、というものです。実際に、この書評を読んでいる人の中にも、仕事から教育に移行した人や引退から教育に移行した人がいるかもしれませんが、人生が短かった時代には、10 代後半から 20 代前半に大学や大学院という教育のステージを経験し、仕事のステージに移行することがほとんどだったかもしれませんが、人生が長くなる時代には、何歳でも教育のステージを経験するようになり、教育から仕事だけでなく、仕事から教育という移行を何度も経験するかもしれません。

この本は、私たちはこれからの人生をどのように生きていけばよいのかと自分に問うきっかけを与えてくれます。長く生きる人が身近におらず、生き方の見本にできるロールモデルがすぐに思い当たらない人にとっては、この本は生き方の参考になるかもしれません。

さらに、この本は、自分自身の生き方だけでなく、これからの社会をどのように築いていけばよいのかを考えるきっかけも与えてくれます。大学や大学院では、さまざまな年齢の人が教育を受け、仕事あるいは引退から教育に移行することが増えていきます。企業も、仕事あるいは引退から教育への移行を支援したり、年齢を基準にした採用、昇進、給与支給、さらに引退という制度を見直したりすることが求められていくでしょう。

人間科学部／研究科では、時代が突きつける新しい問題に対して、さまざまな学問分野から考え、問題解決を図ることができる力を養うことを目標に掲げています。この本を読むことで、長寿化時代が突きつける問題とは何か、自分だけではない多くの人と社会に関わる問題にどのような学問分野と協働しながら対処できるか、考えてみていただけたら嬉しいです。

なお、この本では、2007 年に日本で生まれた子どもの半分は 107 年以上生きると予想されています。多くの人々が 100 年以上生きる長寿化時代が到来するという予想が正しいのか疑問に感じた人は、人口統計を調べたり、人口学の論文を読んだりしてみてください。

推薦：中川 威 (行動学系)

ハラルト シュテュンペケ 日高敏隆・羽田節子訳

『鼻行類: 新しく発見された哺乳類の構造と生活』

(平凡社 1999 年、博品社 1995 年、思索社 1987 年)

かつて鼻で歩く哺乳類がいたことをご存じだろうか。太平洋に浮かぶハイアイアイ群島。その閉ざされた島々で独自の進化を遂げた哺乳類。それが、鼻行類、全 14 科 189 種である。頭を下にして 4 本の長い鼻で歩くナゾベーム属がよく知られており、学名もその姿から名付けられている。和名にも「ハナアルキ」という名訳が当てられている。しかし、全ての種が鼻で歩くわけではない。本書では、鼻行類がみせる鼻の構造と機能の多様さ、そして生き様が、存分に語られる。

この奇妙な哺乳類がなぜ、どのようにして進化してきたのか。読者は深く悩むに違いない。しかし、考えてほしい。私たちは、四肢を有する哺乳類なのに、歩くのに 2 本しか使わない。残りの 2 本で、抱き合ったかと思いきや、殴りあったり、何やらけったいなものを作っては壊す。頭がやたらデカくて、顔が平べったくて、鼻だけが突出している。か細い声でぺちゃくちゃと耳障りなことこの上ない。そう、ヒトもかなり奇妙な哺乳類なのである。私などはその進化に思いを馳せ、悩む日々を過ごしている。

ここで、一つ一つの種について熱く語りたいところだが、映画の筋を見事に語り切る評論家のごとく、全くの興醒めとなること間違いない。本を開いてほしい。初学者は面食らうかもしれない。各種の命名や記載は学術書そのものである。特に解剖学的記述は難解である。が、そこは大胆に読み飛ばしてもらっても全く問題ない。魅力的で、詳細な学術イラストが散りばめられており、それを眺めれば事足りる。そして、行動や生態に関する詳細な観察記録を読もう。衝撃である。古生物学の泰斗ジョージ・シンプソンが Science 誌に寄稿した書評を引き合いに出すまでもなく、収斂と適応放散による生物進化の驚異に目を見張るばかりだろう。こんなものを創造しうるのかと。

私の書棚には、学生の時に買った博品社の愛蔵版がある。実家を出て以来、8 回、引越しをした。そのたびに蔵書を整理してきた。現在は、最盛期の 5 分の 1 くらいだろうか。その強烈な淘汰圧をかいくぐってきた本書は、最古参の風格を漂わせつつも、読み返すたびに隔々に新たな発見があって楽しい。名著である。

推薦：西村 剛（行動学系）

稲垣 佳世子、波多野 誼余夫

『人はいかに学ぶか ―日常的認知の世界』

(中央公論社 1989年)

30年以上前、私も皆さんと同じ人間科学部の1年生であった。まぐれで合格してしまった私は、圧倒的な学力不足に直面していた。タイトルには興味ひかれるのに、5分についていけなくなる授業に消耗し、頭の回転が早く、知識も豊富で、物腰も生活も大人な学友たちの迫力から自分を守るのに必死な日々だった。ただまあ真面目というか気弱であったので、ギリギリ卒業できるケモノミチを探し当てるような心持ちで授業を選び、出席を続け、なんとか進級し、教育学の研究室に拾ってもらったのだが、その頃にはもう「人間科学」は半ばあきらめていた。卒業さえできればいいや、が本音だった。

そんな時に読む機会があったのが、今回の1冊である。著者らは、認知科学、特に学習に関わる心理学では大変著名で、本書では、人が学校とは違い、日常では「必要」を超えていきいきと学ぶ存在であることを、興味深い研究事例を紹介しながら、論じていく。

当時の私は素っ裸にされるような気持ちで読んだ。高校では入試で点がとれるか、大学では単位がとれるかどうかという点で、その知識が必要かを判断してしまう癖がついていたせいで、ずいぶんと貧しい場所に流されていた自分が見えた。一方で、あら、そういえばサークルでやっている演劇のことだと、このところかなり詳しくなったし、いくらでも知識を吸収したいと思っているじゃないか。それに面白そうと思う授業があるなら、まだ大学で学びたい気持ちが残っているんだろう。楽しんで学習を続ければ、ちょっとはなりたい自分に近づけるんじゃないかと、自分の中に確かな部位を見つけた気になった。

本書の論考は、教育のあり方を提言するものだけれど、読者自身を学習に対して前向きにさせる副作用を持つ。かくして私は人間科学をあきらめるのをやめたのだった。

副作用の強すぎた私は、この学問を修めたら、学習の秘儀が身について、とても賢くなれるのではないだろうかなどと錯誤して(実際、そうはいきませんでした)、大学院に進んでしまう。私の研究分野である教育工学とは、学習や人間に関する人間科学の理論や知見を何でも活用して、人の学習を成功に導くような授業や教材を実現しようという大胆なたくらみをもった学問である。詳しくは授業でお会いした時に。

推薦：西森 年寿(教育学系)

金出 武雄

『独創はひらめかない — 「素人発想、玄人実行」の法則』

(日本経済新聞出版社 2012年)

科学者というのは、頭をいっぱい使って複雑なことに取り組んでいる人というイメージがある。でも、彼らが目指しているのは、本当は「シンプルさ」である。複雑なことを複雑なまま扱うのではなく、少し単純すぎるかなというくらいにシンプルに解き明かしてみせる。シンプルにすることで、人を動かす力が出てくる。それぞれの人が「自分にもできそうだ」「自分ならこうする」と自由に発想できるようになる。その種をまくことのできる人が優れた科学者であり、この本の著者は間違いなくその一人だ。

金出武雄先生は、1945年生まれのコンピュータ科学者で、カーネギーメロン大学教授。人工知能による視覚やロボット研究における世界的権威である。この本には、アメリカで30年以上の研究生活を送るなかで得たノウハウや視点が、惜しげもなく語られている。タイトルになっている「素人発想、玄人実行(素人のように考え、玄人として実行する)」は、多くの事例から確信した研究開発の秘訣であるという。発想は、素人のように単純、素直、自由、簡単でなければならない。でも、それを実現するには、玄人としての知識や技術が必要である。その両方が欠かせない。

読みやすいエッセイではあるが、この内容は著者にしか書けない。たとえば、日本から講演のためにやってきた若い企業技術者にアドバイスする場面がある。「用意したスライドを後ろから逆に使ったらいい。」日本では、研究の背景から現状、方法などを順に説明するのがよいと教えられる。でも、せっかちなアメリカ人なら途中で帰ってしまう。そこで、いつ帰ってもいいように、よいスライドから順番に使え(ベストファースト)と助言したのである。その研究で何が分かったのか何ができたのかという結論を最初に伝える。結論がつまらなければ、聞く意味がない。結論が面白ければ、どうしてそこにたどりついたのかという謎解きを、興味深々と聞くことになるだろう。

他にも、名言がいくつも出てくる。「解く価値のある問題を探せ」「アイデアは人に盗まれない」「構想力とは問題を限定する能力である」。こうやって書いているだけで、わくわくしてくるし、前向きな気持ちになってくる。私が、現在「かわいい」に関する実験心理学的な研究を行っているのも、このような姿勢に深く感銘を受けたからである。

新入生のみなさん、学問の入り口に立った今だからこそ、ぜひシンプルに考え、解く価値のある問題を探してください。この本には、そのためのヒントがたくさん詰まっています。

推薦： 入戸野 宏 (行動学系)

永井 均

『マンガは哲学する』

(岩波現代文庫 2009年)

人間は何のために生きているのだろうか。世界はなぜ何のために存在するのだろうか。

ふとした瞬間に、こういう疑問をもったことのある人は、じつは自分でも気づかないうちに「哲学」の入り口へと近づいている。本書は、日本のマンガ作品の中に哲学への入り口が豊富に隠れていることを教えてくれる良書で、マンガによる哲学入門書だ。しかもこれほど質の高い哲学の入門書は、めったにない。この本を手にとれば、藤子・F・不二雄や吉田戦車、永井豪などマンガの名作に触れながら、人間存在の不思議について考えていくことができるので、学生のみなさんにお勧めである。私が豊中キャンパスで担当する「人間学的话题（哲学から見る心の世界）」でも教科書として指定している。

さて永井均さんの『マンガは哲学する』は、人間や世界に対する不思議の世界へと誘ってくれるとても優れた書物だが、答えは与えてくれない。その不思議がどこから私たちのところにやって来るのかに答えるためには、じつは哲学だけでは不足で、社会理論や表象文化論もあわせて考えていく営みが必要になってくる。近代社会の構造や、その中における文化表現の位置について把握する必要があるのだ。そうすることで、社会の構造や歴史の流れの中にある個人の意識の運命を捉えることができるようになってくる。

私の授業ではマンガやアニメをよく素材として取り上げる。それにはちゃんとした理由があって、米国の思想家F・ジェイムソンが「文化表現とは現実における解決不可能な矛盾の想像的解決であり、それを分析することで、個人の経験から社会の構造の把握へとさかのぼることができる」と言っていることに依拠している。

みなさんの中にも、現代のマンガやアニメ作品に魅かれる人は多いだろう。ついついたくさん観てしまうという人もいるかも知れない。そのことには、ちゃんとした理由があると言うことを、近現代の哲学、社会理論、精神分析、表象文化論などを組み合わせれば、明らかにすることができると私は考えていて、研究テーマの一つとしている。私が担当する比較文明論や文明動態学といった分野では、このような手法で個人の意識が抱える問題から遡行して、私たちの生きる社会のもつ動的な構造へとアプローチし、今後の運命を考えていく。ただアニメやマンガを「観る」ことが好きであれば、それだけでもいい。でもそこから人間や社会のことを「考えてみたい」と思ったら、本書が最初の一步になるだろう。ぜひ手に取ってみてほしい。

推薦：野尻 英一（社会学・人間学系）

ジェローム・ブルーナー

『意味の復権 ―フォークサイコロジーに向けて』

(ミネルヴァ書房 1999年)

「保育園落ちた日本死ね!!!」と題された匿名のブログがきっかけで、政府は保育の受け皿を増やす方向へ動き始めました『朝日新聞』2016年3月24日朝刊)。このブログが国会で取り上げられた時、首相は、真偽を確かめられないと答弁するに留まりました。ところがその後、「保育園落ちたの私だ」と書いた紙を掲げる母親らが国会前で集まるまでに至り、政府もいよいよ重い腰を上げたようです。

発端は、一人の母親が、我が子の保育所入所の選に漏れたことを怒って、ネット上に綴った書き込みです。批判もあるにせよ、それが人々の共感を呼び、政策に反映されたのです。その一方、定期的に政府が発表する保育所の待機児童数は、5年ぶりの増加を既に示していました。こうした公的な統計がありながらも、センセーショナルで私的な物語（ストーリー）が、政府や世論を動かしたとも言えるでしょう。実は、このように、一つの事例に表れた物語が、社会を動かした例は少なくありません。

では、なぜ、物語は人や社会を動かすのでしょうか。本書の著者は、物語によって生まれる「意味」に注目し、この疑問に答えようとしています。本書によれば、自分の経験がどのような意味を持つのかを教えてくれるのは、経験を順序立てたり理由づけたりした物語です。自分の物語は、幼い頃から親に語りかけられたり、絵本に接したりする中で、社会や文化の物語から取り込まれながら、生成されます。その一方、自分の物語が発信されれば、社会や文化の物語として流布する可能性もあります。つまり、「意味」を付与する働きをもつ物語は、個人と社会・文化との間でやり取りされて、影響力を発揮するというわけです。

著者によれば、心理療法やカウンセリングは、自分についての新しい物語の創造です。自分についての物語が変われば、過去の思い出し方や、現在の振る舞い方、未来の見通し方も変わる。私自身は、心理療法やカウンセリングで起きていることを、こうした自分についての物語の再編という視点から読み解くと共に、一人一人に応じた実践方法を作り出そうとしています。

ところで、本書の著者は100歳で亡くなりました。60代で早々と自伝を書きましたが、もしも2冊目を書いていたら、また少し違った自伝になっていたかもしれません。彼の自伝、いわば私的なストーリーは、ほとんど現代心理学のヒストリーです。「保育園落ちた〜」の母親は、将来、子育てが一段落したらどんなふうに当時を振り返るのでしょうか。

推薦：野村 晴夫（教育学系）

小林春美・佐々木正人（編）

『新・子どもたちの言語獲得』

（大修館書店 2008年）

ChatGPT や Gemini, Grok といった大規模言語モデルの登場によって、「言語獲得」という問題はすでに解かれたように感じられるかもしれない。しかし実際には、人間の言語獲得の謎はむしろ一層深まっている。というのも、人間の子どもの生後数年で受け取る言語入力は、大規模言語モデルと比べると驚くほど「ないない尽くし」だからだ。入力の絶対量は圧倒的に少なく、経験は個人差が大きく、しかも欠損だけである。スプーンを見ているときに、必ず「スプーン」という単語を聞けるわけでもない。それでも「子どもたちが、誕生後わずか数年のうちに、基本的な言語能力のほとんどを身につけてしまうのは、実に驚くべきことである」（本書『まえがき』）。

本書は、子どもの言語獲得をめぐる理論的背景から実証研究までを見渡し、重要な知見を簡潔にまとめた優れたテキストである。言語獲得研究の学説史や論争を俯瞰できるだけでなく、「音韻」「語彙」「文法」の獲得過程が、実験や観察にもとづいて丁寧に整理されている。さらに、「ジェスチャー」や「手話」といった視点も取り上げられており、言語を人間の多様な行為として捉える広がりを感じられる。

なかでも第6章『文法の獲得〈2〉：助詞を中心に』（pp.141-164）で紹介される子どもの助詞の誤用例は印象的だ。「オーキノ フクロ」「ダレモ デテルカナ？」「ウンコガファイテ」（それぞれ、ノの付加、カ→モの誤用、ヲ→ガの誤用）などの発話事例は、子どもが大人の言葉を単に模倣しているのではなく、言語のルールを子ども自身が見つけ出し、試行錯誤しながら文を組み立てていることを示している（その意味で、「誤用」という表現は本来不適切だろう）。子どもは、自らの内側で言語を“発明”しているのだと思知らされる。これはすごいことだ。蛇足だが、こうした子どもの興味深い発話事例をまとめた『きょう、ゴリラをうえたよ』（KADOKAWA, 2024年）も併せておすすめしたい。

本書は、「なぜこのような不完全な環境で、人間は言語を獲得できるのか」という問いに即答を与えてくれるわけではない（だからこそ今もなお世界中で研究が進められている）。しかし、自分自身が当たり前のように使っている言語が、どのような過程を経て形づくられてきたのかを辿ることで、人間の学習や発達の不思議さに強い知的刺激を受ける人もいるはずだ。言語獲得を入りに、人間科学の面白さに触れたい学生に、ぜひ手に取ってほしい一冊である。

推薦：萩原 広道（行動学系）

アーシュラ・K・ル＝グウィン 谷垣暁美 訳

『ギフト 西のはての年代記Ⅰ』

(河出書房新社 2006年 / 文庫版 2011年)

ゲド戦記やSF小説などで知られるル＝グウィンによる3部作の第1巻である。文化人類学者の父と作家の母の影響を受けて育った著者が晩年に執筆した作品は人間科学の観点からも興味深いテーマを扱っている。

『ギフト』の原題は複数形の Gifts であり「さまざまなギフト」を指す。ここで描かれるギフトは、「天賦の才能」でもあり、「贈り物」でもある。

物語の舞台は架空の国である「西のはて」北方の荒涼とした高地である。代々続く特殊能力を継承する家系の息子である主人公のオレックは、父親からその能力の発現を期待される。彼の家系に伝わる能力は、視線により物事を元の状態に「もどす」能力であり、生き物であればその生命を破壊する力にもなる。オレックは能力を制御することができないと考え自らの目を覆って3年の月日を過ごす。父親は高地での勢力抗争、家系の地位と権威の維持を賭けて息子の存在を操作しようとする。特殊能力とその継承、権力争い、威圧と交渉による力のせめぎ合いの状況が、背景に描かれる。著者ル＝グウィンは、奴隷制や略奪などの不条理も含めて社会の現実を提示しつつ、主人公の生き方の模索を描いていく。やがて少年オレックは期待された能力を持たないことを悟り、亡き母から受け継いだ別の能力、物語を記し読み語る力を携えて、親友の少女グライと共に高地を後にする。グライもまた自らの能力を活かす新たな道を模索する。

この物語は、少年をめぐる能力の継承と人生の模索が一つの社会関係の中に位置づけられながら展開する構成をとる。架空の物語でありながら著者ル＝グウィンによる社会の現実に対する優れた洞察力が示される。高地社会の詳細な描写に加えて、社会の外部からもたらされる力や存在の意味、人間の力の発揮されるべき方向性など、現代の社会を考える際にも重要な課題の多くがちりばめられている。登場人物たちの詳細で活力ある描写も物語に厚みを加える。書かれた小説の形態をとりつつ、人間の紡ぎだす言葉や人間が発する声の重要性にも注目したこの作品は、叙事詩と芸能との関連を探求する私自身にとっても示唆的である。

異世界ファンタジー小説の考察は、決して文学部の専門領域に限られるのではなく、人類学、社会学、哲学などの領域を含む人間科学部においても重要な研究領域である。この作品は社会における人間の位置づけ、力の不均衡、人間の創造性や自由の希求など人間科学の視点から分析する際の課題を多く提示する。

3部作の構成は、それぞれが独立した物語である一方で緩やかな関連性も見られる。どの巻からも読み始めることができるが、オレックとグライは他の作品にも登場して重要な役割を果たす。他の2作『ヴォイス』『パワー』と共に、読んでみることを推奨したい。

推薦：福岡 まどか（社会学・人間学系）

嘉田 勝

『論理と集合から始める数学の基礎』

(日本評論社 2008 年)

本書は、数学、統計学、情報科学といった分野の基盤となる「論理と集合」の概念を、一貫した流れでわかりやすく解説してくれる良書です。人間科学部に入学したにもかかわらず、数学を好き好んで勉強する人はそれほど多くないかもしれません。しかし、私は皆さんにもぜひこの本を通して、抽象的な数学の世界に触れてほしいと考えています。

その理由のひとつとして、高度な情報技術がこれまで以上に深く人間生活に浸透してきていることがあげられます。IT 技術の急速な発展により、スマートフォンなしでの生活はもはや想像もつかなくなりました。また、AI（機械学習）の進化は目覚ましく、人間を超えるパフォーマンスを示す事例も珍しくありません。これらの情報技術の基本的な仕組みや利点、欠点を学ぶことは、今後の社会を生き抜く上で大いに価値があるといえますし、人間について多角的に考える上でも不可欠な観点となりえます。その意味で、これらの技術を支える数学の基礎を学ぶことも重要だと考えています。

大学以降の高度な数学は、主に集合と論理を用いて記述されることが多いですが、これらの概念を正面から取り上げ、丁寧に解説している書籍は少ないのが現状です。そんな中、本書は一貫した表現と細やかな解説により、初学者にも理解しやすい内容となっています。最初は難解に感じる部分もあるかもしれませんが、繰り返し読み進めることで、独学でも高度な数学を理解するためのリテラシーを身につけることができるでしょう。

たとえ本書を読んだ後、数理的な学問に対して興味が湧かなくても安心してください。本書で習得できる論理の考え方は、数学だけに留まらず、あらゆる学術的議論や問題解決に応用が可能です。論理的な言葉を使って物事を整理すれば、誤解の少ない議論や明確な思考が実現できるでしょう。

さらに、本書をきっかけに数学的な枠組みに興味を持ったなら、自分の関心分野と数学の交差点を探してみるのもおすすめです。たとえば、私自身は人間の行動を数理的なモデルで表現することで、従来の分析手法にとらわれない統計解析を行うことを研究テーマの一つとしています。数理モデルの入門書としては、『その問題、数理モデルが解決します』（著：浜田宏）や『たのしいベイズモデリング』（編：豊田秀樹）などが参考になるでしょう。

本書は、数学の基礎だけでなく論理的思考の訓練にも最適な一冊です。数学が苦手だと思っている方も、まずは気軽に手に取ってみてはいかがでしょうか。

推薦：福島 健太郎（行動学系）

西平 直

『誕生のインファンティア—生まれてきた不思議、
死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議—』

(みすず書房 2015年)

自分は死んだ後、どうなるのか。自分は生まれてくる前、どうだったのか。自分はなぜ生まれてきたのか。これらの問いに対する最終的な答えなど得られるはずもない。しかし、それにもかかわらず、我々は、これらの問いについて思いをめぐらす。その問いや思索は、我々の存在をときに根本で支え、ときに大きく揺るがすほどの非常に強い力を持つ。この著書は、これらの根本的な問いに、学生たちが、あるいは哲学者、心理学者、文学者やジャーナリストたちが、どのように向き合ってきたのか、向き合っているのかを豊富な実例から示してくれる。しかし、本書を読み進めていくにつれ、読者である我々自身もまた、すでに子ども時代にこれらの問いをめぐって思い悩んだことに、あるいは、ある時期からこれらの問いに封をしてきたにもかかわらず、今でもなおそれが自身の心の奥底に眠ったままであることに気づくことになるだろう。

著者は、本書のタイトルにもある「インファンティア」という語を、「子どもの頃に感じた、言葉によって写し取ることのできない、在ることの不思議」という意味で用いている。存在の「不思議」をめぐる問いと思索は、我々自身の人生に関しても、教育学の学問的営みに関しても、クロスワードパズルに似たところがある。複数の語が交差する箇所にはぽっかりと空いた空白、それは我々自身の存在をめぐる問いである。その周囲の空白は、個々人の生の歩みの中で、家庭や学校での経験によって、あるいは、教育や人間をめぐる学術的な議論を通じて徐々に埋められていくのかもしれない。「どうすれば学力を上げることができるのか」「どうすれば有名企業に就職できるのか」「どうすれば業績を上げることができるのか」。こうした問いもまた容易に答えられるものではないが、たとえ暫定的にでも答えを見出すことはできるだろう。こうして周囲の空白を埋めていけばいつかクロスする部分の空白を埋めることもできるだろうと高を括る。あるいは、今の自分が壊れてしまうかもしれないという危険を察し、この空白箇所から目を逸らそうとする。しかし、周囲の空白が埋まれば埋まる程、それとの対比で、ますますクロスする部分の空白が際立ってくる。いざその空白を埋めようとする、どれほど深く考えてみてもぴったりの文字を見出すことができない。そのつど違う文字を入れてみるのだが、その文字に連なるいくつかの語は意味をなしても、今度は意味をなさなくなる語が出てきてしまうのだ。

この著書は、たとえ答えを見つけることができないとしても、敢えてこの空白箇所をめぐって問い続けることの意味・重要性を示してくれる。その意味で本書は、教育哲学の入門書として最適の書と言えるが、誕生以前から死後までの、学校教育に限定されない人間形成全般を対象とする点に特徴をもつ教育人間学への入門書として特徴づけることもできる。

推薦： 藤川 信夫（教育学系）

笠原 嘉

『軽症うつ病：「ゆううつ」の精神病理』

(講談社 1996年)

この本は、精神科医である著者が「ゆううつ」やおっくう感を、こころの病としての視点から書かれた新書です。人はひとりでのゆううつになる、そのとき何が心と身体の中で起きているのかを、「気分の障害」という視点から整理していきます。内容は、「軽症化」していると捉えられるうつ病像、そのような人の特徴、診察室での診察場面、治療や回復のプロセス、などが描かれます。内容は現在の視点からすると、一昔前のといった印象もある内容で、現在のうつ病の診断、治療といった知見を勉強する目的にはそぐわないかもしれません。この本ではうつ病の精神病理学、精神科医の目線、うつ病治療の概要など記載されているが、私が注目するところは本書で登場するいくつかの事例の記述です。うつ病症状としては「軽症」であるとしても、それはその方の苦悩や体験の一部でしかありません。うつ症状が軽くてもその方の苦悩が軽いものであることにはならないのです。自身の感情が揺り動かされるような人生の経験や離別、生きているからこそ経験される体験をどのように生きていくのか。うつ症状としての悲しみから、失われたものへの憧憬に伴う悲しみ、それぞれの感情や体験があります。

本書で何気なく書かれている事例に感じ入り、読んだ記憶も薄れているところはありませんが、そのような体験と出会ったことは記憶されています。本を通じて、皆さんにもそのような他者との出会いがありますように。

推薦：藤野 陽生（教育学系）

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン

『ウィトゲンシュタイン全集 9 確実性の問題・断片』

(大修館書店 1975 年)

学校生活の中で、みなさんは沢山の「知識」を身につけてきたかと思います。大学入試に向け、教科書の内容を懸命に暗記してきたことでしょう。しかし、その「知識」は本当に確かなものでしょうか。

例えば、日本で生活する人のほとんどは「富士山は日本で最も高い山だ」ということを「知って」います。けれども、この文章を読んでいる人の中に、日本全国の山の高さを自分で測定してみた人はいないでしょうし、地図帳で山の高さを全て調べ、富士山が最も高いことを確かめた人さえいないかもしれません。にもかかわらず、日本で一番高い山は富士山だと誰もが確信しているのです。

哲学者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、絶筆となった「確実性の問題」の中で、「知っている」とはどういうことなのかを粘り強く考えています。少し引用してみましよう。

一六二 教科書、例えば地理の教科書に書かれていることを原則として私は信用する。何故かと問われれば、これらはすべて繰返し確かめられてきた事実だから、と言うであろう。だが私はどうしてそのことを知るのか。どういう証拠があってそう言えるのか。[…]
(47 頁)

私たちは様々な事柄を「知っている」と思っています。けれども、それらの「知識」が正しいと確信する理由を探してみると、多くの場合、思いのほか根拠薄弱であることに気づくでしょう。それどころか、そもそも当の「知識」をどこで見聞きしたのかさえ、思い出せないこともしばしばです。

このことは「知識」の持つ社会的性格と関わっています。私たちが自分の力で知ることのできる事柄はごく一部で、大半は他人から得た情報に頼らざるをえません。その意味で、「知識」と「信頼」は表裏一体であり、「知る」ことは高度に社会的な営みだと言えます。その最たる例は、見知らぬ科学者同士の協働からなる科学でしょう。

私が専門とする知識社会学や科学社会学といった分野は、「知識」の持つ社会的性格のあり方を、様々な観点から明らかにしています。ウィトゲンシュタインの哲学的洞察は、読者をそうした社会学のとば口まで誘ってくれます。

さらに興味がある人は、科学史・科学社会学の古典となっているスティーヴン・シェイピンとサイモン・シャッフアーの『リヴァイアサンと空気ポンプ』(名古屋大学出版会)も是非読んでみてください。

推薦：松村一志 (社会学・人間学系)

安丸 良夫

『日本の近代化と民衆思想』

(平凡社ライブラリー 1999 年)

「勤勉」「儉約」「謙讓」「孝行」「正直」……たいてい二字熟語で表される生活上の規範を「通俗道德」といいます。こうした通俗道德が、江戸時代の終わりから明治にかけて、日本が近代化するにあたって、歴史を動かす原動力になった、と本書は論じます。

なんだかヘンな話だと思うかもしれません。近代化は、幕末の志士たちが明治政府をつくって成し遂げたと習ったはずです。そういう英雄中心の歴史観に対して、本書の著者は、「一民族の近代化を達成する最深部の原動力は、民衆の内面に醸成された歴大な建設的なエネルギーにほかならない」といいます。そして、武士や政治家でない普通の人びとのふだんの生活の中での考えや思い、すなわち「民衆思想」が歴史を動かす力に光をあてます。

幕藩体制が崩れる中で、通俗道德は、怠惰や飲酒や博打に走る人びとをおしとどめ、農村を立て直す原動力になりました。それだけではありません。資本主義の時代になって、貧富の差が拡大したとき、政府や体制を変革しようとする動きを阻止したと著者はいいます。貧困に陥るのは、通俗道德によれば、勤勉に働かなかったせいです。本当は、勤勉に働いても生活できない世の中のしくみのせいかもしれないのですが、矛先を外に向けさせず、「たしかに自分の勤勉さが足りなかったのかも」と思わせる力が通俗道德にはあります。

今回読み返して、著者が「“自己責任”の論理」という言葉を使っているのに気づきました。もちろん今日の「自己責任論」とは文脈が異なります（親本は1974年刊）。それでも、通俗道德の自己責任的ロジックが21世紀の今なお、自己啓発本をはじめあちこちに見いだせることを考えると、決して昔のことではないという読み方もできそうです。

個人的な思い出になりますが、高校の日本史の授業で本書を紹介されて、図書館で手に取り、この著者のもとで学びたいと思いました。今となっては、どれほど本書を理解していたかは大いに疑問ですが、18歳の1年間を棒に振らせるだけの魅力が本書にあったのはたしかです。その後、歴史学でなく社会学の道に進みましたが、今でも、社会や政治について考えるとき、普通の人びとの意識に関心が向くのは、たぶん本書の遠い影響なのでしょう。

歴史学の名著ですが、社会学はもちろん、人間に興味をもつ人であれば、学問分野にかかわらず響くところがあるはずです。決して平易とはいえませんが、挑むに値すると思います。

推薦：丸山 真央（社会学・人間学系）

山田 風太郎

『人間臨終図巻 1～4 〈新装版〉』

(徳間文庫 2011 年)

『私の 1 冊』を寄稿せよと言われて、研究者にしては読書量が少ないと自負している私ははたと困りました。研究上の必要に迫られて、心理学の専門書にはある程度目を通していますし、全作品を読んでいる作家(帯木蓬生)もいるのですが、この 1 冊となると…とやや逡巡した挙げ句、これまでの人生でもっとも読み返した回数の多い本を選ぶことにしました。

そこが心理学者としての原点なのかもしれない、と思いますが、私は、幼い頃から、死にまつわる様々なものに強く興味を惹かれます。墓地が大好きで、日本の大きな霊園は大抵訪れていますし、海外でも有名墓地はもちろんまったく無名の人々の墓地にもよく出かけ、いわゆる名所旧跡より長い時間を過ごすことも多いです。各地の戦跡を訪れるのも好きですし、アウシュヴィッツ＝ビルケナウなど欧州に点在する強制収容所跡にも何度も足を運んでいます。生きている人々に関わるのも好きですが、墓地や収容所つまり「死」を象徴する場所を媒介にして、過去には確かに生きていた人々に思いを馳せるのが大好きなのです。そんな私にとって実に味わい深いのが、この本です。

本書は、古今東西の著名人総勢 923 名の死に様が、没年の若い方から順に淡々と並べられている本です。死に至るまでの人生遍路もある程度書かれています。つまり、私にとってみれば、「臨終」の描写を媒介として膨大な数の人々の生について考える機会を与えてくれる本なのです。著者の山田風太郎氏(1922-2001)は、一般には奇想天外なアイデアを用いるストーリーテラーとして知られています。この図巻はノンフィクションですが、人の死に様だけを集めるといふアイデアは確かに奇想天外です。偉大な業績をなした人がそれにふさわしい威厳のある死を迎えた場合もあれば、まったくの頓死をする場合もあり、また世間の鼻つまみ者が必ず不幸な死に方をするわけでもなく、因果応報は必ずしも成り立っていません。「世の中は公正にできているはず」という素朴な信念(公正世界仮説)が揺るがされる思いがします。

私が購入したオリジナル版はずっしりと重い黒いハードカバーの函入 2 巻本で、物理的にも読み応えがあります。こちらでお読みになると文庫版とでは味わいが違うかもしれません。なお、著者没後に、本書の衣鉢を継ぐ新たな「図巻」として、関川夏央氏による『人間晩年図巻』(1990-94 年と 1995-1999 年の 2 巻)が岩波書店から刊行されており、同じく 2000 年代編は同社 Web マガジンで連載中です。

<https://tanemaki.iwanami.co.jp/categories/59>

推薦： 三浦 麻子 (行動学系)

上野 英信

『地の底の笑い話』

(岩波新書 1967年)

かつて、筑豊の炭鉱労働者の中に「スカブラ」と呼ばれる人々がいた。その名の由来は「スカッとブラブラしている」からで、トレードマークは雪のように真っ白な手ぬぐいを首に巻いていること。坑夫の手ぬぐいは炭塵と汗で真っ黒になるはずだから、スカブラの手ぬぐいは、彼らがろくに仕事もしていない証拠だ。それならスカブラは何をしているかというと遊んでばかりいた。ある大スカブラは仕事にはやってくるけど全く働こうとしない。代わりに、彼がしているのは係員の詰め所に時間を聞きに行くこと。

他の坑夫が仕事にとりかかると、「もう何時になるやろうかな。いっちょ時間を見にいったらやろう」と、すたすた詰所までのぼっていく。行ったらしばらくは帰ってこない。詰所で係員を相手にほら話を吹きまくっているからである。しばらくして現場に帰ってくると、「おい、もう八時を過ぎちよるぞ。なんぼぐずぐずしよるな。憩うて一服せん」と、今度は坑夫を相手にほら話を吹く。みんなが仕事を始めると「もう何時になりよるやろかな。いっちょ、見にいったらやろう」とふたたび詰所に。この繰り返しだ。10人足らずの組でこんな怠け者が一人でもいると、彼の分まで働いてやらないといけないのだから大迷惑だ。ところが、スカブラは不思議と嫌われていなかった。彼がいる日はどんどん仕事がかどったが、彼がいない日にはさっぱり能率が上がらなかった。だからスカブラは大変な人気者だった。

本書が描くのは過酷な炭鉱労働者の生活だ。しかし、死と隣り合わせの地の底で、彼らが交わっていたのは笑い話だったのだという。最も過酷な生の中に笑い話があったことを私たちはどのように受けとめることができるだろう。これからの日本社会は、これまでと全く逆の時代を迎える。人口減少は進み、経済も停滞、縮小していく。社会が右肩下がりになるだけでなく、気候変動の影響で毎年のように災害が起きたり、制御することが困難な感染症が何度もおそってくるだろう。はっきり言って、大変むずかしい時代を私たちは生きていくことになる。

このような時代を迎えるからこそ、私は人間にとって通常「生きるために必要」と考えられているものから「はみ出る」部分が大切になると思う。それが苦しい現実にあっても人間の尊厳を失わせない「よすが」になると思う。それは、笑い話かもしれないし、芸術かもしれないし、授業の間の休憩時間や、目的地の手前の駅で降りて歩いてみるようなことかもしれない。この「はみ出る」部分を豊かにもつような感覚を養うことが右肩下がりの社会を生きる術ではないか、本書はそんなヒントを地の底から私たちに届けてくれる。古い本ですが、挿絵も素晴らしいですし、図書館の「底」から掘り出すことをおすすめします。

推薦： 宮本 匠（共生学系）

ピエール＝ジル・ドジェンヌ

『科学は冒険！—科学者の成功と失敗、喜びと苦しみ』

(講談社 1999年)

著者であるド・ジェンヌ氏は、その画期的な業績ゆえに「現代フランスのニュートン」と呼ばれた。同氏は、高分子や液晶における分子運動、転移現象の類似性を発見し、それまでの物理学ではなし得なかった複雑な現象理解への道を開かれ、1991年にノーベル物理学賞を受賞している。またパリ私立物理化学高等学院（マリー・キュリー氏他、多数の同賞受賞者を輩出）において、長きにわたり院長も務められた。

本書には、発明・発見は一夜にしてならず、時には失敗を繰り返しながらも独創性を重視し、やがて本質を見極めるべく一筋のひらめきに達する研究者の眼差しが鮮明に描かれている。また若い研究者が極端に基礎研究あるいは応用研究に偏るのを防ぐというように、同氏の教育者としての魅力も堪能できる。

私は、食品物性学から研究者の道を歩み始め、現在は環境問題を研究している。本書にはないが、私自身も若かりし頃にド・ジェンヌ氏から受け継いだ言葉があり、ここでご紹介したい。

- 1) Keep the spirit of Benjamin Franklin. 2) Observe nature.
- 3) Work with your hands. 4) Do simple experiments.

「ベンジャミン・フランクリンの素朴な精神、つまり気の利いた発想とお金のかからない方法で正確な実験結果を得ることが重要である。そのために広大な自然に目を投じること。莫大な費用、大組織・巨大装置を求める研究を避け、身近なアイデアと工夫を凝らしながら事柄の『本質』を目指す研究を行うこと。シンプルな実験により自らの手を動かす、現象の背後に潜む本質を見抜くことが大切である。」

ド・ジェンヌ氏は、大学では量子力学を専攻し、初めての職は原子力研究所であり、その後は、固体物理学である磁性体・超伝導体研究へと移った。さらにはこれまでとは全く異質の「やわらかい物質」である液晶にも手を染めるようになり、高分子の絡み合いとゲル化、表面の濡れの現象、接着のメカニズム、界面科学、コロイド・高分子の物理学へと次々に領域を広げていった。このダイナミックな研究活動ゆえに、同氏は「チョウチョウのように飛び回っている研究者」と言われたこともあるようである。しかし、これほどまで広範囲な分野を扱えたのは、現象の本質を確実に見抜きつつ領域を超えて類推を広げてゆく柔軟な思考力に加え、温厚で飾らない人柄ゆえに優秀な研究者を結集するプロジェクトを創造できたからといえる。

さらに、同氏はノーベル賞受賞後にフランスから海外圏まで、高校生を対象とした講演の旅を行っており、本書にはその講演内容も収録されている。

この人間味溢れる偉人が、先端研究者として、他方で実践教育者として我々研究者に教示する提言は、私自身の心の支えでもあり、是非一読頂きたい一冊としてお勧めする。

推薦： 三好 恵真子（行動学系）

メアリー・C・ブリントン

『縛られる日本人

—人口減少をもたらす「規範」を打ち破れるか—』

(中央公論新社 2022 年)

2025 年に生まれた子どもの数はおよそ 70 万人と 10 年連続で最少を更新しました。人口減少は日本社会が直面している大きな課題の一つであり、人口構造や世帯構成の変化、女性の働き方、地域の課題、社会保障の持続可能性については高校の教科書でも取り上げられていますし、私も研究を重ねてきました。超高齢社会にどう向き合うかは喫緊の課題ですが早急に解決策を考える前に、まずは実態とそのメカニズムを理解する必要があります。

人口減少の直接的な原因は結婚と出産の減少ですが、その背後にある要因としてブリントンは子どもを持つことのメリット・デメリット、そしてなによりも家族規範に注目します。つまり、日本社会では男女それぞれに期待される社会的役割に対する固定観念や周囲の行動に対する思い込み（多元的無知）が強く人生の選択肢が少ないことが結婚や出産の減少をもたらしており、社会の仕組みを変えるべきだというのが本書のメッセージです。

主張の根拠として用いているのは国際比較が可能な統計データとインタビューデータです。このようなブリントンの研究スタイルは一貫していますが、これまで女性（『Women and the Economic Miracle: Gender and Work in Postwar Japan』1993 年刊行・未邦訳）や若者（『失われた場を探して——ロストジェネレーションの社会学』2008 年刊行）を分析してきたブリントンが本書では男性に注目します。とくに男性の育児休業の取得を困難にする日本の職場慣行——たとえば単身赴任、人事制度、マネジメントの失敗、顧客絶対主義——が問題だと分析します。

このような職場慣行は少しずつ変わってきているようですし、男性の育児休業取得率は 2024 年度に 40% を越えました。だからといって本書で提起された問題は解決済みと考えるのは時期尚早でしょう。さて、ブリントンはどの国々と日本を比較しているのでしょうか、そしてそれはなぜでしょうか。あなた自身は日本とどの国と比較してみたいですか。本書の最終章で述べられている 4 つの政策提言についてはどう評価しますか。ぜひ本書を手にとってみてください。

推薦：村上 あかね（社会学・人間学系）

上間 陽子

『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』

(太田出版 2017年)

上間陽子の『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』(太田出版、2017)は、沖縄の性風俗で働く若い女性たちに寄り添った記録である。貧困そして親やパートナーからの「病院送りされるレベルでの」(p.78)暴力が遍在する社会において、かなりの数の10代の女性たちが性風俗を足場にして生き延びていく。レイプそして、出産や人工妊娠中絶、ある人は子どもを捨てる経験をし、ある人はシングルマザーとして水商売で自立していく道を選び、風俗から足を洗って看護師になる女性も登場する。誰かがつながってくれていたときに女性たちは生き延びることができる。著者の上間陽子はこれらの女性が生き残ろうと努力する姿をさまざまな矛盾とともにしかし寄り添いつつ描いていく。

キャバクラの同僚である友人美羽に、DVのSOSを翼が求める場面を引いてみる。

美羽に「ごめん、(悠を)保育園送ってほしい」って(電話をかけたら)、「なんでか?」って。……美羽は気づいてるから。「おまえ、くるされた(=ひどくなくられること)のか?」って。[……]まず、顔、見に来て、見たときに「はっ?」みたいな。「ひどくないか、ちょっとやり過ぎじゃないか?」って。[……]翼の受けた傷は全治一か月の重傷で、マスクをしても顔の傷を隠すことができないものだった。美羽はそれから毎日、外に出られなくなった翼の代わりに、朝になると悠を保育園まで連れて行き、夕方になると夕食の買い物をして保育園に悠を無明けに行き、翼と一緒にご飯を食べる生活を一か月続ける。(p.83)

ときには上間自身が少女の出産に立ち会うために夜中の高速を飛ばして分娩台に駆け付ける。何世代も続く貧困と暴力の反復が描かれるにもかかわらず、本書が陰鬱な印象を残さない理由は、誰かが手を差し伸べること、そして著者が逃げずに少女たちと向き合い続けること、そして少女たちに驚くべき生命力があることであろう。

私自身、大阪の西成地区でフィールドワークを始めるまで、このような境涯の人々のことを知らなかった。貧困、暴力、差別、病や障がいは見えにくいかもしれないが、実は身近なところに偏在している。これらは目を背けてはいけない現実であるとともに、ここから出発することで新たな社会関係を描くことができる、おそらく唯一の出発点を示していると思われる。

(本稿はホンシェルジュに執筆した原稿に訂正を加えたものである。)

https://honcierge.jp/articles/shelf_story/1961

推薦：村上 靖彦 (社会学・人間学系)

グレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson) 佐藤良明 訳

『精神の生態学』改訂第2版 (Steps to an Ecology of Mind)

(新思泉社 2000年) (New York: Ballantine Books, 1972)

イギリスの人類学者グレゴリー・ベイトソン (1904-1980) は、学問の境界を越えて思索を深めた万能学者であり、人間科学において今なお模範とされる存在である。大学で人類学を学び、1930年代にはパプアニューギニアで民族誌調査を実施。その後、精神医学、サイバネティクス、動物のコミュニケーションへと関心を深め、探究の幅を広げる中で彼の問いも膨らんでいった。「心とは何か? どのように生じるのか? システムの一体性を維持するものは何か?」—こうした思索の軌跡が刻まれたのが、生物学、心理学、動物研究にまたがる《パターン》を問いつける論集『精神の生態学』である。

本書の目次を眺めると、「コミュニケーション」が重要なテーマであることが浮かび上がる。ベイトソンは、それを単なる言葉の交換ではなく、あらゆる関係を形づくるプロセスとして捉えた。言葉に限らず、身振りや行動、わずかな変化にも意味が生まれる。彼にとって、情報も単なるデータではなく、関係や文脈の中で「違いを生む違い」として働き、学習や適応を生み出す。

「ダブルバインド、1969」の章では次のように述べている。「すべての生きたシステムに共通の特性として《適応》の能力がある。これらのシステムにあっても、適応が起こるためにはフィードバック回路の存在が前提となる」(p. 376)。したがって、学習とは、変化に応じて調整し、適応し、再構成することで、個体と環境を結びつけるプロセスである。

ベイトソンを踏まえて考える共生もまた、単なる共存ではなく、継続的な関係の調整と変容の積み重ねとして捉えられる。この視点は1970年代の環境運動にも影響を与え、生きたシステムの相互依存を考えるための手がかりとなった。本書は「心とは何か? 人間と自然はいかに結びついているのか?」という根源的な問いを投げかけ、認知やシステム、生命の複雑な関係性についての思索を刺激し続ける。学際的な視点を探求する人間科学の学生や研究者にとって、示唆に富む一冊である。

推薦: モハーチ ゲルゲイ (共生学系)

Hugh Raffles

『Insectopedia』

(Pantheon 2010 年)

本書は、「虫」についての「人類学」的な著作です。筆者の Hugh Raffles は、ニューヨークのニュースクール大学 (the New School) の人類学者で、数年前に阪大を訪れられたこともある方です。もともとは、アマゾンでフィールドワークを行い、アマゾン川流域の入植者たちの記憶、歴史、景観の密接な関係について、*In Amazonia* という本を書かれています。

本書、*Insectopedia* で、Hugh Raffles は、我々の身近で、我々に気づかれぬまま暮らしている虫たちの世界に注目します。虫は、人間とは全く異なる知覚、身体、能力を持ち、それゆえ彼らにとっての世界の見え方／あり方は、我々人間にとってのものとは大きく異なっています。

百科事典の体裁をとって、「A」から「Z」までの短い章に分かれた本書では、虫と人間の関わりと、虫の驚くべき世界についてのエピソードが次々と紹介されます。最初の章「Air」では、航空機によって高高度の空中で虫を収集した 1926 年の科学調査のエピソードが紹介されます。ジェット気流が支配する高高度の大気の中には、意外なことに多数の虫が生息しています。これらの虫は、おそらく、上昇気流によってこの高度まで上昇し、しばしば信じられないような距離を移動していると考えられます。

虫についての常識を裏切るこのような驚きのエピソードを皮切りに、著者は、虫と人の関わりをめぐる多様な物語を紡いでいきます。Chernobyl と題された章では、奇形の虫を収集し描き続けるチューリッヒ在住のイラストレーターが取り上げられます。奇形の虫は、チェルノブイリ原発事故の直後からヨーロッパ各地で多数発見され、大きな論争を引き起こしてきました。科学者たちは、正式に奇形と事故との間の因果関係を否定しましたが、一部の市民活動家たちは、奇形の虫を収集し続け、自然の変異とは異なる事故由来と考えられる変異のパターンがあると主張しています。チューリッヒのイラストレーターの数奇な人生をたどりながら、著者は環境汚染についての知識の不確実性と事故をめぐる政治が、一人の人生に与える複雑な影響を描き出します。

この他にも著者は、熱狂的な自然観察者でありながら反進化論者だったファーブルと進化論の間の奇妙な関係や、カブトムシをめぐる日本人の熱狂の歴史など、いずれも興味深いストーリーを追いつけます。それらから見えてくるのは、虫たちの奇妙な世界が、我々人間たちの目の前にあらわになっていく際に生じる社会的・文化的なドラマです。虫たちの世界は確かに奇妙ですが、その奇妙な世界の「発見」をめぐるドラマは、それに劣らず奇妙なものであるのです。

Hugh Raffles が本書で描き出すのは、根源的な他者である虫の世界と我々の世界は、互いに相容れないながらも極めて複雑に絡み合っているということです。*Insectopedia* は、虫を通した、人類学＝人間の科学のあり方を、その美しい英文とともに我々の前に描き出

していきます。

著者は、多数の賞を受賞した大変な名文家ですので、ぜひその美しい英文共々この世界を味わってください。

推薦： 森田 敦郎（社会学・人間学系）

リチャード・E・ニスベット 村本由紀子 訳

『木を見る西洋人 森を見る東洋人：

思考の違いはいかにして生まれるか』

(ダイヤモンド社 2004年)

著者であるリチャード・E・ニスベットは、西洋人（主にヨーロッパ、アメリカ、旧英連邦）と東アジア人（主に中国、韓国、日本）は、異なる世界観を持っていると考え、そのような人間の思考の違いはどのようにして生まれ、その違いが私たちの生活にどのように影響しているのかを本書で説明している。本書の冒頭でニスベットは、西洋と東洋の思考パターンの起源とされるアリストテレスや孔子の教え、また各国の歴史的・地理的条件が人々の思考パターンに与えたであろう影響についての紹介をし、現代社会における生活様式がそれらの思考パターンの相違をさらに強化している可能性を述べている。そして仮説を実証するために行った、西洋と東アジアの大学生を対象とした国際比較実験調査を紹介し、文化差と知覚・記憶・思考パターンについての見識を述べている。また本書の最後にニスベットは、西洋人と東洋人が（もしくは異なるグループに属する人々が）お互いの「違い」の根本を理解することが、グローバル化する世界で円滑なコミュニケーションを図るために必要なのではと提案している。

私は大阪大学に赴任するまで、アメリカの大学で子育てや家族関係の日米国際比較研究を行っていた。アメリカ生活では、様々な側面で自分が日本人であることを考えなければならない場面に直面した。価値観や道徳観に限らず、物事の見方や視点が、アメリカ人の同僚と確実に違うことを感じずにはいられなかった。もちろん日本人にも様々な考え方をしている人がいるが、アメリカ人の同僚に感じた思いは、それとは違うものだった。そして、「違う」ということを「違う」として受け入れることが難しいということも学んだ。私たちは「違う」を感じた後に「優越」を付けてしまう傾向にある。比較研究をする際に、この「優越」のラベル付けは危険なアプローチに違いないと感じている時に巡りあった1冊が本書であった。この本から学んだ「違い」に「優越」を付けないようにする思考は、研究だけでなく、人間科学研究科国際交流室の副室長として留学生や留学を希望する学生のサポートを行うにあたり大変重要な要素だと信じている。

推薦： 安元 佐織（国際交流室）

小林 朋道

『ヒトの脳にはクセがある—動物行動学的人間論』

(新潮社 2015年)

生活の中で、自分自身を動物として認識することはあるだろうか。また、自分の認知や認識を通じて、ヒトの脳には特有の動作原理（本書でいうところの『クセ』）があると実感した経験はあるだろうか。現代では、ICT技術や再生医療などの高度な科学テクノロジーが発展し、人間という存在そのものの在り方が以前とは異なりつつあるが、そもそも、自分自身、つまり、人間（そして、その脳の『クセ』）への理解は、現在においても、どの程度進んだのであろうか。本書は、動物行動学の視座から、ヒト・人の脳のさまざまな『クセ』を論考し、ヒトの脳の限界に触れながら、「ヒト・人を知る」という人間科学における大きな課題にもヒントを与えてくれるユニークな著作である。

その一節に著者の学生時代での登山での経験が述べられている。高い嶺から眼下に見下ろす大きな雲海に感極まり、落涙を抑えられなかったそうである。「なぜ、絶景に出会うと涙が出ることもあるのだろうか。」翻って、そもそも、「なぜ、絶景をみてみたい」と思うのだろうか。富士山山頂での初日の出を拝むために多く人は雪深い山頂を目指す。ウユニ塩湖は世界の人々を引き付ける。雄クジャクの羽を人は見事な美としてみることができる。一方、雌クジャクは、それを美として捉えているのだろうか。 $E = mc^2$ から自然界の美を感じる知性も、火に魅了される心も、ヒトの脳の『クセ』なのか。一方、進化の隣人である野生のニホンザルたちは、晴れ渡った秋空の夕日に目を奪われ、しみじみと感ずることがあるのだろうか。人と動物との違いは何か。ヒト・人の心や脳の働き・『クセ』には、まだまだ謎が多い。本書で論考されたさまざまな事例はその一部である。皆さんも探してみたいかでしょうか。ここでは、認知バイアスという言葉も挙げておこう。

本書のカバー裏面には「いくら科学が進歩しても、脳には限界がある…」と書かれている。時間の始まりや宇宙の果ては極めて理解し難い。スケールは小さいものの、自分自身や他者を十全に理解できているとも言い難い。そこにも自分の脳の限界を感じる。ただし、本書で考察された脳の謎・限界、そして『クセ』に類似する点は幾つも気にはなっていた。そのため、正直なところを言えば、推薦者が本書を書きたかった。先を越されたジェラシーを感じることも、ヒト（もしくは推薦者だけ）の脳の『クセ』の一つなのかもしれない。そんな『クセ』（や限界）に大きく翻弄されてしまうのか、それとも、楽しみながら上手く付き合い、成長のための伴走者としていくのか。大学での学びや生活の中で後者へのヒントや術（すべ）を学ぶためには、自分、そして自分の脳の『クセ』を見つめ直すことは一助となるかもしれない。

推薦：八十島 安伸（行動学系）

竹内 薫（著） 嵯峨野 功一（構成）

『理系バカと文系バカ』

（PHP 新書 2009 年）

「あなたは文系／理系ですか？」「文理選択、どうしよう…。」どこかのタイミングでこういったことが話題になったのではないのでしょうか。また、「私は文系／理系だから」と自身を形作る一部になっていたり、文系と理系どちらが得意かで発想や考え方などその人の在り様に影響しているかもしれません（今後そうなってきたり）。皆さんはどうでしょうか？

私自身は社会科が特に好きで得意だったのもあり文系を選択しましたが、理系科目も好きな方でした（出来不出来はさておき。ちなみに一番苦手だったのは現代文。文系なのに）。一方で、好きに自由に学んでいた中学生の頃までに比べ、高校時代では点数を取ってなんぼ！といった成績や大学受験のしがらみも増え、文理問わず幅広く学び、各科目を楽しむよりも効率性や優先度が重視されるようになりました。制度や時間的な制限上致し方ないところもあるので、そういうシステムを受け入れて受験勉強に奔走していましたが、どこか引っ掛かりも感じていました。そして、大学入学後はそういったしがらみから解放され、いろんな教養科目に触れては楽しんだものでした（理解、習得できているかは別として）。

どういう縁か私が専門にするようになったのは理系的視点（サイエンス／自然科学）と文系的視点（アート／人文科学）の両輪が重要となる心理学（人間科学）でした。神経科学、研究法や統計法などでは理系の力が、人々の歴史や生きる社会、文化、主観的世界などに関しては文系の力が特に求められます。文系／理系の二分法的な枠を越えて文理を堪能できる文理融合の学問とも言えます（それゆえの大変さもあります…）。

というわけで、そんな人間科学を今後学んでいく皆さん、大学受験などさまざまなしがらみから解き放たれた「今」、改めて文系・理系について考えてみませんか？本書は文理融合を考えるきっかけや今後の人間科学の学びの一助になるでしょう。文理両方の素養を身につけながら、あらゆる視点で物事に触れられると、より楽しくなりそうじゃないですか？

本書を読む際は、精読よりも自身の文理観の振り返りに専念してみてください。文系・理系に関してどう考えているか、本書に対し納得するのか、批評したくなるかなど内省し、議論の素材にしてみましょう。そして、時間がある大学生のうちに覗き見する程度でも良いので文理問わず色んな世界に目を向けてみましょう。これまで好き／嫌いだった科目も改めて触れてみると新しい発見があるかもしれません。しっかり理解できなくても、性に合わなかったりしても、少しでもそういった世界に触れることに価値があるかもしれません。

推薦：藪田 拓哉（公認心理師プログラム運営室）

長谷川 寿一、長谷川 眞理子

『進化と人間行動』

(東京大学出版会 2000年)

タブラ・ラサ(空白の石版)という言葉があります。生まれたばかりの人間は真っ新なノートのようなもので、各人が経験した出来事がそれぞれ書き加えられていくことで、一人一人個性を持った人間の心が形成されるという例えです。推薦本が扱うのは、これとは少し異なる視点です。それは「人間も生物の一種であって、人々の心には共通する特徴がある」というものです。生物である以上、人間も他の生物と同様に、進化の産物です。人間の骨や臓器のようなかたちのある物と同様に、人間の心や行動や社会といったかたちのない物も、進化という長い時間の過程で形作られてきました。生物に共通する進化と適応の原理を考慮することで、人間の理解を深めようとするのが、本書のねらいです。

進化は、多くの場合、誤解されています。私が講義をしてきた経験を振り返っても、その誤解は根深いように感じます。本書では、進化の仕組みをわかりやすく説明したあとに、進化論を構成する要素として一般的に考えられている「適者生存」「本能」「種の保存」「遺伝子決定論」という概念が時代遅れの誤りであることを指摘します。そして、多くの先行研究に基づいて、人間を含む動物の行動と社会が、進化の仕組みの中で作られてきたことを鮮やかに示します。例えば、血縁関係に基づいた家族の絆を大切にすること、血縁関係にない個体同士が協力するにはある条件が必要になること、オスとメスで体の大きさや行動パターンに違いが生じることなどは、人間だけでなく人間以外の霊長類にも共通して見られる特徴です。

人間は進化の産物です。私たちの石版は完全な空白ではなく、生まれてきたときには既に進化の経緯が刻み込まれているようです。これは科学的事実です。しかし一方で、私たち人間の生活がこれらの事実にも必ずしも縛られる必要はありません。血のつながらない家族との絆を大切にすることや、生物学的な性にとらわれない自由な生き方は、私たち人間の生活をより豊かに、より幸せにしていけるでしょう。そのような<望ましい社会>を築いていくためには、私たち人間が備えている特徴やクセを十分に理解した上で、適切な制度やシステムを構築していくことが必要になるでしょう。

私は野生霊長類の行動と社会を研究しています。人間を含む霊長類の特徴を描き出すことによって、人間の本性(Human nature)を知りたいと思っています。興味のある方、一緒にサルを観察をしてみませんか？

推薦：山田 一憲(附属比較行動実験施設)

釘原 直樹 編集

『スケープゴートینگ』

—誰が、なぜ「やり玉」に挙げられるのか』

(有斐閣 2014年)

スケープゴート (scapegoat) という言葉がある。大辞泉によれば、古代ユダヤで年に一度人々の罪を一身に負って荒野に放たれたヤギが原義となっており、そこから転じて「身代わり」や「いけにえ」といった意味で用いられている。

テレビニュースで事故や事件が報道されるたびに、私たちが考えがちなのが、「その責任は一体どこの誰にあるのか？」という問題である。むろん、原因がはっきりしていればよい。しかし、中には、不文律の習慣や風土のせいであったり、被害者にも落ち度があったり、複雑な因果関係が絡んでいたりと、特定の誰かが全面的に悪いというわけでもないケースもある。

本書の目的は、このように責任主体が不明確な状況下において、誰かをやり玉にあげるという“理不尽な”社会的現象が起こりうるということを啓蒙しつつ、その心理を理論的に説明することにある。本書で紹介されている事例の中には JR 福知山線の脱線事故や感染症に関する報道など記憶に新しいものがある。その分析を読み進めていくうちに、「誰かをやり玉にしてこのストレスや不条理さを解消したい」という恐ろしい力学が社会に広く蔓延していることを読者はきっと実感することだろう。なお、紹介者自身も、企業の不法投棄を題材に研究を行ったことがある (綿村他、2013)。その事件でも特に誰が悪いわけではなかったのだが、実験参加者の多くは、社長や管理職だけでなく行政にまで賠償責任や倫理的責任を追究しようとした。責任がゼロとは言い切れないものの、なぜ血眼になって非難の矛先を探そうとするのか、非常に興味深く、また恐ろしくも感じた覚えがある。

事故や事件があったとき、「仕方がなかった。誰にも責任はない。」と片付けてしまうことは、被害を受けた当事者はもちろん、社会にとっても気持ち的には受け入れにくいことであろう。しかし、だからといって安易にその矛先をスケープゴートに向けてしまってよいのであろうか？情報化や科学技術が進み、ヒトと社会との関わり方が超複雑化した現代社会にあって、私たちはスケープゴートという単純なセオリーによって翻弄されている。この実態を本書から学んでもらえれば幸いである。

推薦： 綿村 英一郎 (行動学系)

「自著を語る」
—人間科学研究科教員が著した本—

渥美 公秀（共生学系）

『災害ボランティア－新しい社会へのグループ・ダイナミックス』

（弘文堂 2014年）

本書は、1995年に西宮市で阪神・淡路大震災に遭遇して以来、災害ボランティア活動の現場で考え続けてきたことをまとめたものです。執筆のきっかけは、2011年の東日本大震災でした。災害ボランティアは、阪神・淡路大震災以降、日本社会に定着してきたはずなのですが、東日本大震災では、災害ボランティアの初動が遅れました。災害ボランティア活動に参加しようとする声を遮るように醸し出された自粛ムードが原因でした。東北の被災地では、多くの人々が苦しみ、深い悲しみの中で救援を求めているにもかかわらず・・・

阪神・淡路大震災の時、災害ボランティアは、既存の社会の仕組みを打ち破り、改善していく希望を見せてくれました。しかし、今は、災害ボランティアがどんどん既存の社会に取り込まれているように思います。

何かがおかしい。なぜ、こんなことが起こってしまったのでしょうか？その原因を突きとめ、災害ボランティアを巡る諸問題を解消し、災害ボランティアが、被災者の傍にいて、被災者に寄り添う姿を取り戻したい。そして、その先に、災害ボランティアが拓く新しい社会を構想し、そこに向かって確かな一歩を進めたい。本書には、そんな切実な想いが込められています。

第1章では、東日本大震災に際し、私自身がどのように実践と研究を進めてきたかということを、赤裸々に綴りました。第2章では、災害ボランティア研究の理論的な枠組みを紹介し、第3章で、阪神・淡路大震災以来の災害ボランティアの動向について改めて整理しました。第4章から第6章は、災害救援、復興支援、地域防災といった場面を対象に、災害ボランティアを巡る話題を考察し、最終章では、災害ボランティアが拓く新しい社会について、構想し、そこへと至る道筋を提示しています。

本書は、災害ボランティア活動について考えたいと思っている人、災害ボランティア活動に行くかどうか考えている人、災害ボランティア活動に参加した経験を振り返っている人に読んで頂ければと思います。また同時に、災害ボランティア活動には参加したくない人、災害ボランティア活動に疑念を持っている人などにも、是非、手にとってもらえればと願っています。

谷本奈穂・飯塚理恵（社会学・人間学系） 編著

『きれいはいまもゆれている

—外見・身体・アイデンティティの交差点—

（晃洋書房 2025年9月刊）

近年、外見を職業としない市井の人々も、動画を通じて高度な化粧技術を身につけたり、美容整形をより身近な選択肢として捉えたりするようになった。誰もが美しくなることを目指し身体を加工する時代であるにもかかわらず、美容実践を主題とした学術研究は、フェミニズムという例外を除けば、歴史的にも現代においても驚くほど少ない。本書は、現状を踏まえ、現代の美容のあり方を初学者にも理解しやすく提示し、その重要性を示すことを目的として分野横断的に若手研究者を中心に執筆された。

従来、フェミニズムで考察されてきた美容研究は、美容実践を女性への抑圧と女性の主体性の発揮という、相反する二つのレンズを通して描くことが多かった。本書ではこうしたジレンマを踏まえつつ、美容を、他者とのコミュニケーション、市場原理、社会規範、そして個人の属性や状況に影響を受ける社会的行為として理解し、実際に美容職従事者の葛藤を分析する。

2022年頃から、日本国内で「ルッキズム」という語の認知度が急速に高まった。しかし、その学術的評価や概念分析はいまだ十分とはいえない。本書では、日本独自に展開しつつあるルッキズム概念を整理・分析している。批判的文脈で多用されるこの概念を丁寧に検討することは、今後より建設的な議論を可能にするためにも重要である。

さまざまな身体加工が可能となる背景には、新規科学技術の発展がある。しかし、科学の進展は美容実践の抑圧的側面を強める可能性もあれば、弱める可能性もあり、個別具体的な考察が必要である。本書では、抑圧が強まる懸念をアンチエイジング実践の観点から、抑圧を弱める可能性をVR空間におけるアバターを用いたコミュニケーションの観点からそれぞれ論じる。

美容の実践主体として女性を想起する人も多いかもしれない。しかし本書では、脱毛、化粧、整形など男性の美容を中心に扱う論考が多く収められている。これは近年の大きな変化を反映するものである。男性美容には女性美容とは異なる社会力学が働いており、男らしさの理想を踏襲しつつも変容させながら、美容実践が男性の人生に浸透している様子が示される。

本書を通じて、美容研究の難しさと重要性、そしてその面白さを感じて欲しい。そして、本書で用いられている方法論にとどまらず、美容を研究したいと志す仲間が広がることを願っている。

伊東 さなえ（共生学系）

『ネパール大震災の民族誌

―共同性と市民性が交わる場で災害に対応する―』

（ナカニシヤ出版 2024 年）

世界各地で毎年のように大きな災害が発生しています。地震や洪水などの自然現象によって引き起こされる災害ですが、その被害の現れ方や対応の仕方は、地域によって大きく異なります。本書は、2015年のネパール大震災を事例に、調査村の人々が震災にどのように対応したのかを記録した民族誌です。特に、村の「共同性」に基づく助け合い、国際 NGO や国外に移住した人々などの「市民性」、そしてそれらが交わる場としての「ローカリティ（地域）」を中心に分析しています。

災害下では、伝統的で閉鎖的な「村」の持つ強い結束力が災害対応力につながると思えば言われてきました。それに対し、本書では、調査地では震災前から「村」という共同性が曖昧なものになっていたが、その曖昧さがむしろ外部の市民社会との連携を可能にしていたことを示しています。

大地震の発生後、被災した人々も、被災地出身者も、NGO 等の支援者も、それぞれの立場から「村」や「国」といった場を想像し、そこで活動しました。調査地では、近代化により共同性の境界が曖昧になっていたことで、これらが地理的な枠を超えてつながりありました。一方、前年に亡くなった人々をあの世へ送り届ける祭りが震災後の困難な状況のなかで開催されたことで、生者も死者も村の秩序のなかに戻るができるなど、村の共同性の想像／創造も村の再生にあたって重要な要素となっていました。

人やモノ、情報が世界中を高速で行き交う現代においても、私たちは土地や村、国への帰属意識を持ち続けています。こうした感情や、祭りや儀礼、日々の営みが、「村」や「国」といったローカリティ（地域）を形作っています。震災は、こうしたローカリティ（地域）の在り方を問い直す契機になりえます。こうして想像／創造されたローカリティ（地域）は、状況に応じて広がりを持ちました。そして、さまざまな人々や組織とつながることで復興へとつながっていました。

日本は災害大国であり、災害研究も盛んに行われていますが、海外の災害を詳細に分析した民族誌の日本語での刊行はまだ多くありません。しかし、グローバルな環境変動に伴い災害は増加し、日本の多文化社会化も進むなかで、異文化の視点を取り入れた災害研究の重要性が高まっています。本書を通じて、ネパールの事例から文化や地域性が生み出す災害対応の多様性について考えるきっかけになれば幸いです。

稲場圭信（共生学系）・岸政彦・丹野清人 編

『岩波講座 社会学 第3巻 宗教・エスニシティ』

（岩波書店 2023年）

この「岩波講座 社会学」シリーズは、1995年に刊行された「岩波講座 現代社会学」シリーズから30年近く経って刊行された。岩波書店の公式見解は、「このたびの新しい講座では、幅の広さを確保しながらも直球勝負を意識し、執筆陣も、主に専門の社会学者の方に集まっていただきました」、「社会科学の進展に裏打ちされた理論枠組、新たなテーマや対象、洗練されてきた方法論を示し、数理・統計的な最新の研究も盛り込んでいます。」となっている。第3巻は、その如くに多数の秀逸な研究を収めたと編者の一人として自負している。

多様化する社会の様相は、宗教・エスニシティにおける状況や認識を大きく変化させてきた。本書では、日本における両者の現時点の基軸となる議論を踏まえ、長期的な観点で今後起こりうる大きな社会状況の変化の後にも参照され続ける枠組みを描くことに力点をおいている。第1部が宗教と社会、第2部が日本社会とエスニシティを扱っている。私は主に第1部、すなわち、「宗教とウェルビーイング」、「公共空間における宗教—フランスの事例を通して」、「日本人の宗教性を測る」、「地域福祉と宗教」、「存続か消滅か—人口減少社会における宗教の戦略」の編集を担当した。そして、編著者の私は「社会の中の宗教 新たな役割に注目して」（pp.235-255）を執筆した。

宗教者は地域や社会において重要な役割を担ってきた。高齢者や孤独な人々の相談に乗ったり、災害時には被災者の支援を行ったり、社会福祉やボランティア活動などに取り組んでいる。また、神社や寺院が祭礼や行事などを通じて地域の人々がつながりを持つ場として機能している。社会を見渡せば、宗教と社会は密接に関係していることがわかる。そして、宗教者による社会貢献活動は、活動の実質的な担い手としての機能に加えて、思いやりの精神を育てる公共的な場を提供する機能をも併せ持っている。社会的な力となって存在している。

研究者は如何にこのような現代社会における重要なテーマに向き合えばよいのであろうか。言うまでもなく、すべての研究は対象選定の段階から、何らかの価値判断が含まれている。ポジショニングを自覚しながら、その責任を引き受けていく覚悟が問われるのは、どの研究でも同じである。研究者が、客観性、中立性という言葉の陰に、研究対象を搾取していないか。社会学者の社会貢献も問われている。その点も本書から学べよう。

監修 日本湿地学会

編集代表 高田 雅之・朝岡 幸彦

編集 石山 雄貴、太田 貴大（共生学系）、佐々木 美貴、田開 寛太郎

『水辺を活かす一人のための湿地の活用—

（シリーズ水辺に暮らす SDGs 第2巻）』

（朝倉書店 2023年）

本書の表記である「水辺」は、「湿地」とほぼ同義として用いられている。湿地に該当する場所は非常に幅広い。一般的にイメージされがちな湖沼や湿原だけでなく、沿岸域にある干潟やサンゴ礁、氾濫原を含む河川、農業と密接に関係している水田やため池といったものも湿地に含まれる。

しかし、残念ながら、身近にある淡水の湿地には、ぐちゃぐちゃで人間が入れない場所とか、不快な昆虫をうみだす場所といった負のイメージが付与されており、人間との良好な関係が築かれていないことが多い。また、身近な湿地の多くは、土地が平らで埋め立てにより活用しやすいため、経済発展に伴い失われてきた。

本書を含む「シリーズ水辺に暮らす SDGs」全3巻では、このような正負ともに多様な側面を持つ湿地という対象を学際的な視点から扱っており、SDGsの根底にある自然環境と人間との持続的な関係性の構築に資することを目指している。専門家だけでなく、多くの人に湿地について知ってもらい、湿地の保安全管理や持続的な利用に結び付くよう、本書の構成自体も、基礎となる解説に加えて実践的な方法や事例を豊富に取り上げている。

編集者は、日本湿地学会の若手研究者を中心としており、国内での湿地研究に関する最先端の知見が集積されている。湿地の保全と持続的な利用を目指すラムサール条約からの要請や、日本国内の湿地の保安全管理に関する自然科学、社会・人文科学の歴史を踏まえて、編集されている。

特に本書のシリーズ第2巻は、湿地と人間の様々な関係性に注目し、経済、文化、健康福祉、普及啓発や教育の視点で構成されている。経済の視点では、第2章で、観光やまちづくりといった地域経済の振興に湿地を巧く活かす方策について述べられている。これらに関する国内最先端の豊富な事例が、実践者の筆により紹介されているのも読みどころである。また、第3章では、CSRやCSVといった大手民間企業の環境配慮行動の今後の方向性について分析がなされている。気候変動対策や生物多様性保全といった環境配慮が民間企業にも強く求められるようになっており、現状の多様な活動を整理・理解するうえでの助けになるものといえる。第5章の教育の視点では、CEPAを切り口に、国内の教育実践やボトムアップの活動事例が豊富に紹介されている。特に、ラムサール条約に関連する活動のネットワーク化は多くの人々をつなぐ極めて有効な方法として描かれている。

湿地というなじみの薄い生態系を多様な面から知り、自然環境の保全や持続的な利用を考えるうえで、有用な書籍であるので、ぜひ一読してほしい。

大谷 順子（共生学系）編

『四川大地震から学ぶ 一復興のなかのコミュニティと 「中国式レジリエンス」の構築一』

（九州大学誌出版会 2021 年）

国の威信をかけた北京オリンピック開催の直前、中国の様々な社会問題などが世界中の注目を集めていた 2008 年 5 月 12 日に四川大地震は発生した。地震をきっかけに中国社会でもボランティア元年、NGO 元年と呼ばれる市民の動きが沸き上がり、中国政府は微妙な駆け引きを行いながら復興のかじを取ることを余儀なくされた。

本書は、四川大地震発生から 13 年経過した今、復興政策、被災者のこころのケア、被災地観光、少数民族、防災教育といった多様な視点から変容する中国社会を中長期的視点で見つめ、中国式レジリエンスの構築について考察しながら、そこからわが国が汲むべき教訓を考えるものである。

若手中国人研究者（大阪大学大学院人間科学研究科の大学院生）らが、その言語能力と現地でのネットワーク・フットワークを活かして行った調査の成果を、研究会を重ねて検討し、日本語を用いて執筆した。災害・防災は日本と中国の間で国際協力が期待されている重要な分野であり、また災害が頻発するアジア太平洋地域においても重要な課題である。

もともと、1 冊の本として企画し、構成の各章をかける人を探して書いてもらったというより、研究室に集まってきた院生たちのそれぞれの研究テーマがあり、それを 1 冊の本にまとめようとした苦労がある。各章では院生が国内外の学会で発表をして受賞した研究も含まれている。また中国の現状により、課題を指摘することが当局批判として捉えられると中国人の若手研究者にとって難しいことにならないかという心配、配慮が編者としては必要であった。中国当局の言論統制を間接的に受けることにならないようにというバランスを意識した。

長年にわたり繰り返し訪問した現地で撮影した膨大な写真を整理しながら限られた掲載枚数のために選定するとき、その時々を思い出しながら絞り込みに悩んだ。カバーの写真が表裏ともに色合いが暗く雰囲気重いものであったので、巻頭のカラー口絵では最初に明るく色合いも鮮やかな写真を使い、その後時間を遡っていくような並べかたとした。

読み物として、四川や日本の大学・研究所で活躍する中国人研究者、国際協力機構（JICA）の四川支援に従事した日本人などによるコラムも掲載している。

『国際開発研究』第 30 巻第 2 号（2021 年 191–194 頁、島田剛）など学会誌書評に取り上げられているので併せてご覧ください。

大谷 順子（共生学系）

『子育ても、キャリア育ても

ーウィズ/ポストコロナ時代の家族のかたちー』

（九州大学出版会 2023 年）

超少子高齢化が進む時代、本書は、国際開発キャリアの背景を持つ研究者らを中心とした大学教員たちから、若い世代にむけた、どのように人生を切り開くかについてのメッセージ集である。

超少子高齢化がすすむ日本では、2017 年と 2018 年の妊産婦の死因の第一位が自殺となった。子育てに孤立を感じる母親の割合が 7 割に上ると報告されている。その日本では、少子化に歯止めをかけるために産めよ育てよ、と言われ、経済停滞を打破するために女性の輝く社会、女性も働きましょう、と言われ、現代日本の女性は多くを期待されている。出産育児とキャリアは両立できることなのか、両立するためにはどのような準備が必要なのか。また、どのような社会になっていかないといけないのか。子育ては、個人の負うべきものなのか。女性も男性も、また、いろいろな年齢層の社会構成員がおのおのの生を両立していくには、どのような社会になっていかないといけないのか。

本書は、2018 年度より大阪大学で開講している「共生学の話題ー超少子高齢化の孤育て」の講義ノートをもとにしている。国際保健学・母子保健学、国際開発教育の背景を持つ研究者らが、それらの課題を身近な例からとりあげ、若い世代を担う学生たちが、これからキャリアと次世代育成の両方をどのように考えて人生設計に取り組んでいくかを考える機会を提供している。海外留学、就業と子育てとの両立を苦戦してきた女性・男性研究者やプロフェッショナルを講義のゲストスピーカーまた本書の分担章執筆者として迎えている。小川寿美子名桜大学健康科学部教授（大阪大学人間科学博士）、北村友人東京大学大学院教育研究科教授、城戸瑞穂佐賀大学医学部教授、Lynne Y. Nakano 香港中文大学日本研究学部長・教授、鄭雅文国立台湾大学公共衛生学部長・教授（城戸、Nakano、鄭は大阪大学招へい教授）による分担章や、馬場幸子地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪母子医療センター母子保健調査室室長・大阪大学医学研究科招へい准教授によるコラムを含む。

開講してみると、履修生は女子ばかりになるという予想に反して、半分は男子学生である。頼もしいことであり、毎年、履修学生たちからも学ばせていただいた。自分のキャリアだけでなく、パートナーのキャリアも大切にしながら、ワーク・ライフ・バランスを考える機会となっている。持続可能な開発目標（SDGs）取り組みの一例として、「誰一人取り残さない」社会の実現を考える次世代の育成の機会ともなっている。子育てだけでなく、UNESCO の包括的性教育や、若年妊娠と貧困、外国籍の子や医療ケア児など無園児の問題を取り上げている。将来、持つであろう（実際に将来子どもをもつ現在の学生は人口統計学で見れば半分にも満たないかもしれない）小さな命と家族のことも考える機会となっている。

川端 亮（名誉教授） 稲場 圭信（共生学系）

『アメリカ創価学会における異体同心 一二段階の現地化』

（新曜社 2018 年）

創価学会は日本で最大の新宗教教団であり、政権の一翼を担う公明党の支持団体でもある。その影響は宗教だけでなく、政治や経済などの社会のさまざまな面にまで及んでいる。

グローバル化の事例としても創価学会は興味深い。グローバル化し、世界で製造、販売している代表的企業であるトヨタの海外販売拠点網は 172 カ国という。創価学会 Soka Gakkai International (SGI)の広がりはそれ以上で、世界の 192 カ国・地域に信者を擁している。

南無妙法蓮華経を唱える、極めて日本色の強い創価学会が、なぜグローバル化できたのだろうか。

本書は、アメリカの SGI を対象とする。ロサンゼルス、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、マイアミ、ハワイを計 15 回訪問、多様な人種、職種、社会階層のメンバー70 人ほどにインタビューをし、英語の機関紙誌を調べ、現地での SGI メンバーの集まりに参加したデータを元に書き上げたものである。

序論で SGI-USA の歴史を紹介したあと、1 章で日本ではあまりなじみのないアフリカ系アメリカ人とゲイの人々の信仰についてインタビューを元に描き、日本の創価学会の教えがアメリカでどのように新たな意味をまとって広がっているのかを示している。2 章では、入信と回心過程という宗教社会学の研究テーマについて、アメリカの社会的背景も入れて分析している。3 章は、組織の編成の観点から、SGI がアメリカ社会に根付く要因を分析し、4 章では、教典やことばの英語化・現地化は、2 段階のステップを踏むことを明らかにした。また、5 章では、創価学会においては極めて重要な概念ではあるが、アメリカの文化を考えると受容されるのが非常に困難であると思われる「師弟」の概念が、なぜ浸透しているのか、その理由を探究した。

人間科学の研究においては、多くの研究分野で質的なデータ分析が用いられている。本書は、インタビューデータを分析し、平易な文章で記述しながらも、その記述方法において、細部に技巧が施されている。また、データ分析に基づいて、学術的な概念が導き出されたり、既存の学術的な概念との比較が行われることによって、研究書としてのおもしろさある。

そして、異なるアメリカ文化と出会った日本型の組織がどのように変容するのかを分析することを通じて、UK が EU を離脱し、アメリカファーストの時代に、多文化共生はいかに可能であるのか、を考える材料となるだろう。

北山 夕華（教育学系）・橋崎頼子編著

『多文化社会の学校と教師教育』

—ノルウェーと日本の国際比較研究から—』

（大阪大学出版会 2024年）

本書は、社会の多文化化と教育をめぐる課題について、ノルウェーと日本の比較研究を通じて実践的な示唆を引き出そうとするものである。北欧諸国は、教育、福祉、民主主義、ジェンダーの平等、ライフワークバランスといった様々な側面において、しばしば理想的なモデルとして日本に紹介されてきた。一方、北欧のそれぞれの国がどういった歴史的背景のもとでどのような社会的課題に直面し、時に葛藤や軋轢を調停しながらどう対処策を見出してきたのかという具体については、案外よく知られていないのではないだろうか。

ノルウェーでは「均質的な国民観」が長らく共有されてきたといわれるが、労働移民や難民の受け入れにより多文化化が進む中で、そうした国民観は転換を迫られてきた。本書は、こうした背景を踏まえながら、両国の教育者の日々の葛藤や思索に注目する。教室の変化に政策が対応するまでにはタイムラグがあり、多くの場合、現場レベルの取り組みが政策変化に先行してきた。グローバルな人びとの移動に伴う社会変化は国境を越えて同時代的に経験されており、二国の教育者たちの省察や創意工夫は、教育と多様性をめぐる課題と可能性を多面的に浮かび上がらせる。また本書は、国際比較研究であるとともに、教育における多様性をめぐる理論的な議論や、関連政策の展開についても俯瞰できる入門書となっている。

本書の元となった共同研究は、私がノルウェーの大学でポスドク研究員だったことがきっかけとなっている。他者に対してあまりオープンとは言えない内向的メンタリティのノルウェーにおいて、制度面では多様性に開かれたものへと着実にアップデートしていることに感心しつつ、正直少し不思議に思っていた。だが、ノルウェーで4年間暮らす中で見えてきた、時に葛藤やモヤモヤを抱えながら試行錯誤する教師や教育者たちの姿は、案外日本のそれらと大きく変わるものではなかった。だからこそ、両国の取り組みの現状を丁寧に掘り下げることで重要な示唆が得られるのではと考えた。

ノルウェーと日本という、一見地理的・文化的に距離のある両国において、教育現場はどう変容し、教育者たちはそれにどう向き合っているのか。そこでは何が異なり何が共通しているのか。それはなぜなのか。本書では、政策面を押さえつつ、現場の具体的な声を取り上げることを心がけた。読者には、そこからぜひ何かを発見してもらえれば幸いである。

クロイドン シルビア (社会学・人間学系)

『The Politics of Police Detention in Japan:

Consensus of Convenience』

(Oxford University Press 2016 年)

In the midst of growing scrutiny of Japan's criminal justice system due to the arrest and detention of Nissan executive Carlos Ghosn, *The Politics of Police Detention in Japan* is a timely book to read. It illuminates the source of legal legitimacy for the Japanese practice of prolonged police detention of criminal suspects, which is unique amongst developed countries in that it lasts for 26 days on average (compared to 3-4 days in most other such places). The reader is introduced to a little-known clause from the law regulating for prisons that authorizes substitution of detention center cells for police cells for the purpose of detention. It is by recourse to this clause that the investigative authorities in Japan are achieving detention of suspects in their own cells, right up until indictment, in 98% of cases.

As the volume explains, however, the substitution of facilities was never meant to be the norm, as it is today. At the point at which the clause entered the law in 1908, it was merely a stop-gap measure that was aimed at alleviating a shortage of Justice Ministry infrastructure – the place for suspect detention of original intent – and was meant to be used on an exceptional and temporary basis. The reason why the clause became utilized to such an extent is mainly because after the Occupation the police and prosecution found themselves lacking other investigative tools.

McArthur's legal aides had reduced their stature, the Police Preservation Law were repealed, and a new Code of Criminal Procedure was introduced with the principle of *habeas corpus* (i.e. that any arrestee should be brought promptly, within 72 hours, before a court of law to decide whether their continuous detention is lawful). The prolonged detention in police cells was the only way in which the police and prosecution could continue to examine suspects as before.

The Politics of Police Detention in Japan relates how, whilst the investigators are eager to capitalize on the facilities-substitution clause, all other major stakeholders too – the Justice Ministry, the legislature, the courts, and lawyers – have each come to view this alternative detention arrangement as more suitable and convenient. The investigators' actions are just one part of a broader self-reinforcing mechanism, which is indeed why the system persists in spite of long-standing international criticism. Apart from teaching students about a specific aspect of Japan's criminal justice system, the book should prompt them to consider human rights debates.

近藤 和敬（共生学系）

『ドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』を精読する

— 〈内在〉の哲学試論』

（講談社 2020 年）

本書は、フランスの哲学者であるジル・ドゥルーズと社会活動家であるフェリックス・ガタリの最後の共著（実際にはほとんどドゥルーズによって書かれているので、半ばドゥルーズの最後の単著でもあるのだが）である『哲学とは何か』（1991 年刊）について、とくにそれを一貫した仕方で読めるようになるということを目指にしたものである。全体で三部構成になっており、第一部ではドゥルーズとドゥルーズ+ガタリの著作の年代順の分析を通して、『哲学とは何か』で主題化される「内在」という言葉が、どのように形成され、何を問題にしているのかということをも明らかにしようとしている。続く第二部では、第一部で明らかにされた「内在」という語を理解可能にする思考の全体像を著者の解釈をもとに再構築している。第三部では、これらの準備を踏まえて実際に『哲学とは何か』のテキストを文字通り読むことを試みている。実際には、第二部の終わりまで読めれば、第三部は比較的簡単に読めるように作っているのだから、頑張って第二部の終わりまでいけたら、『哲学とは何か』も少なくともここで提示されている読み方では読めるようになっているはずである。

この本自体はあまり初学者向けではなく、とくに学部的一年生が読むべきかと言われると正直少し迷うところがある。ただ、本書冒頭の「序文」だけは、おそらく読むことができるし、アマゾンなどの Kindle 版を扱っているところでは、「序文」全体の試し読みができるので、そのために薦めている。「序文」で出てくるエピソードは、実際に、わたしが人間科学部の学部生だった時のものであり、その点でも皆さんには馴染みやすいかもしれない。冒頭に出てくる（指差しなしの）「これがある」の話に気が付いたのは、人間科学部の横のテニスコート側の駐車場を歩いているときだったことを今でも覚えている。

坂口 真康（共生学系）

『「共生社会」と教育—南アフリカ共和国の

学校における取り組みが示す可能性—』

（春風社 2021 年）

昨今、グローバル化の進行などにより人びとの文化的背景が一層多様化する中で、社会で他者といかに「共生」できるのかが盛んに議論されるようになりました。そのような中、本書では、1994年に初の民主的選挙が行われ、制度としてのアパルトヘイト（人種隔離政策）が撤廃された後の南アフリカ共和国（南ア）の学校教育を事例として、「共生社会」と「共生教育」の理論を考察することを目的としました。その背後には、いわゆる欧米の多文化社会を想定した中で築かれてきた従来の「共生」に関わる理論に対して、異なる観点からの考察を行うというねらいがありました。

本書では、文献研究、政策・制度の分析、学校教科書・試験内容の分析に加えて、南ア西ケープ州の公立高等学校3校におけるフィールドワーク（2012年～2014年に、学習者63名と教育者21名へのインタビュー調査、学習者への質問紙調査（2013年のみ実施。有効回答者数1,520名）と96回の授業観察を実施）を研究方法として採用しました。研究成果をまとめる際には、2000年代前半のナショナル・カリキュラム改革により南アの高등학교段階で導入された、“Life Orientation”という名の同国の「共生教育」の中核を担う必修教科を軸にした分析・考察を行いました。

本書では、現代の南アの高등학교の「共生教育」では、自他の思考の相違とそれにより生じ得るコンフリクトを前提とした教育が展開されている側面があることなどを提示しました。また、暴力等の「人種差別」が行動として表出される状況から身を遠ざける際には、「トラブル」を避ける、「命の危険」から身を守る、といった動機が働いている側面があることを示唆しました。さらに、その点において、現代の南アの「共生」は、「共に生き延びる」ための営みという側面を有していることを指摘しました。加えて、アパルトヘイトの被害者も加害者も含みつつ「共生」する選択肢をとった現代の南アの取り組みからは、人間の「失敗」を「赦す」という観点を学びとることができることを示しました。

本書には、調査実施の困難さなどから、日本（語）の文脈では研究がほとんどされてこなかった南アの学校教育について、「共生」に関わる理論に基づきつつ、実証的に探究した点に独自性と意義があります。既存の議論とは異なる角度から「共生社会」やそれに関わる教育（特に学校教育）を思考し、試行してみたい方々に、ぜひとも本書を読んでいただければと思います。

なお、本書が出版されるまでの著者の経験などについては、『わたしの学術書—博士論文書籍化をめぐる』（春風社編集部編、春風社、2022年）の中の「学際的な研究への架け橋」（pp.463-469）に詳しく書かれております。そちらもぜひご一読ください。

佐々木 淳 (教育学系)

『こころのやまいのとらえかた』

(ちとせプレス 2024年)

「気分が落ち込んでしまうんです。なんだかつらいんです。」

こんな言葉が聞こえてきたとき、「これは何かの症状なのかな」とか、「気分が落ち込むならうつ病かな」という風にとらえることは自然なことでしょう。身の回りやご自身が精神病理(らしきもの)をもっていたことで、臨床心理学を学ぼうと阪大に入学された方も多いと思います。こうした方々にはじめにおすすめるのは、確かな知識をつけることです。「臨床心理学 (New Liberal Arts Selection)」の紹介も見てみてください。不安症、うつ病、双極症などなど、様々な精神病理について、エビデンスに基づくメカニズムや心理療法について整理されています。

しかし、同時に「本当にこれでいいのだろうか?」「私はこう考えているけれど、違うのだろうか?」と自分の経験から「考える」態度も失わないでほしいと思います。精神病理は非常に複雑、かつそれを持つ人のニーズも多種多様なので、クライアントの話を聞きつつカウンセラー自身で考えなければいけない部分が残されているからです。皆さんがカウンセラーなら、例えば症状を治すことをそれほど求めていないクライアントに対して、何を行うのでしょうか? 症状=病気=治すべきものと決めてかかると、クライアントが求めていることが逆にみえなくなります。

この「こころのやまいのとらえかた」は、「症状」とみられがちな心理的現象を様々な視点から眺めていきます。冒頭のうつ病に見える方が登場して、様々な視点から考察されてゆきます。自分の困りごとを頭に浮かべながら読んでみるのもよいでしょう。「知らないことばかりだった」という感想の方が専門家でも多いようですので、どうか少しずつ読んでほしいと思います。難しい点はどうぞ遠慮なく聞いてください。精神病理に対する多種多様なとらえかたと支援のポイントに触れてください。

ジェイムス・ベネット・レヴィーら

伊藤 絵美・丹野 義彦監修／佐々木 淳（教育学系）監訳

『体験的 CBT：実践から内省への自己プログラム』

（岩崎学術出版社 2021 年）

認知行動療法（Cognitive-behavioral therapy: CBT）って聞いたことがありますか？その名の通り認知や行動を見直し、工夫していくことで心理的不適応の改善を目指す心理療法で、日本でも効果が確認されています。2026 年からは公認心理師がおこなう CBT が保険適用される、つまり保険証が使えるようになりました。学部や大学院で学んでおくとい心理支援のアプローチだと言えます。

では CBT をどのように学べばいいのでしょうか？もちろん本を読む、動画を見てみる、ロールプレイをしてみる、指導者に教えてもらう、というのも大事ですが、自分自身の困っていることに CBT の技法を使ってみるのがとりわけよいとされています。この「体験的 CBT」は、今の自分を振り返り、なりたい自分になっていくために、12 個のモジュールからなる CBT の技法を体験していきます。英語名では Self-practice/Self-reflection (SP/SR) と呼ばれるこの本は、1 つのモジュールが終わったら、技法を使って感じたことや考えたことなどについて振り返る、つまり「自己内省」(Self-reflection) をおこなって、技法やご自身についてより深く理解していきます。CBT のありとあらゆる技法を絶妙な順番で提供してありますので、実のある理解ができていくことでしょう。

CBT の発展には精神病理の心理学的メカニズムの解明と、その仕組みに即した治療技法の開発が背景にありました（「認知臨床心理学：認知行動アプローチの展開と実践」をご覧ください）。しかし、よく効く技法はもちろんあるけれど、セラピストの人柄が治療結果に大きく影響を及ぼしていることが明らかになっています。上で述べた自己内省とは、自分がクライアントと会っているときにどんなことを考え、感じるのかをながめることができるようにしておくということです。人科の大学院では臨床実践の実習生としての困りごとを使った SP/SR プログラムを行っています。まず学部生は、より深く CBT とは何かを知るためにこの本を使ってみたいと思います。

丹野 義彦 責任編集

分担執筆 佐々木 淳 (教育学系)

『認知臨床心理学：認知行動アプローチの展開と実践』

(東京大学出版会 2024 年)

だいぶ昔ですが、学生時代に「精神病理学」の講義にでた時、「なんだかよくわからない・・・」と感じたことを記憶しています。そのわからなさとは、「複雑なところという存在をなぜ複雑に論じるのか?」「なぜ学者の考え同士を戦わせる形で議論するのか?」という点にありました。単に理解不足だったかもしれませんが、そんな風に考えていたので、4 回生の時に「認知臨床心理学入門 (東京大学出版会, 1996)」という本に出会ったとき、精神病理の仕組みが非常にクリアに理解できて驚いたものです。はじめから複雑にとらえるのではなく、モデルを提案して実証すること、人の考えに着目する認知的アプローチの有用さや臨床心理学における斬新さを感じました。

「認知臨床心理学入門」から現在までの 30 年ほどの間、多くの認知的アプローチの研究が日本でも行われるようになりました。これは、当時の私の問いである、学者同士の考えを戦わせるのではない実証研究が普及したことを意味しています。この本は「認知臨床心理学入門」の知見をアップデートすると同時に、その発展型として、社交不安症、睡眠、ストレス、反復思考、認知バイアス、マインドワンダリング、抑うつ、自己注目、自己洞察、自殺予防と援助希求、一般人口における精神病症状体験、被害観念、幻聴、パーソナリティ理論、完全主義、攻撃性といった幅広い話題を扱っています。精神病理で卒論を書いてみたい方は、この本をみれば興味のあるテーマの現在地が見つかると思います。

認知的アプローチの面白さの 1 つは、自分自身の内的体験が研究に活かせることだと思います。ご自身の感性で新たな切り口の研究をしてほしいと思います。

丹野 義彦・石垣 琢磨・毛利 伊吹・佐々木 淳（教育学系）・杉山 明子

『臨床心理学（New Liberal Arts Series）』（第2版）

（有斐閣 2025年）

心理療法は何種類あるかご存じでしょうか？実は200種類以上あると言われていました。様々な人に合わせて支援を作ってきたことや、それを作る人たちの個性があふれていたことの現れですが、同時に学問的基盤の大事さも感じ取ることが出来るかもしれません。

この本は臨床心理学の基本的なことからについて、幅広く、かつ体系的に紹介しています。幸いにも10年読み継がれましたので、2025年に最新の情報にアップデートして改めてお届けすることになりました。第1部「臨床心理学の基礎」は、臨床心理学の発展や基礎心理学領域、パーソナリティ理論がどのように臨床に役立つのかについて、第2部「臨床心理学の理論と実際」では、カウンセリング場面やアセスメント法、心理療法の3大アプローチ（精神分析、人間性心理学、認知行動療法）、心理職の活躍する現場、忘れてはならない倫理や研究について理解を深めることができます。第3部「心理的障害の理解と支援」では、異常—正常を決定する基準、精神病理に影響を与える要因など、精神病理の見取り図を紹介し、うつ、社交不安症、パニック症、強迫症、PTSD、発達障害など、代表的な病理の理解と支援を紹介します。認知症や依存症など近年社会問題になっている精神障害や身体疾患から生じる精神障害を扱っているのも特徴的と言えるでしょう。

「Evidence-Based Approach」とオビにある通り、科学としての臨床心理学に立脚した理論と実践について紹介していますが、そうではない考え方を否定するのではなく、研究によってわかっていることや定説を中心に体系的に知見を整理した本です。700頁を超えてしまいましたが、臨床心理学を広く眺めていくのに使ってもらえたらと思います。将来、公認心理師を目指さない方でも、身の回りの方の相談やご自身のメンタルヘルスを守るためのヒントになることでしょう。

園山 大祐（教育学系）監修・監訳、田川 千尋監訳 京免 徹雄・小畑 理香 編著

『教師の社会学 ―フランスに見る教職の現在とジェンダー』

（勁草書房 2022年）

近年、教師の労働環境の過酷さや教師不足といった教師を取り巻く課題がメディアなどで取り沙汰される機会が増えている。本書は、こうした日本が抱える課題を考え直すための1つの手がかりとして、フランスにおける教師教育についての日仏の研究者による論考をまとめたものである。

本書は3部構成で、第Ⅰ部「教職の変遷と現在」では、年齢や性別、学歴、出身社会階層といった点から初等・中等教師集団を構成する人びとを分析し、その職業アイデンティティーや社会的地位についての自己評価、専門職性の変容を明らかにしている。また、親としての教師の教育戦略にも光を当て、教師ならではの教育制度についての専門知識や労働時間の柔軟さを、自らの子どもの家庭教育に活かしている実態を分析している。

第Ⅱ部「教師とジェンダー」では、女性教師の増加にもかかわらず、上位の学校段階や管理職では男性優位が維持されていることが示される。加えて、教師自身ももつジェンダー・バイアスについても検討し、それが教室での実践に及ぼす影響やステレオタイプの思考を回避するために教師養成段階で何が求められるかといった問題にアプローチしている。管理職の女性比率などは日本の方が低いが、これらは日本にも通じる問題である。

第Ⅲ部「教師の労働環境」では、授業準備や答案採点などを通じて労働が日常生活に入りこむ教師の働き方、保護者からのプレッシャーや任務の多重化・多様化による教師の精神的消耗、労働条件の悪化による離職率の上昇といった、教師の労働をめぐる問題が取り上げられる。フランスの教師の勤務時間は日本よりも大幅に少なく、柔軟な働き方が可能であるほか、日本でも教師の働き方改革として導入が進む専門スタッフとの協働もすでに行われている。それにもかかわらず、日本と類似の深刻な問題が見られることが明らかにされているのである。その一方で、フランスでは他の職業から初等教師への転職が増加しており、全体の約3分の1を占めるという興味深い実態についても分析されている。

本書に収録された論文の多くはフランス人研究者によるものであり、フランスの教育制度や教師教育についての前提知識がないと難しく感じられるかもしれない。とはいえ、これまで述べてきたように、本書で扱われている問題自体は日本にも共通する部分が多く、馴染みのあるものである。また、インタビューも多数引用されており、フランスの教師のリアルなあり様の一端を知ることできる。同様の課題に向き合うフランスの事例を知ることによって、日本が置かれている状況を相対化する視点とあらためて問い直すヒントが得られるだろう。

園山 大祐（教育学系）編

『岐路に立つ移民教育』

（ナカニシヤ出版 2016年）

本書は、外国人児童生徒の受入れおよび移民の教育保障と学力について日本とヨーロッパを比較検証するものである。

1970年代より単純労働者の受入れ停止を機に西ヨーロッパにおける外国人児童生徒の教育機会保障が開始されてから40年が経つ。ヨーロッパの課題を再確認し、日本における1990年の入国管理法の改正以降増加傾向にある外国人児童生徒の教育課題に、どのように還元できるか、まとめたものである。日本の外国人教育問題に関心がある人に推薦したい。

ヨーロッパ諸国として、フランス、ドイツ、イギリス、オランダ、スウェーデン、スペイン、ロシアを取り上げている。古くから移民の受入れ大国として経験値のあるフランス、ドイツ、イギリスにくわえ、多文化社会のモデルとされたオランダ、スウェーデン、そして新たに移民の受入れ国となったスペイン、ロシアを加え、日本との横断比較研究となっている。

第1部で、新規外国人教育の対応に迫られた日本との比較で、ヨーロッパにおける学習権の保障、教育機会の確保についてまとめている。第2部は、ヨーロッパにおける移民第二世代以降の学力問題について分析し、国際機関であるOECDのマクロな分析や提言に注目している。日本の今後の外国人の定住化を見据えた学力保障にむけた補償教育の機会確保など検討課題は多い。第3部では、外国人・移民教育に必要とされる出身言語・文化の教育、あるいはマイノリティを包摂する教員養成のあり方、さらにはイスラーム学校のようなエスニック（宗教）学校の状況について検討した。

またコラムを通じて、現場の声や、映画情報など学生に関心を持たせる工夫も凝らしてみた。あるいは付録に基本情報をいれ、出版社のサイトには学校系統図など、教科書としても使いやすくなるよう配慮してみた。

本書を通じて、ヨーロッパの移民問題の多様性に関する理解の促進と同時に、日本の外国人生活者に対する関心の広がりにつながれば嬉しい。そして、政策立案者や学校関係者、保護者（PTA）などに、海外の実践や研究成果をヒントに、日本の教育制度の改善に役立てればと考える。

園山 大祐（教育学系）編

『若者たちが学び育つ場所』

（ナカニシヤ出版 2024 年）

本書は、日本と欧州における従来の一斉共同体型の学校に馴染めない若者のセカンド・チャンス教育の場を調査し、まとめたものである。本書の執筆者たちは 2019 年から 2023 年度の 5 年間、現地調査を実施した。本書の姉妹編として、各国の政策を取り上げた『学校を離れる若者たち—ヨーロッパの教育政策にみる早期離学と進路保障』（ナカニシヤ出版）を 2021 年 3 月に出版した。今回は、その政策実態編として、各国の実践例を取り上げている。EU（欧州連合）では早期離学（者）を次のように定義している。「前期中等教育段階を修了あるいは未修了の 18 から 24 歳の就労、就学状況にない若者を対象とする」。そして、早期離学率の EU 平均を 9.0%以下にすることを目指している。2015 年からの早期離学率の変遷をみると、EU 平均では、11%から 9.5%に下げている。EU では各国に予防・介入・補償に向けた対応（政策）を求めている。そこで本書の第 I 部では、この予防と介入の実践例とされる国（ドイツ、イギリス、ベルギー、オランダ）を取り上げ、第 II 部では、補償教育の実践例とされる国（スペイン、ノルウェー、エストニア、ポルトガル、フランス、スウェーデン）を紹介する。

「早期離学」は、OECD 加盟国それぞれにとって解決すべき課題であることは間違いないが、後期中等教育にどのような役割を期待し、どのような教育課程を用意しているのか、あるいはどのようなスキルを習得させた若者を労働市場へと送り出そうとしているか（予防）、また早期離学に対してどのような対策をとっているのか（介入）、さらには一旦労働市場への移行に失敗しても再度参入する道が用意されているのか（補償）を併せてみていくことで、「早期離学」をめぐる政策の成否は明らかになる。

また資格（取得のための学習）に回収されない学力や能力はないのか、あるとしたらどのようなものなのか。それらを評価したり認めたりするには何が必要なのか。それができない学校や社会の方に問題があるのではないのか。このような問いをもちあわせておくこともまた必要となろう。これは、資格を取得できない者、労働市場への参入が困難である者を問題視したりかれらの側に責任を負わせたりするのではなく、そうさせてしまった社会や制度の方を問い返していく視点である。早期離学対策の学術的検討の射程として、早期離学者を対象とした検討に加えて、早期離学が「問題」となりうる社会の方を変革する視点も同時にもつにはどうしたらよいか、考えてみたい人に推薦する 1 冊である。

高田 一宏（教育学系）

『新自由主義と教育改革—大阪から問う—』

（岩波書店 2024 年）

新自由主義は経済学から生まれた考え方ですが、20 世紀末から現在にいたるまで、広く社会政策や教育政策に影響を与えてきました。

新自由主義とはどのような考え方でしょうか。かいつまんでいえば、雇用の安定と社会保障の整備によって市民生活の安寧をはかろうとする「福祉国家」の非効率性を批判し、公共サービスに市場原理を取り入れ、受益者の選択と提供者の競争を促し、サービスの質を向上させようとするのが新自由主義の考え方です。「古い」自由主義が自由放任を旨とするのに対し、「新しい」自由主義は市場を作り出すために国家の介入を容認します。「古い」自由主義は国家が個人の内面に立ち入ることを避けたのに対し、「新しい」自由主義は復古主義的・権威主義的な道徳を広めようとしています。

本書では、そんな考え方が教育政策に取り入れられた結果、子どもたちの学びと学校がどのように変質したのかを検証しました。舞台は大阪。俎上に載せたのは地域政党「大阪維新の会」が主導して推し進めてきた教育改革です。この十数年来、大阪では、子どもたちの学力テストの成績で教育活動の出来映えを評価したり、個人が自分にあった学校を選んだりできるようにする政策が推し進められてきました。首長や教育委員会に自分の意見を述べる教職員には厳しい処分が下されてきました。大阪は日本の教育改革を「先導」した実験室であったといえるでしょう。

では、これらの教育改革は教育の質を高めてきたのでしょうか。あらゆる子どもたちの学ぶ権利を保障してきたのでしょうか。

私の答えは「No」です。

恵まれた環境のもとにある子どもたちやそういう子どもたちが通う学校にとっては「Yes」といえるようなこともあったかもしれません。しかし、社会経済的に恵まれない環境のもとにある子どもたちやそういう子どもたちが多く在籍する学校は厳しい状況に追い込まれています。本書では教育改革の「影」の側面を具体的に明らかにするとともに、なぜそういう状況が生まれてしまったのか、これからの教育改革はいかにあるべきかを考えてみました。

一時の思いつきや個人の思い込みで教育のあり方を考えるのではなく、一見、客観的にみえる数字に振り回されることなく、子どもたちの現実を的確に捉え、子どもたちの成長・発達に対する応答責任（responsibility）を軸に教育を考えること。今、そのことが求められているのだと思います。

入戸野 宏 (行動学系)

『「かわいい」のちから：実験で探るその心理』

(化学同人 2019 年)

日々の会話はもとより、メディアでもたびたび登場する「かわいい」という言葉。何となく楽しい感じがしますが、改めてその意味を尋ねられると答えに詰まってしまいます。「かわいい」が若者のサブカルチャーとして注目されるようになったのは今から 50 年ほど前であり、サンリオのハローキティが誕生したのは 1974 年のことです。

小動物や赤ちゃんをかわいいと言うのは理解できます。でも、最近では、「きもかわいい」(キモい+かわいい)とか、「ぶさかわいい」(不細工+かわいい)といった言葉もふつうに使われています。

「かわいい」とはいったい何であり、なぜ人々を魅了するのでしょうか。かわいいことは何かの役に立つのでしょうか。

本書は、このような「かわいい」に関するさまざまな謎を、実験心理学の視点から明らかにしたものです。「かわいい」は、これまで文化論や美学の立場から語られてきましたが、データに基づいて科学的に研究したのはこの本が初めてです。実験心理学とは、人間の心や行動に関する法則を実証的に明らかにする科学です。そこで得られた知見を整理し、論理的に組み合わせていくことで、「かわいい」の謎を解き明かすことができます。

かわいいと感じることの性差や年齢差に始まり、かわいいと感じられる形状、「かわいい」と「cute」の違い、幼さとかawaiiさの関係、「かわいい」を感情として捉える視点、「かわいい」がもたらす効果、「かわいい」の産業応用に至るまで、幅広いテーマを扱いました。巻末には、これまで国内外で発表された「かわいい」に関する研究文献のリストをつけました。著者のウェブサイト (<http://cplnet.jp/kawaii>) にもリンクつきで載せていますので、ご覧ください。

かわいいものが好きな人だけでなく、科学的な心理学でどのような研究が行われているかに興味がある人にもおすすめの一冊です。タイトルに表現したように、「かわいい」にはこれからの時代に必要な力が宿っています。一言でいえば、それは「やさしさ」です。自分で工夫してデータを取ることで新しい世界が見えてくるという実験心理学の魅力を、「かわいい」というやわらかな題材を通して、多くの人に知ってほしいと思います。

入戸野 宏 (行動学系)

『見るだけで心が整う かわいい動物の写真』

(アスコム 2023 年)

研究者の仕事はたくさんあります。私のような実験系の研究者にとっては、実験を行い、結果をまとめて、英語で論文を書く。これがメインの仕事です。これまで蓄積されてきた人類の知識体系に少しでも寄与することが研究者の望みだからです。それに加えて、ときおり一般向けの講演を頼まれたり、テレビや雑誌の取材を受けたりすることもあります。

人間科学や心理学の研究対象は私たち自身ですから、その研究成果は多くの人たちに関係するはずですが、しかし、情報を提供する側と受け取る側の間には大きな壁があります。専門家は科学的な過程や厳密性を重視しますが、一般人は往々にして分かりやすい結論だけを求めます。慎重に発言した内容であっても、都合よく切り取られて使われたり、誤解されたりすることもあるので、マスコミによる紹介を快く思わない研究者もいます。

私が「かわいい」についての研究をはじめてから 15 年が経ちます。そのような一風変わった研究を始めたきっかけについては、前著『「かわいい」のちから』(化学同人、2019 年)に書きました。ときおりメディアで取り上げていただくこともありましたが、科学的に不確実なことは言うまいと決めていました。しかし、最近になって、それは研究者の逃げ道にすぎないのではないかと考えるようになりました。パソコンやスマホといったハイテク機器は、なぜ動くのかを理解しない人々にも利便性をもたらします。人間科学についての知見も、もしそれが科学的にしっかり検証されているならば、結論だけでも益をもたらすはずですが。その検証を行うのが専門家の仕事です。限界を理解した上で、現時点における結論をできるだけ明示する努力が必要なのかもしれません。

動物の写真集はこれまでもたくさんあるが、「かわいい」の効用をしっかりと述べた本を作りたいという出版社の希望に応じて、この本は生まれました。自分からは決して書こうと思わない種類の本です。一般の人に分かりやすい表現と学術的に厳密な表現との間で葛藤しながら、また、直接の科学的根拠 (エビデンス) が無いものは状況証拠に頼りながら、「ここまでは言ってもいいだろう」というぎりぎりの結論を出してみました。

たとえ小さく基礎的な研究であっても、私たちにとって価値のあるテーマに地道に取り組んでいけば、どこかで社会とのつながりが出てくる。それをきっかけとして、新たな展開が生まれる。そういった一つの事例としてご覧ください。

萩原 広道（行動学系）

『子どもとめぐることばの世界』

（ミネルヴァ書房 2024年）

私たちは、ふだん当たり前のように使っている「ことば」を、いったいどのように身につけてきたのでしょうか。かつては子どもだったはずなのに、その道のりは記憶の彼方。思い出すのは至難の業です。しかも、ことばの発達には「いつの間にか」「あつという間に」次の展開へと移ろいでしまうので、子どもと日々接している方でも、ことばの発達のなかで起こるさまざまなハイライトシーンを、つい見逃してしまうことも多いのではないかと思います。

本書は、そんな「ことばの発達」に目を向けて、その過程に詰まったさまざまな不思議や魅力に迫るツアーガイドブックになります。子どもの小さな頭と身体、そしてその周囲でなにが起こっているのか、ことばの発達の「舞台裏」をめぐることによって、子育てや保育・教育・療育にきつと新しい楽しさとおもしろさが見つかります。また、ことばの発達という、読者のみなさんがかつて辿ってきた旅路がいかにスゴイもので、興味深いものだったかを再発見するきっかけにもなるはずです。メイキング動画などで舞台裏を知っていると、映画や絵画を鑑賞するのがもっと楽しくなります。同じように、ことばの発達の意識されない舞台裏を知ることで、子育てや保育・教育・療育に少しでも「楽しさ」「おもしろさ」を添えられたらいいな。そんな願いを込めて、本書を執筆しました。

本書は、3つのツアーで構成されています。ひとつめは、ことばの発達の全体像をおおまかにつかむための「ことばの発達を広く眺めてみよう」です。ひとくちにことばの発達といっても、その内容は実に多岐にわたります。このツアーでは、それらをいくつかの切り口に整理しながら、それぞれの切り口に関連する具体的な知見を紹介します。ふたつめは、「子ども独自のことばの世界に飛び込んでみよう」です。このツアーでは、ことばの発達をめぐり切り口のなかでも、特に筆者の研究や関心に寄せて、大人とは違う子どもの独特なことばのとらえ方や、その発達のな変化に迫ります。そしてみつめは、「ひらかれたことばの発達研究を目指して」です。ことばの発達をめぐり学術的な知見は、発達研究全体のなかでどのような位置を占めるのか、また、それらは実践とどのように結びつくのかといった事柄について、対談を通して考えていきます。

子どもという身近な他者がくり広げている大冒険を、そして、あなた自身がかつて辿ってきた発達の軌跡を、ぜひ楽しくめぐってみてください。ことばの発達をめぐり不思議が次々と浮き彫りになり、読者のみなさんに楽しんでいただけますように！

福岡 まどか（社会学・人間学系）編著

『現代東南アジアにおけるラーマヤナ演劇』

（めこん 2022 年）

Fukuoka, Madoka (ed.) *Ramayana Theater in Contemporary Southeast Asia*, Jenny Stanford Publishing, 2023.

皆さんはヒンドゥーの神々の名前を知っていますか？シヴァ神やブラフマー神は日本でも比較的知られていると思います。吉祥天(ラクシュミー)や弁財天(サラスヴァティー)などの女神も日本に根づいてきました。インドではそうした神々の物語から神の転生である英雄の物語に至る多くの物語群が発展し、それらは他地域に広まっていきました。この本で考察した古代インドの叙事詩ラーマヤナは、ヒンドゥー三大神の一人ヴィシュヌ神の転生である英雄ラーマ王子が、さらわれた妃シーターを取り戻すべく猿の軍勢の助けを借りて魔王ラーヴァナと戦う、という内容です。

この叙事詩は冒険、戦い、ロマンスなどの要素が満載の魅力的物語です。マハーバーラタとともに古代インド二大叙事詩として広く知られています。ラーマヤナはスタジオジブリのアニメ「天空の城ラピュタ」の題材としても知られており、二大叙事詩の登場人物名は最近の日本ではゲームの題材としてゲーム好きの若者たちに広く知られているようです。

神話が神々の物語であるのに対して、叙事詩は英雄たち特に神転生である英雄たちが活躍する物語であり、神々の世界から人間界により近づいたものとして位置づけられます。王位継承争い、武将の高潔な魂、道徳的規範などを描く人間ドラマの部分は人間の世界に近づいた叙事詩の特徴を示しており、一方で登場人物たちの超能力、運命、不思議な武器などが描かれる部分は神々の転生である英雄たちの物語の特徴を示しています。猿をはじめとする動物や魔物など人間以外の存在も登場します。こうした特徴のゆえにこの叙事詩は、絵画、文学作品などに限らず演劇上演の中でさかんに演じられてきました。

ラーマヤナは9世紀頃から東南アジアに伝わり、多様な分野で独自の発展を遂げ伝承されてきました。この本は、東南アジアの演劇の中でラーマヤナが多様なかたちで演じられている現状を考察したものです。この叙事詩を題材として、今日の理想的リーダー像を追求する舞踊劇や、伝統的ジェンダー規範に疑問を呈する演劇などが創作されています。古代叙事詩であっても、人々が現代社会を生きるための指針になってきたと言えるでしょう。

この本の新しい試みは委嘱創作作品が収録されていることです。口絵頁には現在活躍中のアーティスト3人による新作が収録されています。本文中のQRコードから作品映像クリップにアクセスが可能です。ぜひ文章とともに作品も味わってみてください。まだ新しい試みですが、今後は同様の形式の書籍も増えていくでしょう。またパンデミックの状況下で映像作品化される演劇上演について考える機会にもなると思います。2023年には英語版も出版されました。こちら楽しんでいただけたら嬉しいです。

三浦 麻子（行動学系）

『なるほど！心理学研究法』

（北大路書房 2017 年）

本書は、私が監修した『心理学ベーシック』シリーズ（全5巻）の第1巻です。このシリーズでは、心理学をただ学ぶだけではなく自らの手で研究することを志す方々を主たる想定読者として、心理学の標準的な研究手法とその礎となる基礎知識について、なるべく平易かつ的確に解説しています。中でもこの第1巻は、心理学研究を志すすべての方を対象に、鮮度の高い事例や普遍的なハウツーを盛り込みながら、心理学の多様な研究法のいづれにも共通する基盤的知識を解説しています。

「心理学研究法」は、国家資格「公認心理師」取得に際する必修科目なので、これを講じるテキストは他にもたくさんありますが、本書で特に力を入れたのは、科学における研究不正が社会的にも大きな問題となっていることや、心理学研究の再現可能性の低さが指摘されている現状をふまえて、研究倫理に関するトピックに全13章中の3章を割いて手厚く扱ったところです。これは類書と比較して破格の量であり詳細さです。これは、初学者のうちから、研究者として「なすべきこと」と「やってはいけないこと」をきちんと知ってほしい、という強い思いを込めたものです。

本書は、実証に基づく科学としての心理学が「なるほど！」と理解できて、もっと研究したくなる入門書だと自負しています。研究法の本というと「マニュアル」めいたものを想像されるかもしれませんが、そういう要素も盛り込みつつも、じっくりと読んでいただける内容を目指しました。そのために、事例やハウツーをただ網羅するのではなく、「なぜそうすべきか」を理解できるように呈示することを重視しています。18歳の時の私と同じように、心理学を研究することを志して人間科学部に入学された方々はもちろんのこと、社会学や教育学など隣接領域に関心を持つ方々にとっても、人間科学の中でも心理学とはどのような位置づけにある学問なのかを知る最初の1冊として好適だと思えます。手に取っていただけると嬉しいです。

なお、本シリーズの残り4巻は「実験法」「調査法」「観察法」「面接法」というラインアップで、心理学の主要な研究法に1つずつ焦点を当てて詳説しています。目次や参考文献一覧などを掲載したサポートサイト(<http://bit.ly/2NjfHjZ>)を開設しているので、皆さんの関心に合わせてこちらも是非ご一読下さい。

三浦 麻子（寒竹泉美 編集協力）

『「答えを急がない」ほうがうまくいく

—あいまいな世界でよりよい判断をするための社会心理学—

（日経 BP 2025 年）

本書は、社会心理学について、大学で専門的に学ぼうとか、大学院で研究しようとかいったような強い関心は（まだ）ないけれど、とりあえずどんなものをほんのり知ってみたい、という気持ちは持って下さっている方に向けて、「社会心理学的なまなざし」とは何かとその魅力を私なりに表現したものです。「答えを急がない」というのは、のんびりいこうとか、結論を先延ばしにしようとか、そういう心構えや精神論のことではありません。もっと短い時間のお話です。瞬間的に、ほとんど無意識に湧き起こる「答えを急ぎたい」という衝動のようなものとどう付き合っていくかという話を、社会心理学的なまなざしから語っています。

さて本書は、専門書にありがちな居丈高さをなるべくなくして、社会心理学に関する知識を持たない方にも手に取っていただくために、大きな2つの工夫をしています。

まず1つは、タイトルです。親しい後輩研究者からは「スピリチュアル感」強めだと評されました。はい、そういう印象を持ったなら狙い通りです。心理学という学問はどうにも「スピリチュアル系」の言説と一緒にたにされやすく、皆さんの中にもそんな捉え方をしている方がいらっしゃるかもしれません。研究者としての私はそれをいたく憂っているのですが、だからこそ、そんな方々にもふと興味を抱かせ、手に取らせるために、あえて逆打ちの「仕掛け」を施したわけです。中身は違うよ。

もう1つは、自分自身で文章を書かなかったことです。え？ひょっとして生成 AI に書かせたの？いえ、そうではありません。サイエンスライター兼小説家の寒竹泉美さんをパートナーとして、いわゆる「ゴーストライティング」をしていただきました。私は、論文調の筋の通った文章を書くことは割と得意だと自負しているのですが、読者にするとページを繰らせるような軽やかな文章を書くのは苦手です。でも語りたことはたくさんある。それなら軽やかに書ける人と組めばいいじゃない、というわけです。寒竹さんは、驚くべきことに私が2007年4月以来1日だけ欠かして投稿してきたTwitter(現X)の投稿を遡れるだけ遡って読み、私の人格をインストールして文章を書いてくださいました。その結果、私を書くよりも私らしさが際立つ一方で、軽やかなのに実がある内容に仕上がりました。

大学で会う私とのギャップを感じるか、そのまんまやと思うか、お楽しみに。

三谷 はるよ（社会学・人間学系）

『ACE サバイバー ―子ども期の逆境に苦しむ人々―』

（筑摩書房 2023 年）

ACE（エース）とは、Adverse Childhood Experiences の頭字語であり、「子ども期の逆境体験」と訳されます。具体的には、18 歳になるまでに受けた虐待・ネグレクトや、家庭の機能不全（家族の依存症、精神疾患、DV 等）に曝される体験のことをいいます。

本書では、しんどい子ども時代を生き抜いた人々があゆむ人生についての科学的事実をお伝えしています。この四半世紀の間に発展を遂げてきた ACE 研究の知見を、疫学、精神医学、神経科学、心理学、ソーシャルワーク研究などを分野横断的に俯瞰し、解説しています。さらに、日本での全国 2 万人アンケートや当事者への生活史調査をもとに、ACE サバイバーが被っている累積的な不利の実態を示し、今後の社会のありかたについて提言しています。

本書の核心部分は、ACE が、成人後の心身の疾患、失業や貧困、社会的孤立や子育ての困難に至るまで、長期的に悪影響をもたらすという点です。つまり、「たまたま生を受けた家族の境遇（生まれ）の格差が、生涯にわたる多面的な格差につながっている」ということです。

こうした事実は、目を向けたくないものです。そして、これまで十分に目を向けられてこなかった事実です。しかし本書は、あえてここに切り込みました。それは、社会学者として大規模データを分析すればするほど、ACE サバイバーに過剰なまでの不利が押しつけられていることに驚愕し、「この事実は社会問題である」という認識を強めたからです。

ACE をめぐる事実を多くの人に知ってほしい。しかし日本語で書かれた読みやすい一般書がない。ならば私が書こう、という半ば使命感、半ば思い上がりが筆を進めました。専門的知識の質は落とさないようにしつつ、できるだけ平易に書くことを心がけ、忙しい人向けに、読み飛ばしができるよう重要箇所を太字にしました。

逆境に曝されている子どもたち／かつて曝されていた大人たちの存在を無視することをやめましょう。子どもがどんな家庭に生まれても、健やかな健康やライフチャンスを獲得できるように、そして ACE を予防できるように、この社会でやれることはたくさんあります。本書を、子どもに関わるすべての方、ACE サバイバー当事者、その支援者の方に読んでいただきたいです。また、人間科学を志す人科生にも、是非この本を読んでいただき、自分の社会の中での立ち位置を考えながら、これからの社会づくりについて一緒に考えてもらえれば嬉しいです。

村上 あかね（社会学・人間学系）

『私たちはなぜ家を買うのか』

—後期近代における福祉国家の再編とハウジング—

（勁草書房 2023 年）

どの学問もそうですが、社会学は「常識を疑う」という姿勢を大事にします。私自身は学部生の頃に R・コリンズの『脱常識の社会学』を読みました。脱常識とは非常識な言動をすることではなく「当たり前」とされる物事や考え方を疑い、それがなぜ「当たり前」になったのかを明らかにすることです。

いまの日本社会では結婚して子どもができれば家を買うのが「当たり前」であり、それが難しそうなら結婚しない若者も少なくないことが各種調査から明らかになっています。

ところが戦前のお阪市内では9割が借家住まいであり、ごく一部の新中間層だけが郊外に家を持つことができました。本書ではまず戦後、家を持つことが「当たり前」で経済的にメリットがある選択となるプロセスを確認しました。日本の特徴はまず GHQ の方針が持家率向上を促したこと、次に経済成長を促すために新築持ち家に偏重したこと、そして政府や自治体の代わりに企業が人々の住生活を保障してきたことです。

さらに本書では勤務先の企業規模や親による経済的援助が子どもの住宅取得に大きな影響力を持つこと、若い世代では夫の親からだけでなく妻の親からの援助も増えており、不平等が累積していることを統計データ分析から明らかにしたことです。

また、オランダでのインタビュー調査も紹介しました。公営住宅が充実していたオランダでも老後に備えるために持家率が高くなり、働く女性が増えました。現在では移民の流入が人口増加と住宅不足をもたらす排外主義が高まるなど住宅問題は選挙の大きな争点になっています。他方、日本では住宅問題はほとんど選挙の争点にはなりません、今後はもっと重視されるべきとの思いを込めて執筆しました。

主観的ウェルビーイング（生活満足度）に住宅問題が大きく影響することについては遠藤薫ほか編『災禍の時代の社会学——コロナ・パンデミックと民主主義』東京大学出版会（2023 年刊行）でも書きました。合わせてお読みください。

村上 靖彦 (社会学・人間学系)

『摘便とお花見 看護の語りの現象学』

(医学書院 2013 年)

しばしば不条理な仕方で襲ってくる病や障がいをして、生と死のはざまにある患者と家族を、その生活において支える看護師という職業に私は魅力を感じ続けている。

本書は病院あるいは自宅でのがん患者の看取り、あるいは小児がんの子どもの看取りを通して、もう一度具体的な場面から人間とは何かを問う試みであった。

以下、本書の「はじめに」から引用する。

「看護師さんの語りはおもしろい。

看護師は、私が身につけることのできない技能を持ち、私が決してすることのないであろう経験を重ねている。しかもこのような技能と経験は、同じ人間として地続きのものでもある。それゆえ看護師の語りを聴くとき、私は自分の経験が拡張されるように感じる。しかもそのような語りを文字に起こしてから分析すると、表面のストーリーの背後に、さらに複雑で多様な事象が隠れている。本書はそのような驚きを描いている。

看護師は患者と医師のあいだに立つ。つまり病や障害を生きる患者と、科学と技術を代表する医師とのあいだに立つ。複雑な人間関係や医療制度の板挟みになりながら、生と死が露出する場面に、立ち会い続ける。緊迫した職場であり、人間の可能性の限界を指し示している。それゆえ人間の行為とはいかなるものかを考えるために、重要な示唆を与えてくれるのだ。

本書は四人の看護師さんにインタビューをとり、その逐語録を、現象学という方法論を用いて分析した。内訳は、小児科から訪問看護に移った方、透析室から訪問看護に移った方、がん看護専門看護師、小児がん病棟の看護師である。そして付章で、現象学の方法論の説明を行った。

これから一人ひとりの語りを分析することで、それぞれの看護行為とその背景がどのように組み立てられているのかを明らかにしていきたい。ここで取り上げた実践に、「自分と同じところがある」と共感する看護師さんもいるであろうし、「私とは違う」という人もいるであろう。ともあれこの「一人ひとりの語りの分析」という点が、本書のポイントとなる。裏返すと、類似点と交じり合う形で、その人にしかない特異な経験が生じている。経験と行為は、過去と集団に由来する習慣性のなかで準備されつつも、そのつど取り替えがきかない個別的なものとして生じる。本書ではこの個別的なものに〈意味〉を見出すために、個別の経験の〈構造〉を取り出すということをねらった。」

(本書「はじめに」より引用)

森田 邦久 (社会学・人間学系)

『科学哲学講義』

(筑摩書房 2012年)

科学哲学の入門的な本です。科学哲学というのは、文字通り科学について哲学する分野です。科学哲学には一般論と個別論があって、一般論というのは、分野に関係なく科学という営み全体にかかわる哲学的問題を、個別論というのは、生物学や物理学といった各分野特有の哲学的問題を扱う学問です。私自身は、一般論と物理学の哲学が専門です。本書で取り上げているのは、科学哲学の一般論が主です。では、科学にはいったいどのような哲学的問題があるというのでしょうか。

帰納的推論という、個々の事例から一般的な規則を導き出す推論は、科学では頻繁に使われています。たとえば、十分な数の金属に実際に電流を流してみても電流がよく通るならば、そこから「すべての金属は電流をよく通す」という規則を導き出すような推論が帰納的推論です（もちろん、実際の科学ではそこまで単純な推論をしないですが、基本的にはこのような形です）。しかし、帰納的推論が論理的に妥当な推論である～つまり、前提が正しいと結論も正しい～とは言えません（少なくとも簡単には言えません）。それはなぜでしょうか？そして、本当にそうなのだとしたら、帰納的推論で得た結論はどのようにして正当化されるのでしょうか（そもそも正当化可能なのでしょうか）？また、科学的な探求において「ある現象の原因とは何か」は重要な問いです。しかし「原因」とは正確にはなんなのでしょうか？そもそもこの世界に「因果関係」などという関係は実在しているのでしょうか？本書では、こういった問いに加え、私たちが「科学」と呼んでいる営みはいったいどういう営みなのか、科学理論が要請する直接観測できない実体（原子や素粒子、ブラックホールなど）は本当に存在すると言えるのか、などといった問いについて考えていきます。

このような問いは、実際に厳密に考えてみると簡単に答えは出てきません。しかし、私たちの生活に科学が強く根付いている以上、このような問いを一度は真剣に考えてみることは価値があることでしょう。そして、帰納的推論や原因の探求は、専門的な科学においてだけでなく、日常生活でも行っているわけですから、これらの問いを考えることは、日常生活においても重要になります。是非一度、本書を手にとって科学哲学の世界を味わってみてください。

藤田 政博 編著 綿村英一郎（行動学系）分担執筆

『法と心理学』

（法律文化社 2013 年）

本の内容

本書の構成は、「法と心理学」というテーマの定義から始まり、刑事場面・民事場面におけるさまざまな側面を実験や調査例により実証的に検討するというものである。以下、推薦者（綿村）が分担執筆した第9章「量刑と賠償額の判断」について取り上げる。本章の前節で論じる「量刑判断」とは、有罪が確定した被告人に対してどのような刑罰を科すべきかという判断である。基本的に、そのコンセプトは「悪行に相応の報いを与えるべきだ」という応報性が重視される。ただしその応報性は、裁く側の心理の中では意図せずはたらいており、あれこれと理屈をつけて量刑を決めたように自覚していてもその内実は悪行の大きさでしか決まっていない。要は後づけである。後節の「賠償額の判断」では、米国の懲罰的賠償（Punitive Damages）について論じている。訴訟社会の米国では、日本人には理解しがたいような理由によって“法外な”懲罰的賠償が請求されるケースもある（例、マクドナルド・コーヒー事件）。懲罰的賠償の判断は、加害者への金銭的制裁を科すことで同様の被害を抑止する目的であるが、これは量刑判断とも一部共通すると考えられる。

推薦理由

「権利」や「責任」といった概念に対する意識が相対的に高い欧米において、法と心理学という研究分野は既に40年以上もの歴史がある。一方、日本においては2009年に施行された裁判員裁判まではさほど注目されてこなかった。本書は、心理学の視座から「法」について考察した、日本では初の書籍である。内容は本格的ではあるが表現はきわめて平易で、法律家やジャーナリストに限らず、初学者でもさらりと読むことができる（一般的に、法律関係の書籍といえば、専門用語が多く、主述関係を把握できかねるような長い文章が多いが、本書はそうではない）。また、テーマも民事から刑事まで幅広く扱っているため、法律全体に対しての教養を深めることができる。フィクションの世界と表現される法の世界に対して、実証性と客観性を武器とする心理学がどう切り込むのか、チャレンジングな書籍として読むと興味深さが一層増すであろう。

—シリーズ 人間科学—

シリーズ人間科学（大阪大学出版会 2018年～）

「人間科学とは何ですか?」、「人間科学部は何を学ぶところですか?」人間科学部に入学してこられた皆さんにとっても、この疑問にすぐに答えることは難しいと思います。これらの疑問は、人間科学部が大阪大学に創設された1972年以来、常に投げかけられてきたものです。

私たちの人間科学部・大学院人間科学研究科では、心理学、社会学、教育学を中心に、哲学、人類学、地域研究、生理学、脳科学などの文系から理系の幅広い学問分野が単独で、あるいは交じり合いながら、研究活動が続けてきました。そのテーマは、「人間はどのように生まれ、育ち、死ぬのか」、「人間はどのように共に生きるのか」、「人と人が営む社会とは何か」など、人の暮らしにかかわることです。これらのテーマに取り組むために、文理融合や学際性の視点を大事にしながら、人々の暮らしの現場に寄り添い、課題を発見し、解決を目指すことを心掛けてきました。

このように多年にわたって人の暮らしにかかわることをテーマに研究を続けてきても、「人間科学とは何か」という問いにすぐに答えることができないほど、『人間科学』は簡単にとらえられないものです。だからこそ、私たちは一人ひとりが専門性を深めると同時に、他の学問分野の方法論、考え方をも取り入れることで、人の心、身体、暮らし、社会を探究しながら、それぞれが「私の人間科学」を作り上げることを目指している、と言い換えても良いと思います。さらに、私たちの人間科学部・研究科では、多様な学問領域が関わり合って新しい学問領域である『共生学』を創設し、新たな展開を始めました。

「シリーズ人間科学」は「食べる」「助ける」「育つ」「老いる」「争う」「遊ぶ」などの動詞で著わされる言葉を書名とするシリーズです。これらの動詞は人の暮らし、社会での営みそのものであると同時に、それぞれの言葉をキーワードとして実に多様な視点から考え、取り組むことができる研究テーマでもあります。「人間科学」そのものです。「シリーズ人間科学」の最初の巻として2018年3月に発刊された第1巻『食べる』の目次に目を通すだけでも、その多様な視点とその面白さを感じ取っていただければと思います。

「シリーズ人間科学」の執筆陣は、人間科学部・研究科の教員やここで学んだ人たちです。執筆する研究者はそれぞれの視座から、本のタイトルとなっている『動詞』に挑戦し、自分なりの考えを提示しています。しかも、大学生や一般社会人だけでなく、高校生にも読んでもらえる「わかりやすさ」も追求しました。各章を担当した執筆陣は原稿を互いに読み合いますので、交じり合い、新たな出会いを経験し、それらは「私の人間科学」の構築にも役立つはずです。

「シリーズ人間科学」は、読者である人間科学部の1年生と私たちの交流の場でもあります。この交流が皆さんを刺激し、皆さん一人ひとりが「私の人間科学」を創造するのに役立つと思います。

紹介：中道 正之（名誉教授）

「シリーズ人間科学」編集委員会・初代委員長

『シリーズ人間科学』第一巻「食べる」

(大阪大学出版会 2018年)

一つ、考えてみて欲しい。今日この時まで、口に入れ、飲み込み、食べてきたものは、一体、どんなものであり、それらを、いつ、どのようにして、誰と食べてきたのだろうか。

われわれ人間は、太古の祖先の時代から、「食べる」がゆえに生存できる生き物であり、そして、「食べる」を通じて、その社会や文化、歴史も作り上げてきた存在である。ヒトは新生児として世に生まれた時には、自分自身の力だけでは、食べることにすら思うようにはできない。哺乳と離乳のプロセスの中で、親や養育者に食べさせてもらいながら、成長する。ある食べ物は好きになるが、また、別のものは嫌いになったりと、好き嫌いを持つようになる。そして、毎日の生活の中での「食べる」を通じて、他者と触れ合う機会が増えていく。時には、人間関係を築き上げるきっかけとして、また、ある時には、お互いへの贈り物として。我々の命を支えるはずの「食べる」は、さまざまな病気の一因を生み出すこともある。さらに、「食べる」には、根源的に動物と人とを分けるための文化の色合いや作法も含まれてくる。ヒトという動物である我々が、人・人間という文化・社会的な存在として生きるための線引きを与える事物とも、「食べる」は密に関連を持つ。

グローバル化が進行する世界では、人々の食べ物は多様になり、その地方や国々での伝統的な食生活は急速に変貌しつつある。日本でも数十年前からですら、食の様相は大きく変わっている。「食べる」は個々人での事柄であると同時に、社会や文化においても考えるべきことが多々あるだろう。そして、未来の社会を生きていくには、食を取り巻く社会の変遷や課題とは否応なく関わりを持たざるをえなくなっていくだろう。

本書は、「食べる」に関するさまざまな知見や見方をコンパクトにまとめたものである。「食べる」ということについて、全く異なる切り口から迫るさまざまな学問分野がそれぞれの手法や観点からアプローチできること、そして、やはり、その断面は全く異なる様相であることを示した好例とも言えるのではなかろうか。しかしながら、一見すると異なるアプローチであっても、共通する問題意識が根底にあることにも気づく。編集者として本書を通読しながら、「世界は広い。自分の視野や視点はまだまだ狭い。」と感じた。読者はどう感じるであろうか。一つの事柄・現象を見つめ、深く探究することは良い。一方、一つの分野や見方から、広く周りを見渡しつつ、関係の糸を手繰り、考えを拡げるのも楽しい。まずは一読して欲しい。そして、時を経て、もう一度読み返してみたい。読者の学びのステージとともに、本書の言説の奥にある知識・イメージへの理解や見方の色合い、そして、それらからの発想も変わっていくことを期待する。

紹介：八十島 安伸（行動学系）

「シリーズ人間科学」編集委員会 第一巻「食べる」編集責任者

『シリーズ人間科学』第二巻「助ける」

(大阪大学出版会 2019年)

少子高齢、過疎、災害の頻発、子どもの貧困などさまざまな難題を抱える現在の社会にあって、同時代的に、さらには世代を超えて、誰もが人間としての尊厳を持ち、支え合い、さまざまな困難に共に立ち向かえるレジリエントな共生社会の構築が望まれている。そこでは、「助ける／助けられる」という関係性と、その関係性の外で「助かった」という経験への理解も必要だ。さらには、「助けられない／助からない」ことへの心配りも忘れてはならない。共生社会の構築と「助ける」ことをめぐる思索には、さまざまな「場」での経験の積み重ねと分野を超えた知が必要であろう。

大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科では、2016年に「共生学科目・共生学系」と「未来共創センター」を設置、2017年には新たな共創知を生み出す仕組みとしてOOS（大阪大学オムニサイト）を始動させた。OOSは、共生社会を創造していくための産官社学連携の仕組みである。学内外のセミナーやイベントのあらゆる（オムニ）「場」（サイト）、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」（サイト）で協働実践をする。組織、人、知の壁を越えた「助け合い」という共通価値を創出（Creating Shared Values）し、共生社会の実現への貢献を目指している。

さて、本書のテーマである「助ける」という行為は、人だけでなく、いのちあるものすべてが、誕生から死までの生涯を生き抜くために不可欠な行為であり、極めて日常的な行為でもある。人は一人では生きていけないことは自明であり、このことは、すべてのいのちあるものにも当てはまる。一方、「助けない」行為も、戦争、紛争、さまざまな競技から多様な場面での競争まで、極めて日常的な行為でもある。本書は、共生学系に所属し、未来共創センターのOOSを推進する二人の編者と、人間科学研究科に所属する研究者が「助ける」を多方面から捉えようとしたものである。

本書を通じ、大学生や一般社会人の読者に、人間科学が抱合する広範で、多様な学問分野の視点から、「助ける」のような日常的な行為を顧みることの面白さを実感していただきたいと願っている。若い世代から、人類の諸困難に共感し、その解決にコミットする人材、アントレプレナーシップを併せ持つ人材が育つことを期待する。

本シリーズ第二巻の『助ける』は、多くの方々との出会いと協働作業、ご教示、ご協力、すなわち「助ける」があって成り立ちえた。そのすべての皆様方に、感謝の意をお伝えしたい。

紹介：渥美 公秀（共生学系） 稲場 圭信（共生学系）
「シリーズ人間科学」編集委員会 第二巻「助ける」編集責任者

『シリーズ人間科学』第三巻「感じる」

(大阪大学出版会 2019年)

人工知能 (AI) やロボットの開発が急ピッチで進められている。その発展は私たちの生活を豊かにする反面、いま人間が行っている仕事の多くが近い将来 AI に奪われてしまうという予測もなされている。長い間、サイエンス・フィクション (SF) の話であったことが、突如として現実味を帯びてきた。

未来の世界は恐ろしいのか、それともバラ色なのか。みなさんはどう考えるだろうか。イメージする未来の姿には、その人の持つ「人間観」が色濃く反映されている。

シリーズ人間科学の第3巻は、「感じる」をめぐる11章からなる。なぜ「感じる」なのか。その意図を説明しておきたい。

1972年に大阪大学人間科学部が作られたとき、これからは「人間」の時代がくると期待されていた。1950年代に始まった戦後の高度経済成長が、オイルショックによって終焉を迎えようとする時期である。急速な工業化に伴い、環境破壊が起こり、公害などの社会問題も生まれてきた。経済的には豊かになったが、さてこれからどうするか。そういった問いに答えるために、人間科学部は創立され、多くの学生を引きつけるとともに、多くの人材が輩出した。

それからおよそ50年が経ち、私たちを取り巻く環境は大きく変わった。一番の違いは、「人間は特別だ」という特権意識が揺らいできたことだろう。20世紀であれば、産業機械はいかに優れていても、気の利いた道具の域を出なかった。人間と機械を対比させることはあっても、その根底には「人間は比類のない存在である」という暗黙の安心感があった。

しかし、現在はどうかだろう。自分に似て、しかも自分より優れた部分もあるAIやロボットが登場し、驚くほどのスピードで進化を遂げている。「人間とは何か」という古典的なテーマが、「私たちはこれから何をして生きていけばいいか」という現実的な問いと初めて結びついた。それを解くカギを握るのが「感じる」だという見立てによって、この巻は編集された。

本書は3部構成になっている。第1部「一人で感じる」では、個人の内部で生じるさまざまな現象を取り上げた。第2部「人と人の中で感じる」では、社会的関係におけるいろいろな現象を解説した。第3部「地球規模で感じる」では、個々の集団を超えた社会と社会の関係にまつわる問題を論じた。

本書を手にとったら、難しいことは抜きにして、まずは自分で素直に感じるところからスタートしてみよう。自分をセンサーにして、さまざまな研究領域の現状を感じとってみよう。それが人間科学を始める第一歩である。

紹介：入戸野 宏 (行動学系) 綿村 英一郎 (行動学系)
「シリーズ人間科学」編集委員会 第三巻「感じる」編集責任者

『シリーズ人間科学』第四巻「学ぶ・教える」

(大阪大学出版会 2020年)

「学ぶ」「教える」という動詞から、多くの人は学校の光景を連想するかもしれない。もちろん現代社会において、学校は、主たる学び、教えるための組織である。しかし「学ぶ」「教える」という場を学校に限定するのは、その意味を狭く捉え過ぎである。

人は、この世に誕生したとき、他者の支えなしには生きていけない。そして周囲の人々や、環境、社会からさまざまなものを徐々に吸収し、成長してゆく。これは、社会化とよばれるプロセスである。社会化の過程では、多くの失敗を重ねるだろうし、その失敗から学習することもある。人の一生は、「学ぶ」ことだといってよい。

一方で、人生の先達者として、子どもや後輩に、知識や技能を伝える、という場面も多々ある。あるいは、より日常的に、年齢や立場を超えて、ちょっとした情報を伝えたり、「こうしたほうがいいのか」という提案を示したりすることもある。これらは「教える」行為の範疇に含まれる。しかし「教える」過程で、うまく伝わらなかったなどと反省し「学ぶ」こともある。「学ぶ」と「教える」は、そういう意味で表裏一体の関係にある。

シリーズ人間科学第四巻は、人間科学という視点から「学ぶ」「教える」を鳥瞰したとき、一般に「学ぶ」「教える」を扱う既存の教育学の枠組みをはるかに超えた、多様なアプローチや見方が存在することを示そうと企図している。そこで取られるアプローチは、文系・理系の枠組みには収まらない。実験、フィールドワーク、ドキュメント分析、統計分析、比較研究や臨床的アプローチなど、人間科学の問いを明らかにする方法は多数ある。どの方法が適切かは、問いの内容に依存する。ただ、既存の特定の枠組みや方法論に収まることなく、さまざまな視点から人間活動を見つめれば、人の本性に迫る可能性が飛躍的に高まるであろう。

「学ぶ」「教える」という単語から、かくも多様な切り口が存在するのだ、という学問体系の豊饒さが伝われば、本書の試みは成功したといえる。人間科学を学ぶ学生の皆さんには、ぜひ読んでいただきたい一冊である。

紹介：中澤 渉（教育学系＊出版時） 野村 晴夫（教育学系）

「シリーズ人間科学」編集委員会 第四巻「学ぶ・教える」編集責任者

『シリーズ人間科学』第五巻「病む」

(大阪大学出版会 2020年)

本書は、さまざまな分野や角度から「病む」ことについて考察した論集である。よほど特殊な人でない限り、「病」の経験をしていない人はいないし、また、人間に限らず動物も、あるいは植物もさまざまな「病」を経験する。したがって、「病む」ことは、生き物にとっての普遍的なテーマの一つであると言ってもよい。ところが、「病」や「病むこと」や「病人」の扱いは、動物と人において異なるだけでなく、人の集団（文化、民族、歴史）によっても実にさまざまであり、それが個人の生にとって、また集団や社会の生にとって果たす役割も、驚くほど多様である。

「病む」ことには、さまざまな意味が付与され、また、その「病」の周辺には、さまざまな社会制度や職業が発生する。われわれの日常生活を見回すだけでも、どれほど多くの産業、科学、文化、職種、習慣が「病」に関係しているか、見通すことができないくらいである。本書は、行動学、医学、臨床心理学、福祉学、社会学、人類学などの領域で「病」がどのように意味づけられ、それに対してどんなアプローチがとられるかが平易に理解できるようになっている。われわれは、たとえば、「がん」とか「糖尿病」とか、「エイズ」とか「新型コロナウイルス」といった個別の病気の知識はたくさんもっているように考えている。また、そうした病気が「病気」であることが自明であるようにも考えている。しかし、そもそも「病気」とは何であり、何が病気と呼ばれるべき状態なのか、ということについては、実際には専門家も含めて多くの人が答えられないのである。

2018年10月から、人間科学研究科は、『グローバル時代の健康と教育』というユネスコチェア（ユネスコが指定する特定のテーマについての国際的拠点）を運営している。世界中の健康と病について考える機会がここには豊富にある。その中で浮かび上がるのは、多様な健康と病気の観念であり、またそれらがそれぞれの社会の中で果たす役割の多様さである。大阪大学人間科学部・人間科学研究科で学ぶみなさんが、そうした素朴な疑問と現実の多様さ複雑さ、そして面白さを感じて、今後の勉強に活かしてもらえることを期待する。

本書の制作に携わっていただいた、著者のみなさん、シリーズ全体の編集者のみなさん、出版社のみなさん、また、出版を支援していただいた多くの方々への感謝を込めて、紹介の文としたい。

紹介：山中 浩司（名誉教授）

「シリーズ人間科学」編集委員会 第五巻「病む」編集責任者

『シリーズ人間科学』第六巻「越える・超える」

(大阪大学出版会 2021年)

人生、なかなか思い通りにいかないなあ…。

皆さんも、これまでにいちどくらいはこう思ってため息をついたことがあるのではないだろうか。

確かに、私たちが暮らすこの世界には儘(まま)ならない(自分の思い通りにならない)ことが多い。いつ、どこに、誰を親として生まれてくるか。いつ、どこで、どのような怪我をしたり、どのような病気にかかることになるのか。どのように老いて、いつ、どこで、どのように死ぬのか。あらかじめ自分の人生の行き道について知っている人は誰一人いない。家族や友人をはじめとする周囲の人々との関係だって、思い通りになることばかりではない。学校や塾、部活動での成績だってそうだ。また、自然災害はもとより、いま猛威をふるっている新型コロナウイルス感染症の感染拡大についても、簡単にどうにかなるものでもない。この世界には、儘ならない出来事やものごとがけっこうたくさんある。むろん、こうした出来事やものごとに何とか対処しようと、人知と人力を最大限に活かして事態をコントロールするべく、人間はさまざまな生活の技法や科学技術を開発してきたし、いまこの時も日進月歩の勢いでたゆまず開発を続けている。それでもなお、「想定外」の出来事やものごとは、残念ながら尽きない…。

このような世界で、人間はいかにして〈人間らしく〉、あるいは他の誰でもない、かけがえのない〈私らしく〉、充実した生(生命、生活、人生)を営むことができるのか。本書には、この問いに応答することを研究主題とする学問分野の研究者12名が寄稿している。

この世界は儘ならないことばかりだなんて考えていると気が滅入る、充実した人生を求めて悩んだりせず、気楽になあなあで生きていいじゃないか、と思う人もいるだろう。もちろん、それもあり、である。そう考えること自体に異を唱えるつもりは毛頭ない。

だが、もし、本書の各章で取り上げられている主題一覧(帯文より)を見て、少しでもおもしろそうだと思ったり、何だそれは?と不思議に思ったりしたら、ぜひご一読いただきたい。

夢分析でこころの葛藤を超える? ト라우マから回復するとは?

臨床心理士はただ聞いているだけ? ポジティブな「老い」とは?

呪術で病気を治す? 宗教を信じる仕組みとは?

被災記憶をどう継承する? 「賭ける」ことで現在を超える?

「わかっている」を超えたら世界が広がる?

そうすれば、もしかしたら、この儘ならない世界で、それなりに生き生きと生きるために、境界を「越えて」協働し、既存の知を「超えて」いく何らかのヒントが見出せるかもしれない。

紹介: 岡部 美香 (教育学系)

「シリーズ人間科学」編集委員会 第六巻「越える・超える」編集責任者

『シリーズ人間科学』第七巻「争う」

(大阪大学出版会 2022年)

「争い」はないほうがよい。これはたしかだ。もし争いが発生すると、それを解決しようとしたら、争いそのものが生じることを回避しようとするのも、当然のことだ。一人の人間として、できるだけ争いはしたくないと思うのも、当たり前のことだ。しかし、人間は争いから完全に自由でいられるだろうか。争いがまったくない世界というのはありえるだろうか。そもそも、人間を含むすべての生き物は、「生存競争」の結果生き残り、現在のすがたに進化してきたのではなかったか。ここでは、争いを広く考えてみよう。競争、葛藤、軋轢、鬭争、戦い、等々。これらはすべて争いであると考えることができる。争いは、回避すべき、あるいは解決すべき課題である。しかし、見方を変えれば、争いは進歩や発展の原動力でもある。争いがなかったら、人間の社会と世界は、今のかたちをとっていなかっただろう。

人間は「争う動物である」と言えるのではないか。過去1万年ほどのあいだに人口は爆発的に増加し、南極を除く地球の全域に生息域を広げた。そして、高度に発達した国家と社会を形成したのである。その結果人間は、国家と社会の枠組みの中で、および広く地球環境の中で、多種多様な争いを経験している。それは、食と性をめぐる単なる「生存競争」という次元にとどまらない、複雑な様相を呈している。現代世界は、争いに満ちているといっても過言ではない。

争いは人間科学の主要な研究テーマのひとつになるべき課題である。本書には、このように考えた人間科学研究科教員9名の論考が収録されている。執筆者の専門は、教育学、心理学、文化人類学、動物行動学、共生学等、さまざまである。対象となっている地域も、日本だけでなく、東南アジアやオセアニアが含まれている。さらに、人間同士だけでなく、人間と自然との間など、さまざまなレベルの、さまざまな主体間の争いが描かれている。

本書を読んで、人間科学的な争いへのアプローチと、争いをめぐる問題の広がりや深さを実感し、新しい視点を獲得していただけることを願っている。

紹介：栗本 英世（名誉教授）

「シリーズ人間科学」第七巻『争う』編者

『シリーズ 人間科学』第八巻「住む・棲む」

(大阪大学出版会 2022年)

人間が自然的条件のなかで生きつづけるかぎり、何らかの住居をつくり、何らかの場所に馴染み、住む・棲むということは不可欠だ。よくいわれるように、生物としての人間は、自然のなかできわめて脆弱である。いかなる自然のなかにおかれても、人間はそのままでは風雪雨からも降り注ぐ日光からも、あるいは外敵（猛獣であれ、ウイルスであれ）からも身を守ることはできない。衣服とともに住居がないということは、定住民であれ、遊牧民であれありえない。ある場所に、ある環境に棲み着くことは、心理的にも必要である。

近代以前の人間は、その場その場の環境に強く依存しながら住居を形成し、棲み方を工夫してきた。ほとんどが木・藁・紙でできた日本の伝統的住居、大理石を積み上げた地中海からヨーロッパ文明を覆う住居群、繊細な北方ゴシック建築。砂漠では土や泥で、熱帯雨林では草と木で、それぞれの仕方で環境に適応した住居をつくり、それ自身がその共同体の「社会体制」を反映するものであっただろう。

だが二〇世紀以降、近代建築の祖とされるル・コルビュジエの作品がその代表とされるように、住居は決定的に非場所的・均質的なものとなっている。もちろんそれは、鉄材、ガラス、コンクリートを自由にあつかうテクノロジー的進歩の産物であるし、産業資本主義の進展にともなって、多くの労働者が都市に集約して住まざるをえなくなった帰結でもある。疑似ル・コルビュジエ的な、あるいはガラスを全面にだしたミース・ファン・デル・ローエ風味の建築物が、グローバル資本主義の進展、伝統的共同体の解体、ネオリベラル化にともなう核家族化や個人主義化とともに、上海でもドバイでも、ナイジェリアでも跳梁闊歩している。これは現代的な必然でもあり、また多様性の時代とされるにもかかわらず、こうした「全世界均質化」は、生活の細部におけるまでわれわれの「生」を「似たようなもの」として、しかも「他者」との分断において規定してしまう。

こうした「住居」は、さらにインターネットによる情報の流通やさまざまな移民化が速度を増して進展する将来、どのようになるのだろうか。あるいは、人新世の時代において、自然との調和や宇宙への居住が課題となるときに、それはどのようなものに変わりうるのだろうか。そして住む・棲むということが無意識に規定する自分自身の生、他者との関係、共同体のあり方は、住居の転変からどのように照らしだされるのだろうか。

本書は社会学、心理学、人類学、哲学思想の諸領域から以上の問いへの手立てを探るものである。もちろん以上の問いに「正解」はない。だが近代を経たポスト近代を生きなければならぬわれわれは、誰もが上記の問いに向きあわなければならないはずである。

紹介：檜垣 立哉（名誉教授）

「シリーズ人間科学」第八巻「住む・棲む」編集責任者